

つた。故に史家は、此後を帝政時代と云う。

当時ローマの版図は、東はユウフラテス河、西は大西洋、南はアフリカ、北はドナウ・ライン黒海辺に及び、古来の文明諸国を包有し勢強く、ローマの世界統一の思想は此頃から起った。

帝在位四十一年、外はゲルマニを伐ち・国境の守備を厳にし・殊に内治に意を用い・兵制を改め・風俗を正し道路を開き・水利を興し・都市を壯麗にし又文藝を奨励したので、後世に所謂「ラテン文学の黄金時代」を為した。イエスキリストの生れたのも此の時代の事である。

当時ローマ市の人口約百三十万、周回約八里、

帝曰く「朕は煉瓦のローマを受けて大理石のローマを遺せり」と。

●<sup>コガネ</sup>黄金のローマ 御代ひらけ……前27

(附記)

#### ローマの五善帝

紀元14年アウグスツス歿し、その後ネロ帝まで四代の間は、暴君相つき、殊にネロは暴虐尤も甚しかったが69年殺されて翌年ベスパシヤヌス帝が立つた。

その後ナルバ・トラヤヌス・バトリヤヌス・アントニウス・ピウス、マルクス・アウレリヤスの五善帝が立ち、版図大に増しローマ帝国の最盛をなした。

此中アウレリヤス帝は大秦王安敦と呼ばれて支那の後漢と交通した皇帝である。全帝歿後子、コンモツス継ぎ、不肖で政を失し、帝国漸く衰えるに至った。

(年記)

前4年 キリスト、ユダヤに生る

● 天地の光り……前4

全年 ユダヤのヘロデ大王死す

後9 ローマの将バルス、ゲルマニの酋長と戦い敗る

14 アウグスツス死(前60生) テベリウス帝立つ(一37)

## 32年 イエスキリストの死

イエスキリスト(耶蘇・基督)は、アウグスツスの始世中の紀元前四年、猶太のベテレヘムに生れた。父をジョセフ、母をマリヤと云う。年三十の頃猶太教に基いて、別に一家を開き、「神は唯一にして、父たる慈愛に富み、人類は皆同胞なれば相愛すべき由を説き、自ら救世主と称し世を救わんとした。然るに彼は時の人々に忌まれ、遂に十字架上に磔殺せられた。

○ 死のイエス 神に生き……32

(附記)

#### 基督教の弘通

キリスト死後弟子等熱心にその教を弘め、基督教は漸次天下に行われた。羅馬では歴代の皇帝之を邪教なりとて迫害したが効なく、人民益々之に帰依したので、コンスタンチヌス帝の時遂に之を公認した。又紀元325年小アジアのニケーヤに宗教會議を開いて信条を一定し、

アリウス派(基督は神に近き人ふりの説を排し

アタナシウス派(基督は神かり=キリスト・神・聖礼を同一と

（トリとする三位一体説）を以て正教と定めた。この後  
テオドシウス大帝の時、基督教を信じない者を嚴罰  
する令を出してから、此の教は漸次ローマ全帝国か  
ら西ヨーロッパ諸国に広まり、中古に及んで政治上、  
文化上の大勢力となった。

〔年記〕

64 ネロ王ローマを焼き、キリスト教徒を屠殺（キリスト教徒  
の迫害）  
69 ローマ帝ベスパシヤヌス立つ（-79）

79年 ベスビオ火山の破裂（ヘルラネウム及ポンペイ市を埋める）

○ 燃ゆる火の 煙を吐く山……79

96 ローマ帝ネルバ立つ（五善帝最初の帝）-98

98年 ローマ帝トラヤヌス立つ（-117）

○ ローマのトラ 世に立てり……98

114年 トラヤヌス、パルチヤ人を破る（ローマの版図最大）

○ いっちローマを 大きくしたり トラヤヌス……114

161年 ローマ帝 マルクス=アントニウス（大皇帝安敦）立つ（-180）

○ アントンが 光のローマ 負うて立ち……161

166 ローマと支那の交通開く（安敦の使臣に至る）

226頃 新ペルシヤ王国起る（ササン朝-641）

284年 羅馬帝、ジオクレチヤヌス立つ（-305）

ローマはトラヤヌス帝の時最大の版図となったが、第  
三世紀以後は、内に凡庸の君あり軍隊横暴にして皇帝の  
廢立を行い、財政困難となり、外には中亜のパルチヤ、  
のちササン朝のペルシヤに侵され、又ゲルマン民侵入し  
帝国大に衰れた。

此年ジオクレチヤヌス帝立ち頽勢を挽回せんとして、全国  
を四分し、各一人の君主を置き自らその一人として小亜  
細亜のニコメシヤに都し、全帝国を總括して專政し、国  
勢一時振った。

○ 傾いた 世もジオクレが 立て直し……284

〔年記〕

286 ローマ帝国二分（ジオクレチヤヌス東部を、マクシミヤヌス西部を統ぶ）

292 ローマ帝国四分（ローマ帝、東西西部に更に二人の副帝を置き分治）

308 コンスタンチヌス帝位に上る（ローマは六帝並立）

323年 コンスタンチヌス大帝のローマ統一（-337）

ジオクレチヤヌスの後、マクシミヤヌス継いだか天下は  
再び乱れた。

ローマの副帝コンスタンチヌスは306年立ってキリス  
ト教徒の迫害を禁じ 308年 帝位に登り遂に此年リキニ  
ウスを降しローマを統一した。

帝位に即いて後、文武官の職制を一新し、大勢に鑑み  
て基督教を公認し、ついでニケーヤに宗教會議を開きて  
アタナシウス派を正教と定め以て宗派の争を絶ち、330年  
都をビザンチウムに奠め之をコンスタンチノーブルと改称  
し銳意治を四つた。されば、その在位の中、ローマの国勢  
復興したが、これは燈火が消えようとして一時明るきが

如きもので、その歿後又内乱起り、外にはゲルマニヤ民族の侵入甚しく、遂にテオドシウス帝に至り、ローマは再び東西西部に分れるに至った。

○その国を コンスタンチウスが 定めけり……323

(年記)

325年 ニケーヤの宗教会議

○三位説 会で"勝った" ニケーヤの……323

330 コンスタンチヌス大帝が"ザンタウム"に集都し"コンスタンチヌス"と改む

364 ローマ帝国東西に分裂す

### 羅馬の文明

ギリシヤ人が文藝に対し独特の長所を持って居たに反し、ローマ人は実務に長じ

1. 祖先崇拜、皇帝を神とす
2. 不屈の精神に富む
3. 統一調和の能に富む
4. 法律思想發達す
5. 壮大な土木事業に長ず

争の特色があった為、政治、法律、外交、兵制、戦術、土木、建築等に後世の模範となった。

そしてよく希臘文明を輸入し、基督教と共に、その大模範に普及した事は見逃してならぬ。

- |    |   |  |
|----|---|--|
| 学藝 | { | 法律 - パピニウス、ウルピウス、ユスタチヌス帝の法典  |
|    |   | 文学 - バージル、ホラチウス、オビジウス(三詩人)、ケーザル  |
|    |   | 年論 - キケロ、ケーザル、アントニウス   |
|    |   | 史学 - タッキス(ゲルマン記有名) ケーザル  |
|    |   | 哲学 {   |
|    |   | ストア派 = セネカ、エピクテタス、アウレリヤス帝  |
|    |   | 新プラトン派 = プロクテノス、ブルターク  |
| 工藝 | { | 建築 (エトルリヤ式穹天井法とギリシヤの円柱法に更に工夫を加え、壮大、華麗、堅牢<br>即ち 神殿、劇場(コロシウム) 競技場、浴場、凱門) |
|    |   | 土木 = 軍道、水道、橋梁、港湾修築   |

## 第二史期

### 375年 ゲルマニヤ民族大移動の始

羅馬帝国の北に、ゲルマニヤ諸民族が住居し、未開で戦いを好み、既に度々ローマ帝国の北辺に出没し、或は帝国内に定住し、傭兵とあつて帝国の防禦に任ずる者も少くなかった。然るに四世紀の後半、黒海北部地方に居住して居た蒙古種(フン)族が西方に移り来たので、ゲルマニヤ部族なる東ゴート 西ゴートはその襲撃に堪えず、東ゴートは多く之に降り、西ゴートは此年ローマ皇帝の許可を得て、ドナウ河南の地モエシヤ指して移住した。

此ルゲルマニヤ族大移動の始である。

○避けたフン モエシヤ指して 逃北行く……375

(附記)

ゲルマニヤ民族 はもとスカンジナビヤ半島に住み、のち北ヨーロッパ及中部ヨーロッパに蔓延した蛮族で、農牧を業とし 戦を好んだ。

うち、東ゴート、西ゴート、フランク、アングル、サクス、ノルマン、ランゴバルト、フンク、ゴルド、バングル等に分れた。

(年記)

376 フン族 ホンガリヤに侵入す

394 テオドシウス一世(大帝)ローマ帝国を統一す

### 395年 ローマ帝国東西に分る

羅馬では、紀元337年、コンスタンチヌス大帝が歿し

てから、その三子各々国を三分し内乱あり、且つゲルマニヤ民族の侵入により国々に衰えたが、394年テオドシウス大帝之を統一した。

然るに大帝は時勢に見て国の長く保ち難いのを察し、此年帝国を二分し、長子アルカジウスを東部に封じて、コンスタンチノーブルに都せしめ、次子ホノリウスを西部に封じて羅馬に都せしめた。是からローマ帝国は長く東西に分れた。

○ 先のふい ローマは遂に 西東……395

(年記)

401. 西ゴート王アラリック伊太利を侵す

410 アラリック羅馬を陥る

415年 西ゴート王国建つ (507)

フン族西侵の際、ドナウ河南に移り、ローマの国境防備に当った西ゴートは間もなくローマと争い、其王アラリックの時頻りに伊太利を侵し遂に羅馬に入った。

羅馬帝ガリヤの戍兵を召還してそれを防ぎ、之がため同方面の守備が緩んだので、ライン河辺のゲルマニヤ族亦之に乗じて移動を始め、フランク族ガリヤの北部に侵入しブルグンド、バンダル等の諸族亦西遷し、やがてバンダルは遠く西班牙に入った。

西ゴート遂に西進し、バンダル族を西班牙から逐い斥け、此年ガリヤの南部を併せて西ゴート王国を建てた。

○ 地はガリヤ 王国建てた 西ゴート……415

429年 バンダル王国建つ (アフリカに—534)

バンダル族はローマ国境の守備の弛んだのに乗じて始め西班牙(今の北独逸)に入ったが、やがて西ゴートに逐われ、のちアフリカ北岸のローマ領即ち昔のカルタゴの地に移り、此年バンダル王国を建て、地中海の諸島をも征服した。しかし此後(534年)東ローマの將ベリサリウスに征服せられた。

○ 立つて行く 国はアフリカ ローマ領……429

449年 アングル人・サクスのブリタニヤ侵入

アングル人・サクス人・ジュート人等は元、ゲルマニヤ族に出で、今の独逸の北部、丁抹辺に居た種族であるが此年傾海を渡ってブリタニヤ(英蘭の地)に侵入し、ブリトン人を逐うて其地に拠り七王国を建てた。

これ英人の祖で、中にもアングル人が尤も勢力を得た。

○ 強いのに 取られブリトン 流浪をし……449

(年記)

451年 カタラウヌムの戦 (シヤロン附近)  
(西ローマの將エーテウス等フン族アッテラを破る)

○ 立つアッテラ 何のヘテマの エーテウス……451

### 476年 西ローマ帝国の滅亡

西ローマ帝国は其後バンダル王ガイゼリックの侵略を蒙って大に衰え、ゲルマニヤ傭兵を以て守備に当て、から政権はゲルマニヤ人の手に帰したが、此年傭兵の主領オドアケルは、遂に皇帝ロムルス=アウグスツルスを廢して自立し自ら伊太利王と称した。こゝに於て西ローマ帝国は名実共に滅んだ。

○ カ尽き 先ず西ローマ 亡びけり……476

(附記)

#### バンダリスム

ガイゼリックは目的の爲には手段を擇ばず又人情のために、目的を変えることなど嗜み、蛮人王であつたからバンダルの名は天下の恐とあり、今日までも破壊の爲の破壊をしたり貴重なる美術品を滅却したりする蛮行を「バンダリスム」と云ふようにあつた。

### 486年 フランク王国建つ

ゲルマニヤ民族中、フランク族は、その移動時代に当りガリヤの北部即ち今の白耳義及び北フランス地方に住んで居たが、酋長クロービスはフランク諸部を統一し、此年もとのローマの知事シャグリウスと戦ひ勝つてその

領地を奪ひ、フランク王国を建設した。此れメロビス朝の始祖である。メロビスとはその祖先の名によつて名けたものである。

○ 立上り やつと王国 フランクに……486

### 493年 東ゴート王国建つ (一555)

東ゴートはフン族の領土崩解の後ドナウ河畔に独立した。テオドリック王の時、東ローマ皇帝ゼノの承諾を得て、パノニヤから伊太利に南下し、紀元489年伊太利王オドアケルを破り之をラベンナに囲み、包囲三年、此年遂に之を陥れてオドアケルを殺し、東ゴート王国を伊太利に建てラベンナに都した。

○ テオドリが ラベンナに勝ち 栄え行く……493

(附記)

#### 希羅文明の行衛

テオドリックは大に希臘、羅馬の文化を尊重し、その維持につとめたが、555年その国が亡びてからは、希・羅の文明光を失うに至つた。

(年記)

508 巴黎フランクの首府とあるオボアチエーの戦 (フランク人西ゴートを破る)

### 527年 ユスチニヤヌス大帝即位 (565)

東ローマ帝国は分立以来内憂外患に苦んだが、此年ユスチニヤヌス大帝位に即き國勢大に振つた。即ち帝は即ち

位後勵精治を圖り、内には党争を絶ち、アリウス派、ネストリウス派(景教派)を斥けて宗教上の争を定め、有名なるローマ法典を編み、支那から養蚕の法を傳えて産業を興し、城塞を築き国防を嚴にし、又壯麗なセント・ソフィヤの会堂を起し、外には大帝国再建の理想を実現せんとして名將ベリサリウスを遣してバンダル王国、東ゴート王国を滅して其地を併じ、又西ゴート王国を征して西班牙の南部を奪い、其後將軍ナルセスをして東ゴート王国を征せしめ之を併せた。

かくて東ローマ帝国の威名一時大に振ったが、565年帝歿して国運衰え、ロンバルディア人は北部伊太利をとって王国を建て、アフリカ・西班牙の新領又相ついで他に奪われた。

○名も高き 君ユスチニヤヌス 皆仰ぎ……527

(附記)

皇后テオドラ

帝の皇后テオドラは元女優であつたが、帝あげて皇后とした。才色兼備、内助の功あり、終生帝に侍した。(508-548)

534年 ヌスチニヤヌス法典成る

ユスチニヤヌス大帝は、紀元528年トリポニヤヌス以下十六人の法学者に命じて、羅馬歴代の勅令・法律及び

判決例等を蒐集し類別して法典を編みしめ 529年四月一旦之を公布し後増補して此年完成した。

之をユスチニヤヌス法典と云い、今に傳わる名高い羅馬法が即ちこれである。

○後の世も その法典を 宝にし……534

(年記)

534 バンダル王国滅ぼさる

540 東ゴート王国亡

565 エスチニヤヌス大帝歿す

571年 回教の祖 マホメット生る(-632)

○野の光 メッカに君が 生る日……571

575 東アングリヤ王国とあり、アングルランドと稱す  
(イングランドの名の起り)

590年 ローマ法王 グレゴリイ一世立つ(-604)  
(ローマ法王の起原)

歐羅巴中古の歴史で著しい事は、ゲルマニヤ民族の大移動と、キリスト教の全盛とである。そしてローマ法王ある一つのキリスト教の主宰者ができ、勢高くその後長く歐洲の諸君主もその下風に立つ有様とあつた。

法王は如何にして起つたかを見るに、はじめ東ローマ帝国は希臘文化を傳えたから一に希臘帝国とも云うが、ユスチニヤヌス帝歿後国内麻の如く乱れ、且つ東よりサラセン、北よりアバール人、マジヤール人入り國が衰え

て伊太利方面を顧る余力なく遂にローマ法王の独立を促すに至ったのである。

キリスト教は本来平等主義で、教会にも僧侶間にも階級の別はなかったが、時と共に漸次ローマ帝国内に五本山ができるようになった。ローマ・コンスタンチノーブル・アンタオキヤ・エルサレム・アレキサンドリヤの五ヶ所がこれである。のちサラセン起るに及び、五本山中ローマとコンスタンチノーブルのみ侵略を免れ、中にもローマは管長に傑物多く、特にグレゴリー一世は、ゲルマニ布教に尽力して成績あがり、又羅馬の地は使徒ペートル、ポール等の殉教地として尊崇され、羅馬本山管長の権次第に加わり、遂に東ローマ皇帝から自立するに至った。而して各管長を呼んだパパス (Papas=父の義) の称は、此頃から専らローマの管長にのみ慣用され、遂に法王 (Pope) の意とあつた。

○名のる法王 ローマの外は 忘れられ……590

(附記)

希臘正教と羅馬正教の分離

キリスト教では偶像を拜しない。然るに中世に至り、該教弘布の方便として、偶像崇拜の風が漸く起つた。東ローマ皇帝レオ三世は 紀元726年之が禁止令を發布し、一方ローマ法王之に反対し紛争十数年、法王は遂にフランク王と結び希臘皇帝と絶つた。これから東方の希臘正教と、西方の羅馬正教とは永く離れるに至つた。

(年記)

- 590 マホメットの宣教
- 604 ローマ法王グレゴリー一世死す
- 610 マホメット回教を弘む

622年 マホメットの遁走 (ヘジラ)

(回教徒の紀元元年7月16日)

サラセン人 (東方人の義) は、アラビヤの住民で、遊牧と隊商を業とし多くの種族に分れ、割拠して相反目して居たが、マホメットが出て新宗教を闢き半島を統一した。

マホメット (摩訶末) はメッカに生れ長じて隊商となりシリヤ地方に行商したが、当時アラビヤの宗教の混沌として統一のないのを慨き、猶太・基督の西教義を参酌して四十歳の時遂に唯一神 (Allah) を信仰する一神教を創めた。これをイスラム教と云い、回教又はマホメット教とも云う。而して彼自ら神の預言者と称したが当時サラセンは多神教を奉じて居たので、メッカ市民の迫害を受け、此年七月ついに難を北方メジナに避けた。回教徒は之をヘジラ (遁走の義) と称し此年を紀元元年として居る。

○ヘジラをば 回教徒等は 紀元にし……622

(年記)

- 627 ⑫ニネベの戦 (東ローマ、ペルシヤ軍を破る)
- 629 マホメット、メッカを征服し、パレスチナを侵す

## 632年 マホメットの死

ヘジラの後マホメットは武力を以て先ずメッカを攻め取り次でアラビヤ半島を征服して、政教両権を一身に總べ、此年遂に没した。

その後法徒等によってイスラム教の聖典コーランが編まれた。之はその神託又は訓言等一千余篇を録し、それに戒律などもあげてある。

○ 法徒等が 死後に集めた コーラン經---632

(年記)

- 641 ネハベントの戦(サラセン、ペルシヤを滅す)
- 661 サラセンのモアビヤ、オンマヤ朝を始む(-750)  
(マホメットの正統絶ゆ)
- 687 フランク王国の宮宰ピピン全権を握る
- 697 サラセン人、カルタゴ掠奪(ローマ地中海南岸を迂る)
- 711 サラセン人 西班牙を征服し、西ゴート王国滅ぶ

726年 レオ三世帝、偶像礼拝禁止令を出す

○ 皆偶像を こわせとレオが 布令てけり---726

## 732年 サラセンの侵略

(ツール及びポアチエーの戦)

マホメットの継業者をカリフ(相續者)と称え、代々始祖の志をつぎ癡りに侵略的布教に努めた。彼等は即ちコーランを左にし、劍戟を右にし、「コーランを信ぜば然らざれば朝貢せよ、兩者一を背んぜずんば劍戟を加えん」と。

向う所敵ふし、殊に次代のカリフ オーマル英邁にして雄略あり、メソポタミヤを征し、波斯を滅し、唐と修交し、埃及を攻略した。

その後マホメットの正統絶え、オンマヤ朝(661-750)起りて都をダマスクに移し、中央アジアを取り、印度を侵した。又基督教国を征服せんとし、東方ではコンスタンチノープルを包囲すること六年、抜けず。西はアフリカ北岸を従え711年ジブラルタル海峡を渡って西班牙に入り、西ゴート王国を滅した。

サラセン軍は更に進んでフランク王国に攻入ったが、その宮宰チャールスマルマルの為に此年ツール、ポアチエー間に破られ、又一方東ローマに迫った軍は皇弟レオ三世に破られ、北進の鋒こゝに挫けた。

○ マルテルに サラセン軍は 粉みじん---732

(註) マルテルとは「搥」の義で、チャールスが鉄槌の如き勢を以て異教徒をツールに打砕いたのを人々が讚美して名けたのだと云う。

(附記)

### 1. サラセン帝国の分裂(東西カリフの対立)

#### (ア) オンマヤ朝

マホメットの正統絶えて後ダマスクに都し諸方侵略、

#### (イ) アッバス朝(東カリフ国)

750年 アブル=アッバスがオンマヤ朝を滅して此朝を立て、都をバグダードに奠めた。八世紀末 ハルン=アル=ラシッドの時、商工業、学藝大に興った。



(ウ) 西カリフ国

オンマヤ朝の一族 アブ・デル・ラーマン が 西班牙 の コルドバ に自立したので、755年 サラセン帝国 は 東西二部 に分裂した。その都 グラナダ にある アルハンブラ宮殿 は 壮麗無比。

2. サラセンの文化

(ア) 黄金時代

東西両カリフとも 学藝を奨励 したので、文化大に起り、八世紀後半 から 九世紀 に入り、その文化は 遙かに基督教国 の上にあつた。

中には 東カリフ の ハルン=アル=ラシッド の世を以て 「サラセン文化の黄金時代」 と称す。

学藝は 算学、理化学、天文学、地理学、医学 等で 裝飾四象 等は特に秀で、居た。

又、アラビア数字 は サラセン人の発明 であり、文学上 には アラビヤンナイト などを生んだ。

(イ) 文化傳播

交通開け、唇・印度・地中海諸島・エジプト・西班牙 等と貿易、十字軍 により その文明西欧 に傳つた。

751年 ピピン、フランク王位 に登る

(カロルス王朝 起る)

フランク人 は 移住後ガリヤ地方 に居たが、クロビス朝 の時 全族を統一 して フランク王国 を建て パリ に都した。

これ メロヴィンガ朝 である。

のち 国王の実権 は 宮宰 に移り、特に チャールス=マルテル が サラセン人を撃破 してから、勢益々盛 となり、その子 ピピン は遂に 此年、国王とルデリッヒ を廢して 自立 し、こゝに カロルス王朝 を創めた。

○ メロビス朝 除けて ピピン が 王 になり……751!

(附記)

法王領の起原 (755年)

ピピン が自立した時、法王 は ロンバルジャ人の来寇 に備えるため、ピピンの即位 を認め、之と 結託 した。

ピピン 之を 徳 とし、此年 ローマ に追つた ロンバルジャ人 を討つて 其地を奪 り、ラベンナ (伊太利) を 法王 に獻じた。こゝが 法王領の起原 である。

(年記)

756年 サラセン 東西に分る (前年と見る人あり)

○ 身二つに 分つて サラセン 東西……756

768 チャールス大帝 及 カールマン 立つ (フランク王国 分裂)

771 チャールス大帝 フランク王国 を統一す

774 チャールス大帝 ロンバルジャ王国 を亡し、イタリア 王とぶる

786年 ハルン=アル=ラシッド 立つ (バグダード 教主)  
(サラセンの黄金時代)—809

○ 御榮え を 呼んで サラサ に ハルン 立ち……786

789 ノルマン 始めて 英国 に寇す

792年 パリ 大学の創設

○ 学び舎 の 煉瓦 パリ に 輝いて……792

800年 チャールス大帝、西ローマ皇帝 となる  
(西ローマ帝国 の再興)

ピピン の子 チャールス大帝 は 768年 フランク王位 をつぎ 雄略 あり、先ず ロンバルジャ王国 を滅して 伊太利王 を兼ね、西班牙 の サラセン を討つて エプロ河北 を取り、屢々 サクス人 を征して之を服し、スラブ人 を攻めて ボヘミヤ

を取りバール人を逐うてドナウ河畔に至り、その治世的  
四十年間に五十三回の征戦を爲し、其版図東はドナウ、  
エルベ両河から、西は太平洋に達した。

帝は一方法王レオ三世と結び、その領地を拓め、基督  
教の弘布に努めた。法王之を徳とし、此年チャールス大  
帝がローマに行くとレオ三世は之に帝冠を興えて西ロー  
マ皇帝と称せしめた。

○安らかに 笑うチャールス 我が光り……800

(附記)

チャールス大帝の内治

チャールス大帝は者アをアーンに奠め、その版図を国郡、及  
び半領に分ち侯伯及び僧正に之を統治せしめ、毎年5月  
之を召集して新法を頒ち政治を議せしめた。之を五月野  
(May-field)と云い、独逸民族立憲制度の起原である。  
又時々監査官を遣つて不祥を檢せしめ、又学校を建て、実  
業を奨めたので、ゲルマニヤ人移住後の 暗黒界島に再び  
文明の曙光を見るに至った。

(年記)

809 ハルソーアル・ラシッド 死す

814 チャールス大帝歿す、子ルイ一世嗣ぐ(一840)

827 エグバート、七王国を統一してイギリス王国の基を開く  
(ノルマンの活動)

○やがてこれ 国イギリスの 基なり……827

843年 ベルダン条約成る  
(フランク王国 三分す)

紀元814年 チャールス大帝歿し、子ルイ位を継ぐ。

元来フランク族は、長子相続の制なく、諸子分頭相続法  
が行われて居たが、840年フランク王ルイ歿し、その三  
子互に事を争ったので、此年ベルダン条約成り、帝国を  
三分し、長子ロタールは帝号を称してライン河域及伊太  
利を取り、次子ルイは東部フランクを、末子チャールス  
は西部フランクを得た。

○やがて又 チャールスの後 三分し……843

(附記)

メルセン条約(独逸、佛蘭西、伊太利の起原)

ベルダン条約によつて三分された帝国は、起原855年  
ロタール一世の歿後、遺領につき争起り、此年メルセン条  
約によつて、ルイとチャールス二世とは中部フランクを分割  
し、ロタール一世の子ルイ二世は伊太利を領する事とあつたので、  
帝国は、東西フランクと伊太利とに三分され後の独逸、佛蘭  
西、伊太利の起原をあすに至った。

○チャールス大帝ルイ I {  
    ロタール I - ルイ II ..... (伊太利)  
    ルイ (東フランク王) ..... (独逸)  
    チャールス II (西フランク王) ..... (佛蘭西)

即ち、東フランクは後の独逸で、911年カロルス朝絶え、其後国  
王は選挙制とあつた。

西フランクは987年カロルス朝絶えフランス侯、コーク=カペ  
(Hugh Capet) 即位、巴黎に奠都した。フランスはこれから  
起つた。

862年 - 露西亞の建国

ノルマン人はゲルマニヤの一族で、スカンジナビヤ半  
島及び丁抹地方に住し勇敢で航海に長じて居た。その一  
族である瑞典ウルス人は酋長ルーリックに従つて今の露

西亜の西北部に入り、その地のスラブ人の内乱に乗じ之を征服して、此年都をノブゴロドに集め、露西亜の國の基を固めた。

○ やがて露には入ったノルマン 國を建て……862

(附記)

ルーリックの子孫 益々広くスラブ族を征服し、後遂に南遷してキエフに集都し、その版図頗る大とふった。

(年記)

870年 メルセン条約成る (フランク王国三分)

○ 世は三つに メルセン約で 分れけり……870

871 イギリス王アルフレッド大王即位

901 アルフレッド大王死し、エドワード即位(一925)

910年 オクスフォード大学の創設

○ 有史ある オクスフォードの 考録……910

911年 東フランク選挙王制とふる  
(カロルス朝絶ゆ)

○ 埃が動く 王は選挙で 選ぶゆえ……911

911年 ノルマンジー公國の起原

ノルマン人は早くからフランク王国に侵入した。東フランク王国は之を逐けたが、西フランク王国は全く防禦に苦み、此年国王ケネールスは遂にノルマンの酋長ロロに其女を嫁せ、且フセーヌ河下流一帯の地を與えてノルマンジー公とふし和を結んだ。

これからノルマンの一部は全く此処に定住し、漸次フランクの宗教風俗に同化した。

○ ロロ殿と 縁を結んで 意を強め……911

(年記)

915 ケンブリッジ大学の創設

936 オットー一世ドイツ王とふる

962年 神聖ローマ帝國起る

(オットー一世西ローマの帝冠を受く)

東フランク王国、即ち独逸では、紀元936年、オットー一世王位に即き、諸侯の領土を削って親族を要地に封じ王権を重くし、ついで兵を出して西フランク王国即ち佛蘭西を侵し、ボヘミヤ・波蘭を降し、丁抹人及びマジヤール人を破り、又伊太利を平定して羅馬法王を援けたので、法王之を賞し、此年オットーに神聖ローマ皇帝の冠を捧げて伊太利王を兼ねしめた。これ實に神聖ローマ帝國の始で、その後久しく独逸王は、この帝位に即く資格を保ち、國威大に揚った。

○ ロマ法王 褒美オットに 與れてやり……962

(年記)

987年 フランス王國の起り (カペー王朝)

(パリエユグーカペー王位に即く)

○ 聯合で 世をカペー家に もつて来る……987

1017年 丁抹王カヌートイギリス王とある

▲ 我がカヌート イギリス王と 皆仰ぎ……1017

(注意) 千年代の年代おほ"え句には皆"の冠"と附けて呼ぶのた"が伊宜上省いてある。

イングランド"じゃ わいわい騒ぎ" 鬼のカヌート 皆恐れ……1017

1035 カヌート大王死す

1066年 ノルマンの英蘭征服 (ヘースチングスの戦)

(ノルマンジー公ウイリヤム、イギリス王とある)

さきにアングロ・サクソン人の建てた七王国は、九世紀の始 エクバート王に統一せられ英蘭王国とふつた。

孫 アルフレッド大王の時 海軍を創め、学問を奨励し、国勢振ったが、ノルマンの一派あるデーン人常に国を侵し、その勢力退け難く、内地に移住を許して之と和した。

其後ノルマンの勢力益々強く、その王カヌートは1016年遂に英蘭を併呑し、瑞典、ノルウェーを兼治し北歐に雄視した。

尔来二十余年間、英蘭はノルマン治下にあつたが、其後旧王党のエドワードを王とした。此王歿後ノルマンジー公ウイリヤム一世は、自ら王位継承権ありと云い、法王の許を得、此年大挙来り侵し、十月ヘースチングス戦に勝つて遂に王位に登りノルマン朝の始祖とふつた。

之をノルマンの英蘭征服と云う。

これからノルマン、アングロサクソン両民族の血統、言語、風習漸く融合して近世のイギリス国民とふつた。

▲ 我が勝ちと ぶれるノルマン ヘースチングス……1066

イングランドを 割るノルマンは ハズルド滅し 光り出る……1066

(年記)

1073 法王グレゴリイ七世立 (一〇八五)

1076 グレゴリイ七世、ヘンリー四世帝を 破門す

1077年 ヘンリー四世 カノッサの屈辱

(法王と独逸王との衝突)

これまで法王と独逸王とは相互に助け合つて来たが、其後代々の独逸王の天下一統の理想と法王の勢力拡張とが遂に相衝突するに至つた。

紀元1073年、もと微賤に起つて大志のあつたグレゴリイ七世が立つて法王とあつたが、彼は基督教の勢力が今や上下に洽く行渡つたのに集じ、皇帝の上に在つて世界に号令しようと思ひ、先ず教会内を廓清し次で皇帝の僧官任命権を奪つた。

独逸王ヘンリー四世大に怒り、宗教会議に於て法王を廢せんとしたので、グレゴリイ七世は1076年王を破門し尙「ドイツ国民は国王に対して服従の義務なし」と宣

言した。

之を機として諸侯の國王に反く者が多かったので、ヘンリー四世大に窮し、遂に此年正月、自ら伊太利のカノッサ城に法王を訪い、脱帽跣足、風寒く雪深い門前に立つて哀を請ふこと三日、やっと破門を許された。

▲ 言乞ひに来て 三日三晩を 門で泣き…1077

縁を断たれて 言乞ひするヘンリー 三日三晩を 門で泣く…1077

(附記)

#### 法王権全盛

グレゴリイ七世の後、ドイツ・イタリアの諸侯はギベリン(皇帝党) ゲルフ(法王党)の二派に分れ数十年の間争つたが、結局法王党勢まさり、十三世紀の始、即ち法王インノセント三世の時、法王権全盛となり、全欧の帝王を左右するに至った。

(年記)

1092 セルジュツク-トルコの分裂

1095 法王ウルバン二世 聖地回復の爲、宗教会議をクレルモンに開く。ポルトガル建国

#### 1096年 第一回十字軍起る (-1099)

サラセンの東西両カリフ国次第に衰え、埃及にはファタマ朝のカリフ国独立し、西班牙にもカステラ・アラゴン・レオン等の基督教国が起った。

時にカスピ海の辺にトルコ人の一派セルジュツク族が居り、サラセンの衰えに乘じ 1058年遂にバグダードを

陥れてその政権を奪い進んでシリヤ、パレスチナを征服し、轉じてコンスタンチノープルに迫った。

さて西欧諸国では夙にエルサレムの聖墓巡礼の風が行われ、サラセンが先にパレスチナを領した時も、商利を喜んで巡礼者を歓迎したが、今やセルジュツク土耳其人は聖墓巡礼者を虐待し、進んで東ローマを侵略したため同皇帝はローマ法王に援を求めた。

これより前、佛国アミアンの僧ピーターは、聖地の惨状を目撃して帰り、露頭跣足その状を訴えて民心を激発させたので法王ウルバン二世は、1095年貴族・僧侶等を佛国のクレルモンに会して聖地回復の急務を叫んだ時、衆皆感激して従軍を誓い、翌年八月出征と定めた。

定めの時が来た。即ち此年八月、ロートリンゲン公おるジェフリイを始め、ロバート等主として佛蘭西の武士から成る第一回十字軍凡そ三十万人征途に上り、コンスタンチノープルから小亜細亞に入り多大の困苦を冒したが遂に1099年エルサレムを回復してエルサレム王国を建て、ジェフリイを遣めて聖墓保護の任に当らしめ軍を班した。

此役従軍者は皆右肩に赤十字の布片を附けて居たから

十字軍と呼ばれた。

▲ 我れ勝に 聖地に向う フランス兵……1096

愛の十字を 我が血に染めよと 聖地守るべく 人が湧く……1096

(年記)

1099 ⑦ 十字軍 エルサレムを回復す。(エルサレム王国成立) 1099

1100 聖地保護者 ジェフリー 死す

1144 ゴジック派の建築盛んに行わる。オトルコ人エルサレムに迫る

1147年 第二回十字軍起る (-1149)

その後トルコ人又勢力を回復し、屢々エルサレムに迫つたので、独逸皇帝コンラッド三世、佛蘭西王ルイ七世は、此年第二回十字軍を起し征途に就いたが、小亜細亞で敗れ、空しく帰国した。

▲ エルサレム 尽きぬ恨に 又燃えて……1147

エルサレムえと 打ち出てけりし 尽きぬ恨に 又燃えて……1147

1189年 第三回十字軍起る (-1192)

その後トルコの勢強く、サラジンと云う者、埃及に起り、1187年 エルサレム王国を滅ぼしたので、独帝フレデリック一世、佛王フィリップ二世等は英王リチャード一世と共に之を回復せんと、此年第三回十字軍を起したが、フレデリックは途中に歿し、英佛両国王は事により相争み、フィリップ二世先ず帰り、リチャード一世は遂にサラ

ジンと休戦し、基督教徒の聖地巡拜の自由を得て軍を還した。

▲ イギリスも 呼んで独佛 聯合し……1189

仇を伐つべく イギリスなども 呼んで独佛 聯合し……1189

(附記)

### 1. その後の十字軍

(ア) 第四回 (1202-1204)

法王インノセント三世の命により、独・佛・伊三国の諸侯武士出征したが、途中キリシヤ帝国の内乱に干渉してその領土を奪ひ、ラテン帝国を建設して、目的を遂げず帰国

(イ) 小兒十字軍 (1212)

独佛の小兒數万遠征したが、奸商の餌となり、埃及、アレキサンドリア等で大部分奴隷にされた。

(ウ) 第五回 (1228-1229)

独帝フレデリック二世等の軍により一時エルサレム回復

(エ) 第六回 (1248-1254)

仏王ルイ九世等の軍が向つた。

(オ) 第七回 (1270-)

仏王ルイ九世等が向つたが効力はあつた。

### 2. 十字軍の結果

(ア) 宗教熱冷め 法王権失墜 (宗教改革の遠因)

(イ) 従軍將士死没の爲、封建制度衰微 (三権伸張の因)

(ウ) 東西交通の結果地理上の知識開け、東ローマ・サラセン文明の西傳 (新大陸発見、文藝復興の遠因)

(エ) 交通貿易の発展、殊に伊太利諸市、ヒサ・ベニス・ゼノア・フロレンス等栄えた (自由都市の発達)

(年記)

1198 法王インノセント三世位に即ぐ

1202 第四回十字軍起る (-1204)

1204 東ローマ帝国(キリシヤ帝国)亡ぶ。ラテン帝国建設(-1261)

1212 小兒十字軍起る

1213 英王ジョン法王に屈す

## 1215年 イギリス大憲章成る

英蘭では十二世紀の中頃、ノルマン王朝絶え、佛蘭西のアンジュー伯入って王位をつぎ、ヘンリイ二世と云いプラントジネット朝を開いた。よって英蘭王の所領は、佛のノルマンジー以南、西班牙の国境に達し、遙にフランス王の上に出た。

然るに其子ジョン王は佛のフィリップ二世と争いノルマンジー等を失い、又法王インノセント三世と争って之に屈し英蘭全土を法王に獻じてその怒を解き更に法王から之を封土として受けるふど国威を傷けること甚しく、内には国民に重税を課し、無罪を禁錮する等の暴政があったので、此年貴族・僧侶等は王に迫って彼等の起草した大憲章(Magna Charta)に署名させ、以て人民の生命・財産の安固を保証せしめた。これ英国憲法の基である。

▲ 憲章に イギリス王の 名書きさせ……1215

イングランドの 憲章認め <sup>オカ</sup> 愚、ジョン王 名書きする……1215

(年記)

1224 カルカ河畔の戦(モンゴル人南ロシアの諸族を破る)

1228 第五回十字軍起る(-1229)

1236 蒙古軍拔都、ロシアに侵入す

## 1241年 リークニッツの戦(ワールスタットの戦) (蒙古の侵略)

東ローマ帝国、内憂外患に苦みその国力の衰えた十二世紀末、蒙古人の酋長 鉄木真興って垂細臣の大部を征服し、のち哲別、<sup>ツェベ</sup>速不台<sup>スブタイ</sup>を遣り南ロシアを侵さしめた。

ついで<sup>パッ</sup>拔都又太宗の命を受けてロシアに入り、モスクウ、キエフを取り進んでシレシヤに入り、此年リーグニッツに於て大に独逸・波蘭聯合軍と破り政權臣人を震駭せしめた。

此戦をワールスタット(戦場の意)の戦とも云うのは、シレシヤ公ハインリッヒの戦死した一村に名けた名に因つてである。

▲ 喧嘩には 強いと拔都の うめさをし……1241

賣った喧嘩を 買つては見たが 強い拔都には おどけづく……1241

(附記)

欽察汗国と伊兒汗国

此戦の後拔都は遼んで匈牙利を荒し、軍を旋して黒海の北にキプチャク汗国を建て、ロシアの諸侯国を従えた。

その後蒙古の將 フラグ(旭烈兀) 西アジアを侵し1258年 バグダードのカリフ国を滅し、シリア・小アジアを略し、ま

其の征服地にイル汗国を建てた。

(東洋史の 抜都の西征と、旭烈兀の西征の項参照)

## 1241年 ハンザ同盟の成立

十字軍の結果として自治権をもち、領主の誅求を免れた自由都市が多くなった。是等の都市が自衛上更に互に同盟したものに、ロンバルディア都市同盟(ミラノ中心)ライン都市同盟、スワビア都市同盟(南ドイツ)ハンザ同盟(北独)などがある。

中にも優勢なハンザ同盟は、此年リューベック・ハンブルグ・ブレーメンを盟主として組織されたもので、始は海戦を防ぐ為であったが、後には領主の支配を脱し、陸海軍を有し、北欧の商權を握って富強王侯を凌ぐに至った。實にその盛時にはロシアからバルト海沿岸オランダ地方まで八十余の都市が此の同盟に加入したが、十五世紀末、葡西兩國の海邊事業盛となりその勢漸く衰え、1648年の三十年戦役後遂に解散することゝあった。ハンザとは組合の義である。

▲ 組合の 都市が同盟 腕を張る……1241

腕組合せて 彼の<sup>カ</sup>ゲルマンの 都市が同盟 威を振う……1241

(年記)

六 1242 欽察汗国建つ

1250(-1273) ドイツ大空位時代

1258 ハクダード・ッサラセン滅亡の伊兒汗国建設

1261 ラテン帝国の滅亡(東ローマ帝国再興)

## 1265年 英国議會下院の起原

英蘭王ジョンの子ヘンリー三世も亦暗愚で外人を寵用し大憲章を無視したので、シモン・ド・モンフォール等王に *Simon de Montfort* 迫り、1265年貴族・僧侶の外、州市の代表者を集めて議會を開かしめ国王をして大憲章を実行する事を誓わしめた。これ英国議會下院の起原である。

▲ 會議制 ヘンリー王に ねたるなり……1265

イングランドに 會議の制を ヘンリー三世に ねだつて……1265

## 1271年 マルコ・ポロ東洋歴遊に出る

マルコ・ポロは伊太利ベニスの人で、東洋漫遊を思ひ立ち、此年出発して支那に来たのは1275年、それから元に仕えて在留十七年伊太利に帰着したのは1295年である。晩年東方見聞録を著し、日本・支那・印度等の風土人情等を西洋に紹介した。後年新地発見熱の起るのは之が刺戟によるものが多いと云う。

▲ 国を出る マルコは旅を 祈りつゝ……1271

今は去るべき 故郷の土を マルコ・ポロが 音に踏む……1271



(附記)

東方見聞録の一節

その日本 (Gipangu) に就ての記事の一節に曰く  
ジパングは、大洋の東方にある島国で、大陸を距ること  
一千五百里、地広く、民体色白く、容貌は端正優美、且  
開明の度に達して居る。  
宗教は偶像教で、独立の政体を有し、嘗て外國のいましめ  
を受けた事がない。

此国黄金に富み殆ど無尽蔵、悉くに国王が嚴にその輸出  
を禁じて居ると、大陸を遠く離れて 外商の来るもの殆ど  
稀ふの事に因る。

国王の 宮殿は我國の寺院の屋根が 鉛板で葺かれて居る  
ように、純良の 黄金の 延板を以て 葺かれ、殿内の 窓其他  
の部分も亦黄金で造られ、その 結構の 美しく 價の 莫大  
あること 吾人の 想像の 及ばない程だと云う。

(注意) 東洋史 1295年 マルコ・ポロ 伊太利帰着の項を見よ

(年記)

- 1272 十字軍止む (英王エドワード 遂に聖地を棄つ)
- 1273 ハプスブルグ王朝起る。ルドルフ 独逸王に選ばれる
- 1276 ルドルフ一世 ボヘミアを破り、その 境 太利領事を従す

1291年 十字軍終る (キリスト教徒全く アジヤ領土を失ふ)

▲ 此年に十字の 亂 終りけり うやむやに……1291

赤いクロスの 心も倦んで 亂は終った うやむやに……1291

- 1292 スイス 聯邦 建國
- 1299 オスマン 土 耳 古 の 興 起
- 1300 眼鏡の發明

1302年 フランス三部会の始

(フランス王權の発達)

フランスでは 987年 ユーグ・カペーが君臨して、カペー  
一朝を隔いてから數百年全ち、列侯強く王統振わす、

一時その国土の大半は英領にふつたが、フィリップ二世  
の時英王ジョンの暗愚に乘じ、開戦してノルマンジー以  
下敎地を奪った。

その孫ルイ九世は アルビショア派の 教徒を征して その  
領域を拡張し、王權益々張った。

のちフィリップ四世の時、寺領課税の事から羅馬法王  
と争を起し、王は国民の後援により、之と對抗せん為め  
此年僧侶・貴族及び平民の代議士を召集して議會を開き、  
その同意を得て大いに法王を圧迫した。之をフランス三  
部会の起りとする。

(States General)

王は又、テンプル武士團を解散してその所領財産を没  
收し大に王權を張った。

▲ 三部会 輪にあり法王 こきおろし……1302

いり立つたる 三部の会が 輪にあり法王 こきおろす……1302

(年記)

1303 法王ボニファキウス八世辱めらる

1309年 法王のアビニヨン幽囚

十字軍の結果、人智進み宗教熱が冷めたのと、教會で  
は法王以下僧侶の 背徳が続出して人に反感を抱かした  
のとで、一時全盛を極めた法王權も漸く衰えるに至った。

其後フランス王フィリップ<sup>°</sup>四世は、法王ボニファキスと争って之を廢したが、此年クレメント五世を立て、法王とし之をフランスのアビニオンに居らしめ、法王廳をこゝに移した。

これから1376年に至るまで六十七年間、歴代の法王皆此處に居て国王に頭使せられた。之を法王の「アビニオン幽囚」と云う。

▲ それからは 笑わぬまいで 六十七年……1309

アビニオンと <sup>ソツ</sup>退けられちゃ 笑えぬぞえ 碌々に……1309

(附記)

#### 法王の兩立

その後、ローマの人民は、法王廳の復歸を望み、遂に1378年ウルバン六世(Urban VI)を羅馬に立てたので、佛人はクレメント七世(Clement VII)を立て、アビニオンに居らしめ、遂に二法王対立し、教会の威信大に衰えた。

(年記)

1310年 航海用羅針盤創製(伊太利人フラビオ・ジョーヤ)

▲ 指北針盤は 伊人ジョーヤが <sup>ワザ</sup>技に成り……1310

海に出る為 <sup>ハスキタ</sup>指北針造る 伊人ジョーヤが 技の恩……1310

1315 ①モルガルテンの戦(瑞西兵、オーストリア侯レオポルトを破る)

1321年 詩人ダンテ死す(1265生)

▲ 死のダンテ 神の御駒に 急ぐ今……1321

伊太利さらばと 詩人のダンテ 神の御駒に 急ぎ行く……1321

1323 マルコ・ポロ死す

## 1339年 百年戦争起る(-1453)

かねて英国では、佛国内の英領をヘンリイ二世時代のように拡張しようとし、佛国は佛国内の英領を全部その手に収めようとした事に違因し、又フランドル地方(今のベルギー辺)では羅紗の織物業が盛であつて英国は以前からこゝに羊毛原料を輸入して巨利を占めて居たのを、佛国が競争的妨害を試みた事等で、英と佛とは常に相反目して居た。

たまたま1328年佛蘭西王チャールス四世歿してカペー朝絶え、其後を従兄フィリップ六世が継いで「バロア朝」(Valois)を開いたが、時の英王エドワード三世はチャールス三世の姪あつたので、自らフランスの王位継承権ありと主張し、1337年遂に兵を率いてフランスに侵入し、翌々年即此年戦を交え、この後永年の紛争をひき起した。

この戦は、1453年プレタニウの講和まで実に百十数年に亘って行われたから、世に百年戦争と呼ばれて居る。

▲ それからは 戦争百年 埒あかず……1339

王位ねらつて <sup>ソネ</sup>猜んだ戦 それが百年 埒あかぬ……1339

(注意) 百年戦争の起りをこの前年又は前々年と見る人あり。

(附記)

戦況及終末

(ア) 初期

英王 エドワード三世及び皇太子エドワード(黒太子)等の奮戦により 1346年 クレシー(Crecy)の戦、1356年 ポアチエ(Poitiers)の戦等で英軍大勝

(イ) 中期

英軍アゼンクール(Agen Couet)で大勝し、漸次佛国の大部占領

(ウ) 後期 (ジャンヌ・ダルクの奮起)

英軍の勢益々強く、フランスの国運危くあった時、オルレアンの少女、ジャンヌ・ダルク(Jeanne Darc)が出て、祖国を救う神託を受けたと信じ、自ら佛軍の先頭に立って英軍をうち破り、オルレアン城の重圍を解いて佛王を救い、即位式をレンス(Reims)で挙げてさせたが其身は英軍の擒にあつてノルマンジーのルアン(Rouen)で焚刑にされた。

併しこれから佛軍の勢大に振い、遂に英軍を国外に追いその占領地を回復し、1453年には英国の佛国領地は只カレー(Calais)のみとあつて戦終りフランスで知を結んだ。

(年記)

- 1346 ③ クレシーの戦(英王エドワード三世イムを破る)
- 1347 リエンジュー 羅馬の政体を改め、自らトリビューンとある
- 1348 チャールズ7世 プラーク大学を建つ(黒死病 歐洲に流行す(1351))

1354年 借シュワルツ火薬を發明す

(一説にシュワルツは大砲の發明者だと言ふ)

▲ シュワルツは 何せよ神の 罪つくり……1354

おまじなだが シュワルツ殿は 似合わぬもの 造り出す……1354

1356 ④ ポアチエの戦(英の黒太子エドワード佛王ジョンIIを擒にす)

(附記)

2. 佛国の中央集権 百年戦後 諸侯伯の疲弊甚しく国王の權威振い、チャールズ七世は常備軍を置いて諸侯を抑えテイルイ十一世又王權の拡張を計り諸侯中尤も富強なブルゴーニュ侯チャールスが瑞西人と戦い死んだ後、その地を救めて殆ど全国を統一し十五世紀末には鞏固な王位とあつた。

1356年 黄金文書の發布

(独逸帝權の衰微)

独逸では ホーヘンシュタウヘン家(Hohenstaufen)の神聖ローマ皇帝がその伊太利至聖の留守中、諸侯の勢が強くあつて帝權衰え、十三世紀末には廿三年間の大空位時代を現出した。

やがて ハプスブルグ家の ルドルフ(Rudolph)が 1273年 独逸王に選ばれ オーストリア地方を得、同家盛大の基を開いたが、彼は自家の利のみを計つて帝国全体を省みあつたので、七大諸侯(マインツ・トリエル・ケルンの三大僧正、フアルツ伯・ボヘミア王・サクソニヤ公・ブランデンブルグ辺境伯)が権力を恣にし遂に此年、子チャールズ四世帝に迫つて黄金律(Golden Bull)を發布せしめ、皇帝選挙の權を以上七家に限ることとした。

これを選帝侯と云い、是等諸侯はフランクフルトに於て皇帝選挙を行う外、毎年帝国議會の議案を豫審するの特權を得、帝權は益々衰えるに至つた。

▲ 選帝侯の ねうちをあげる 文書出し……1356

黄金文書に 諸侯の權が のびて帝權 日に下つ……1356

(附記)

瑞西の獨立

瑞西はもと独逸皇帝の直轄であったが、その国人独立の気象に富んで居た。ハプスブルグ家の所領とあつてからその圧制を憤り 1291年 ウリ、シュウイッツ、ウンテルワルデンの三州同盟を結んで反旗をひるがえし 1315年 奥太利の武軍をモルガルテンに破って独立の基を立てた。

其後諸州加盟して十三州聯邦を作り事実上独立を完成したが、之が承認されたのは 1548年ウエストハリヤ条約からである。

(年記)

1360 プレチニーの和約(英仏間)

1364 時計の発明

1365 ウィーン大学の創立

1369 チムール 中央アジアを定む

1386 ⑦ センパハの戦い ○ポーランド、リトワニス合同強勢

1396 ニコポリの戦い (パジヤシッド I ホンガリア王を破る)

## 1402年 アンゴラの戦

(トルコの勃興・帖木兒の雄略)

英傑、鉄木真(成吉思汗)の大業以来蒙古族は亜細亞、欧羅巴に威を振ったが、其後漸次勢を失った。

其時勃興したのが、オスマン・トルコである。これはもとカスピ海の東方に居た遊牧民であるが、蒙古に逐われて小亜細亞に移り、酋長オスマンの時漸次四方を併せ皇帝(Sultan)と称しトルコ帝国の基を開いた。其子ウルカンは東ローマ帝国の領地を侵し、更に其子ムラド一世(Murad I)の時、海をこえてバルカン半島に侵入しアドリヤノーブルを取ってこゝに都し、其子パジヤシッド一世(Bajazid I)は遂にバルカンを併せついでハンガ

リイ王シギスモンドの率いた歐洲諸国の聯合軍をニコポリに破り(1396年)、轉じて東ローマの首都コンスタンチノーブルを囲んだ。東ローマ皇帝大に恐れ、当時中央アジア・波斯・南ロシア・北印度を征服して勢が強かったチムール帖木兒に請うてトルコ兵を退けようとした。

帖木兒之に應じて西に進み、此年西軍小アジアのアンゴラに戦った。やがてパジヤシッド大敗して生擒せられオスマン・トルコの勢挫け、東ローマ帝国は一時滅亡を免れた。

▲ <sup>チムール</sup>帖木兒を 渡りに船の 勝ち戦 --- 1402

アンゴラの野を チムールが行けば 渡る風にも 勝が吹く --- 1402

(附記)

トルコ帝国勃興影響

(1) トルコ人がバルカンを侵し、コンスタンチノーブルを陥れる前後東方の学者は難を伊太利に避け文藝復興を促した。

(2) 西欧諸国はトルコに対する対抗の必要とトルコ君主権の強大なる実例とにより、その中央集権を益かうしめた。

(3) トルコがシリア・埃及を占領し、歐洲印度間の交通を妨げるに至り、歐人に地理探検を促した。

(年記)

1409 ヴィサの宗教会議(同時に三法王あり)、ライプツヒ大学建つ

1414 コンスタンツの宗教会議始まる(-1418)

1415 ジョン=フス 宗教改革を唱え 此年焚刑

1429 ジヤンヌ・ダルク起つ (四月)  
(オルレアン城解圍)

▲ 立つジヤンヌ これ天の命 聖の身と……1429

1431年 ジヤンヌ・ダルク殺さる (五月)

▲ 天も泣け 死に行くジヤンヌ 処女<sup>おとメ</sup>ある……1431

あわねるルアンの 土こそ君が 定めおき世を 終る床……1431

1431 バーゴルの宗教会議

1438 ドイツ帝アルハート五世 (ハプスブルグ家のドイツ王……1806)

1450年頃 グーテンベルクの活版発明

これまで書籍は、パピルス又は羊皮紙に手字したもので容易に手に入るを得なかったが、此頃独逸のマインツの人グーテンベルク (Gutenberg) がききに木製活字を造りついで金属活字を発明して、印刷術を開いてから多数の印本を行うの途開け、新に勃興した文藝復興期の学問と伴って知識の普及を助け、文化の発展に著しいさしひびきを興えた。印刷術の起った事が近世文明の一原因を為して居るのは争われぬ事である。

▲ 傳わりて 名にこそ残れ 分ち版……1450

啞喑の声きく たよりもこゝに 名のみ響いた 分ち版……1450

1453年 東ローマ帝国の滅亡

帖木兒の死後、その帝国瓦解し、土耳其再び優勢となりその王マホメット二世 (Mahomed II) は此年水陸両道から進んでコンスタンチノープルを囲んだ。皇帝コンスタンチヌス十二世死守すること五十五日、五月城遂に陥り、皇帝殺しこゝに東羅馬帝国滅んで、ローマは此世に影をひそめた。コンスタンチヌスの箕都から是に至るまで実に千百二十三年である。

此後トルコは、都をコンスタンチノープルに移して国勢益々振い、欧亜三大陸に跨る大帝国と成った。

▲ 尽きぬ恨 西に東に さすらいて……1453

オスマン土耳其に とちめられて 名あるローマの その末路……1453

(附記)

近世ロシア興る

ロシアはルーリックの建てた王国が久しく欽察汗国に属して居たが、その汗国衰えてモスコー大公国興り、イバン三世の時勢強く、東ローマ帝国滅んで後、コンスタンチヌス十二世の姪を娶りて東ローマ皇帝の継業者を以て任じ又希臘正教の保護者と成った。その孫イバン四世は自らツァール (Czar = 皇帝) と稱した。

{年記}

1453 百年戦争終る (佛国王権大に興る)

▲ 止むきける 長の戦の 沙汰も止み……1453

英と佛との とつ組み合の 長い戦の 沙汰が止む……1453

## 1455年 薔薇戦役起る(1485)

(イギリスの王位紛争)

百年戦役終って後二年、英蘭ではランカスター・ヨークの両家互に王位を争いその後戦乱三十年に亘った。

はじめ英蘭王、ヘンリー五世歿し其子ヘンリー六世位を継いだ(ランカスター家の)が暗愚で上下の不平を招いた。

1452年ヨーク侯リチャードが叛いて屢々王軍を破ったがウエークフィールドの戦に敗死した。其子エドワード四世は、議会の認定を受けて王位に登り1471年バルネットの戦にランカスター軍を破った。その死後幼子エドワード五世が立ったが叔父のグロスター公が位を篡ってリチャード三世と称した。

のちランカスター家の支族チュードル家のヘンリー七世が位に即き、ヨーク家のエリザベスと婚して両家合一し戦終つてチュードル朝の始祖と成った。(1486年)

斯てヘンリー七世は屋室廳を置き、国争犯人を最罰し、議會を召集せず貴族人民を抑え専制政治を断行した。

此後ランカスター家は紅バラをヨーク家は白バラを家紋としたから之を薔薇戦役(War of the Roses)と云い侯伯武士多く戦死して旧家亡び王権大に伸びた。

▲刺のバラ にらみ合ったり 二王家が.....1455

イングランドは とげとげバラよ にらみ合ってる 二王家が.....1455

(附記) 1. 西班牙の中央集権

西班牙の大部は八世紀以来サラセンの領土とあり、後、サラセン衰え諸王国起り、就中カスチラは勢強かった。その女王イサベラがアラゴン王フェルジナンドと結婚して両国合同し西班牙王国の基を立てた。ついで1492年グラナダを陥れて西班牙を統一し貴族を抑え王権を拡張した。

2. 葡萄牙の独立と中央集権

ポルトガルはもとカスチラに属して居たが十一世紀末独立し、リスボンを首府とした。其王ジョン二世の時国内を統一し王権を張った。

(年記)

- 1460、葡国ヘンリー航海親王歿(1394生)
- 1468 グーテンベルヒ歿す
- 1469 カスチラ・アングラ両王家成婚
- 1480 露のイバソフ 欽察汗国を滅し独立す
- 1485 パラ戦役終る(チュードル王朝起る)
- 1486 ジャズ 喜望峰を発見す○ヘンリー七エリザベスと婚す

## 1492年 コロンブスの亞米利加発見

(新航路発見の機運)

十字軍の結果、欧人の地理的智識関け殊に十三世紀末、伊太利人マルコ=ポーロが「東方見聞録」を著して、日本即ちZipanguが黄金無尽の国である事を述べて当時の人心を唆った事や、トルコが東西交通の要地を占め、西洋人の好む東方貨物に重税を課してそれ等が非常に高價となり且つ伊太利諸市がこの貿易の大利を占めた。

ため他の諸国は直接印度地方に交通を企て又學術復興し、諸種の機械の發明応用等が行われた等の原因により、茲に遂に新地発見の機運を招いた。

ポルトガルではヘンリー航海親王が十五世紀の初航海を奨励しアフリカ西岸を探らしめ、其後ジョン王その志をつぎ益々之を奨め、1486年バーソロミュー・ジャズ(Bartholomew Diaz)はアフリカ南端喜望峰に達した。

コロンブスは伊太利ゼノアの人、曾てマルコ・ポーロの東方見聞録を読んで東洋の富饒を羨み之が探検を志し、且つ地球の球体であるのを信じ、大西洋を西航して印度に行き得るを思い、困苦の末西班牙の女王イサベラの助力を得て、此年八月三日西航の途に上り航海七十一日、偶然西印度諸島中のサンサルバドル島に達した。

その後尚三回の航海を試み、キューバ・ハイチ・オリノコ河口・ホンジュラス湾内等を探りアメリカを発見したが、自らはそれが新大陸なるを知らず1506年に歿した。

▲ 天に謝す 陸に涙の コロンブス……1492

あれを見ろよと つい見え初めた 陸に涙の コロンブス……1492

(附記)

アメリカの名の起リ

その後、伊太利フロレンスの人 アメリゴ・ベスピッチ 葡萄牙政府の命を受け、南アメリカを探り、その記事を公にしたので、世間その名に因み新大陸をアメリカと稱するに至った。

(年記)

1497 伊人ジョン・カボット北アメリカ沿岸を探る  
アメリゴ・ベスピッチ中央アメリカ発見

1498年 バスコ・ダ・ガマ 印度航路を開く

▲ 東印度に 乗々ガマが やって来る……1498  
(東洋史全年代を見よ)

1500 カブラルのブラジル発見

1510年 葡国印度總督 アルブケルケ、ゴアを取る

▲ 握るゴア アルブケルケが 獲る……1510

アルブケルケが 兼取るゴアに うまく葡人が わだかまる……1510

1513年 西人バルボア太平洋を発見す(パナマに立ちて)

▲ 望み見る 大海原の 末はるか……1513

大きい海原 望んだバルボア あそか水やら 空じゃやら……1513

1513年 法王レオ十世の賤罪符売出し

▲ 何事も お金の沙汰の 賤罪符……1513

如何な罪でも 免れる符を 売れば買えよと 頼るはレオ……1513

### 学藝復興 (Renaissance)

ローマ帝国の末頃 西欧の学藝はゲルマニヤ民族の馬蹄にふみにじられ所謂 暗黒時代とあり只僧侶が僅少の智識を保つばかりで他には学藝を顧るものが無かつた。

それが十字軍後 長夜の眠漸く醒め、十三世紀頃から学藝復興の黎明は 先ず伊太利に現れ独、佛、英等に及んだ。

### 学藝復興の原因

1. 十字軍の結果 サラセンの文化が輸入せられたこと

2. 十一世紀以来各国に大学が設けられたこと。
3. 宗教心冷め人心伸び、自由討究盛に勃つたこと。
4. 東ローマ帝国滅亡後、東方の学者が伊太利に移住し古典の研究を始めたこと
5. 保連奨励カモの出たこと(フロレンスのメヂチ家・ローマ法王等)

古学の復興 {  
 スコラ哲学 = (過渡期) チャールス大帝の奨励と学校建設  
 人文学派 = { 古典研究 (伊太利中心)  
 (復興先驅) { 学者詩人 = ダンテ・ボカチオ・マキヤベリ  
 ロイヒリン・エラスムス・トマス・モア  
 科学研究 = コペルニクス (地動説)  
 ガリレオ (地動説・望遠鏡)

美術 {  
 建築 - 復活式 = ブルネレスコ・ブラマンテ・ミケランゼロ  
 彫刻 (フロレンス中心) = キベルタ・ドナテロ・ミケランゼロ  
 絵画 = レオナルド・ダ・ビンチ、ミケランゼロ・ラファエロ

発明及應用 {  
 火薬 = 銃石包に應用し戦術一変  
 磁石 = 支那・印度で古く用いられ 1260年伊人ベネト  
 之を傳えのち 羅針盤發明マル航海術を促す  
 活版術 = グーテンベルグ (其項参照)

### 第三史期

1517年 マルチン=ルーテル 宗教改革を唱う  
 ウィクリフ及びバフスの宗教改革の企が失敗した後、教会の腐敗、法王の放逸益々甚しく、人道派の学者等はギリシヤ語・ヘブライ語の聖書を研究して羅馬正教の誤謬を指摘し一方法王以下僧侶の腐敗を非難する声高く、宗教改革の機運漸く熟した。

紀元 1513 年レオ十世法王とかり、聖ペトロ寺建立の爲に贖罪符を売らしめた。

時にウィッテンベルクと大学神学教授にマルチン=ルーテルあり嘗てローマに遊んで教会腐敗の現状を見、深く改革の必要を感じたが、偶々僧テツチニル (Tetzeli) 独逸に來つて此符を販賣するを見て大に激し、此年十月、九十五ヶ条の意見書を寺門に掲げてその不当を攻撃し宗教改革の端を開いた。

▲ 名乗り出る ウィッテンベルクの マル=ルーテル...1517

ウィッテンベルクに 名乗りをあげて うんと踏張る マル=ルーテル...1517  
 (附記)

#### 1. ルーテルの破門

その後法王はルーテルの詆を纏えさしめようと努めたが能わず、1520年遂に彼を破門した。ルーテルは公衆の面前で、その破門状を焼いて決意を示しこゝに宗教



改革の火の手上がった。

## 2. 地獄の沙汰も

ドイツに行った僅テツテルの持えた函の上には「金が此箱の中にチリンと響くや否や、冥は煉獄より浮び上る」と記してあった。

## 1519年 マゼラン、世界一周の途に就く

コロンブスのアメリカ発見、ガマのアフリカ回航其他航海探検の熱度高まり、地理上新地の発見は益々盛に行われた。

葡萄牙人マゼラン(Magellan)は西班牙王の命を受け、此年九月世界周航の途に上り大西洋を横断して南アメリカのブラジルに着き、南航して新発見のマゼラン海峡を通過し、それより始めて太平洋を航し1521年四月フィリピン諸島に着いた。不幸自らは主人の為に害せられたが部下の残員は印度洋を西航し喜望峰を廻って翌1522年五月本国に帰った。これ実に世界周航の始で、これから地球が球体であることが実際に証明せられた。

▲ なつに地球を 一周するよと 楽観し---1519

地球一周の 望を負うて 海にマゼラン 陸を去る---1519

(年記)

1520 法王ルーテルを破門す ○ラファエル死す(1483年)  
○マゼラン南米南端の海峡を通る

## 1521年 ウォルムスの国会(ルーテル審問)

さきに西班牙王フェルジナンド歿し、外孫チャールズハプスブルグ家から出て之をつぎ、チャールズ一世と称したが、ついで独逸皇帝マキシミリアン一世(Maximilian I)歿後その領地をもついでチャールズ五世と称した。

かくて皇帝は埃太利・ネーデルランド・独逸西南部・ナポリ・シシリア・西班牙及びその海外属地をも領し、尚北伊太利を佛蘭西から奪い、ひそかに天下一統の野心を抱いた。されば皇帝チャールズ五世は、佛蘭西に対する政策上、法王レオ十世の歡心を得んとて、此年独逸のウォルムスに国会を開きルーテルを招いてその説を繼さしめようとしたが、ルーテル断然之を拒んだので、皇帝は勅令を以てルーテル及びその徒を異端者と示し法律の保護を興えずと宣言した。

▲ 何としても 聞く者でなし ウォルムス---1521!

思い直せと ノツリ者を こづき廻した ウォルムス---1521!

(附記)

### 1. 断じて吾は往く

ルーテル此の會議に臨むにあたり、人の諫止を肯かずして「假令ウォルムス官殿の者が皆悪魔とふるうとも我は断じて往く」と云った。

### 2. 捨う神あり

サクソニヤ公フレデリックは此後ルーテルを保護して之をワルトブルグ城に隠した。

ルーテル此間に聖書をドイツ語に翻訳し、その説次第にドイツ帝国内に傳り、皈依者日に多くあつた。

(年記)

1521 イスパニヤのメキシコ征服

1521年 マゼラン世界周航途上に殺さる  
(フィリピンにて)

▲ 長旅に 殺されマゼラン 浮ばれず……1521  
(東洋史全年項参照)

1522 マゼランの一行 葡国に帰航 (世界一周の始)

1523 グスタフ = ハサ 瑞典王とある

1525 ③ パピヤの戦 (独帝佛王を擒にす)

1526 ハベル 莫臥兒帝國を興す

1529 ④ スパイエル国会、新教禁止を議決す

1530年 コペルニクス 地動説を唱ふ

▲ 何ぬかす その氣狂と 笑われる……1530

あはあほ>> 何ぬかしやがる そいつ馬鹿だと 笑われる……1530

1530 アウグスブルグの国会新教排斥を議決す

1531年 シマルカルテン同盟成る  
(新教の勢ががる)

独逸皇帝チャールス五世は フランス王と争ひ遂に1251年以來伊太利戦役を見るに至つた。この間新教の勢益々あがり、ルーテルは率先して尼僧と結婚して妻帯の禁令を破り、友人メランヒトン (Melancton) と共に種々の改革を行つて其勢益々盛とあつた。

▲ 皇帝は1529年カンブレイの和成つて後帰国し、全年

スパイエル (Speyer) に国会を開き、ウオルムスの宣言を勵行する事を議決したので、新教徒は極力之に抗議した。

これから新教徒をプロテスタント (protestant = 抗議者) と呼ぶに至つた。

翌年皇帝はアウグスブルグに国会を開き、新旧両教の調和を図つたが、旧教徒は新教派のメランヒトンの起草した 信仰簡条 (Confession of Augsburg) を否決し、互つ新教排斥を決議したので、新教を奉ずる諸侯や都市は、自衛上サクソニヤのフレデリックを盟主として此年シマルカルデン同盟を結び皇帝に対抗した。

▲ 仲間等が シマルカルデンに 意地を張る……1530

新らしいのが 仲間をつくり シマルカルデンに 意地を張る……1530

(附記)

ニュウレンバルクの宗教和議 (1532年)

皇帝は新教派の同盟国を征しようとしたが、偶々トルコ・フランスが東西から迫つたので、ニウレンバルクに會議を開き、再び信教の自由を許し、ルーテル派の援を得てトルコを退け、ついで佛國とクレピー (Cressy) に和し、多年の戦も終つた。

(年記)

1533 イスパニヤのペール征服

1534 英王ヘンリ VIII イギリス教会の首長とある

1536 カルビン宗教改革を唱ふ

1540年 エスイト團(耶蘇会)成る  
(宗教改革の反動・旧教の覚醒)

新教の興るにつれ、是れに刺戟されて旧教徒又深く反省した。

西班牙人イグナチオ=ロヨラ(Ignatio Loyola)は同志フランシス=ザビエル等と謀り、1534年耶蘇会を組織し、此年羅馬法王ポール三世の許を得て之を確立し、法王以下上長には絶対の服従を誓わしめ、旧教擁護につとめた。此の会員をエスイト(Jesuits)と云い、その後各地に行き旧教の弘めに尽した。

▲荷にならぬ 旅あきふいに 草鞋ばき……1540

エスイト團だと 名のりをあけて 立つよ旧徒が 草鞋はき……1540

(附記)

1. トリエント宗教会議

旧教徒は1545年以来トリエント(Trient)に宗教会議を開き教会の積弊を除き、又宗教裁判所を設けて異教徒を嚴罰し、勢力の回復に努めた。

2. 旧教の海外布教

此後旧教徒は各地に教を弘めた。1549年(天正18年)ザビエルは印度を去り、我國に來り布教に従い、のち支那で病死した。支那では明末清初に此派盛に行われ、李瑪竇、湯若望等は殊に有名である。

(年記)

1543 葡人種子島に漂着す(日本史、葡人鉄砲を傳)の項参照)

1544 ⑨クレピエの和約(独佛間)

1545 トリエントの宗教會議(一1563)

八。

1546 シマルカルデンの役起る コルーテル死す(1483生)  
1547 チャールスV. ドイツ新教徒壓迫 ロイバソIV ロシヤ皇帝と林す  
1549 ザビエル 日本<sup>の</sup>鹿兒島に來る

1555年 アウグスブルグの宗教和議  
(信仰の自由)

独逸皇帝チャールス五世は兵力を以て新教徒を滅さんと、クレピエの和議の後、シマルカルデン同盟軍を討つてその首領サクソニヤ公フレデリックを虜にし領地を没收したが新教徒屈せず、佛蘭西王ヘンリイ二世と同盟して俄に皇帝の軍を破つたので皇帝遂に屈し、此年独逸のアウグスブルグに宗教會議を開き、新旧兩教徒の信仰の自由と、政治上の同權とも認めたら、独逸に於る長年の宗教争ひに一段落をつけ、新教は北独・丁株・瑞典・諾威等に拡まつた。

▲ 仲直り 望通りに 仲をもち……1555

アウグスブルグに 仲間を集め 望通りの 仲を持つ……1555

(附記)

新教の三派

1. ルーテル派

2. ツィングリ派

1531年 瑞西人ウルリッヒ=ツィングリ(Ulrich Zwingli)が 賤罪等攻撃をふり、本国の旧教徒と戦ひ此年歿死した。その一派の宗派を云う。

3. カルビン派

佛人ジョン=カルビン(John Calvin) 瑞西で改革説を唱え、次第に佛西・オランダ・スコットランド等に弘まつた。

(年記)

1555 ロシアのシベリヤ征服 始まる

1556 チャールズV 即位 (4カール帝アキバル即位)

## 1558年 エリザベス女王の即位 (-1603)

(英蘭国教の確立)

英王ヘンリィ八世は旧教に熱心で、法王から信仰保護者の称を贈られたが、その皇后カザリンの離婚を法王クレメンス七世に乞うて許されぬのを怒り、1533年遂に之を断行して宮女アンボレインを入れたので法王は遂に王を破門した。

依て王は翌1534年議会の協賛により大権令(Act of Supremacy) を発し、自ら英蘭教会の長となり法王と絶った。ヘンリィの後をエドワード六世嗣ぎ、前代の教旨儀式は旧教によったのを改めて新教の主義にしたが、その歿後姉メリィ王位をつぎ旧教を再興し、西班牙王フィリップ二世と婚し新教徒を迫害したため世乱れた。

遂に此年メリィの妹エリザベス(Elizabeth)英蘭王位をつぎ、翌年新教主義に旧教を加味した国教を確立し之に従わぬ者を嚴罰した為、他宗派はオランダ・アメリカ地方に逃れその後国よく治った。

▲ 波風の なかれと女王 世をかため……1558

エリザ女王が 臨んだ国は 波も立たぬ世の平和……1558

(附記)

### エリザベス女王の治績

(1) メリィ親王

エリザベスはアンボレインの女あつて、旧教徒はその王位を認めず、蘇蘭ある前女王メリィを迎えようとし、西班牙のフィリップ二世も亦之を援けたが、女王之を知り、旧教徒を嚴罰に処し又素行修らぬメリィが本国を追われて来たのを捕えて、幽囚十八年間遂に之を殺し禍の根を絶った。

(2) 無敵艦隊を破る……1588年の項を見よ

(3) 英蘭の隆興……1600年東印度会社の項(東洋史)等を見よ。

(年記)

1559 英女王国教を制定す

1562 佛国エグノウの乱起る(-1598)

1564 ジョン・カルビン 死す(1509生)

1564年 ミケランゼロ 死す(1475生)

▲ 名にし買う 美術の園に 立ちし君……1564

大いなる世の 名前を買つて 美術の園生に 立つた君……1564

1567 ネーデルランド 独立戦争起る(-1618)

1571 イスパニヤ人、ヒッピン群島占領

⑩ レパントの海戦(神聖同盟の艦隊トルコ艦隊を破る)

## 1572年 セント=バーソロミウの虐殺

(フランス宗派の争)

フランスでは新教の勢揚らず、旧教徒は之を嘲ってユグノウ(卑賤者)と云った。

国王フランス一世及びヘンリイ二世は政略上独逸の新教徒と結び、チャールス五世に当たったが国内では新教を圧迫した。殊に1559年フランス二世立ってギース公外戚の勢を振り、盛に新教を圧迫したので、ユグノウ戦役が起った。

その後国王チャールス九世の時母后カザリン(Catherine de Medici)はギース公と権を争い新教徒に與したので、1562年から約八年間紛亂を極めた。

然るに1570年王は信仰自由の一部を與えて新教徒と和してからその首領コリニイ(Colin)が勢を得た為、カザリン之を惡み急に態度を一變して旧教徒の首領ギース公と結び、新教徒を滅せうとした。

即ち此年八月廿四日、セント=バーソロミウ祭日の未明、俄に起ってコリニイ以下巴里に居る新教徒約三千人を虐殺し、次で地方の新教徒三万人を殺した。

これをセント=バーソロミウの虐殺と云う。

▲何万が<sup>アソ</sup>祭の朝首にあり……1572

怨受けたる何万人は祭見よにも首がなし……1572

(附記)

バロア家絶中、バーソロミウの虐殺により争亂又起り、チャールス死後ヘンリイ三世、ギース公を殺し、日も光漢に時殺され、1589年にはバロア家全く絶えた。

(年記)

1579年 ユトレヒト同盟成る (次項オランダ建国の条を見よ)

▲ネーデルランド 南はすて、<sup>アソ</sup> 埒をあけ……1579  
勇む新徒のネーデルランド 南諸州は 例外に……1579

全年 露国シベリヤ侵略 (東洋史今年代を見よ)

## 1581年 オランダの建国

(ユトレヒト同盟成る)

西班牙王フィリップ二世は、父チャールス五世の後をつぎ広大なる本國の外、ネーデルランド・両シシリー・ミラノ及びアメリカ新植地等を領して勢強く、佛國と戦つて之を破り、トルコ海軍をレバンント(Levant)の戦に破り、次でポルトガルの王位を兼ね、歐洲第一の富強を極めた。

さてネーデルランドでは其頃、北部オランダ地方は新教、南部ベルギー地方は旧教を奉じ、住民勤勉、商工業を勵み、都府は古來種々の特權を措ち榮えて居た。

然るにフィリップ二世専斷を喜び、且つ熱心か旧教徒だったので嚴に新教徒を抑え、都府の特權を奪い、商工業の發達を妨げた。

依て新教徒大に怒り、遂にオレンジ公ウイリヤムを總督として1572年獨立の戦を起した。

一方フィリップ二世はパルマ公を總督としてネーデル

ランドを鎮めてせ、旧教徒の特権を復したので旧教を奉  
ずる南部十州は帰順した。

併し北部七州は1579年ユトレヒト同盟を結んで飽く  
迄も反抗し、遂に此年独立を宣言しウイリヤムを大統領  
に推した。これオランダの国の始である。

▲ 名のりあげ 世に出るオランダ ウイリヤム……1581

オランダ独立 名のりをあげて 世に出る統領 ウイリヤム……1581

(附記)

#### オランダの其後

ウイリヤム勇略あり、不幸刺客に殺されて後、其子モウリス  
(Maurice) 立ち、英女王エリザベスの援を得て西班牙に  
反抗した。西王フィリップ二世之を定め得ずして死に、其  
子フィリップ三世位に即き、1609年から十二年間和蘭と休  
戦条約を結んだ。そこでオランダは事実上の独立国となり、  
この後 東洋やアメリカ方面に大活動をおし更に1648  
年ウエストハリヤ条約で列国の公認を得た。

(年記)

1582 法王グレゴリ XIII の暦法改正

1584 オランダ大統領 ウイリヤム 暗殺

1587 ②スコットランド 前王メアリー 処刑

### 1588年 イギリス軍、無敵艦隊を破る

英蘭女王エリザベスはオランダの独立を援けて西班牙  
に抗し、国内の旧教徒を圧迫し又1587年メリイを殺し  
たので、西王フィリップ二世大に怒り、遂に此年大艦隊を  
組織して無敵艦隊 (*Invincible Armada*) と名け大挙

英国を襲わしめた。

かくて旧教国として富強天下に雙ぶもの、亦はイspa  
ニヤと、新教国として新進の力に充ちて居る英国との争  
は起った。

英国の將軍ドレーク (*Drake*) ハワード (*Howard*) 等は、  
此年八月敵艦隊をイギリス海峡に迎えうち大に之を破り  
殆ど全滅せしめた。

これから海上に於るイspaニヤの勢力大いに衰え、英  
国之に代り、他日海軍国として活動する基を作った。

英国内には此後新教盛とかり又それまで西班牙の圧迫  
に苦んで居た他の新教諸国も蘇生の思をした。

▲ 名ばかりで 弱い無敵と やじられる……1588

イギリス方では 名のり無敵 弱い弱いと やじってる……1588

(年記)

1589 佛国バロア家絶えブルボン王朝起る (亨利IV即位)

1590 顕微鏡の発明

1596 蘭人始てスマトラ・パトナムに至る (蘭人東征の始)

1597 気温計の発明

### 1598年 ナントの勅令出る

(佛王 新教徒に信仰の自由を許す)

佛蘭西では、さきにセント=バーソロミュウの虐殺以来、  
新旧両教徒の争愈々激しく、バロア朝も遂に断絶したの

で、1589年ナバル王ヘンリイが入って王位を継ぎ、ヘンリイ四世と称しブルボン朝を開いた。

然るに王は新教徒の首領であったので、旧教徒之を奉ぜず内乱相つたから、王は1593年政略上旧教に改宗してその徒の不平を静め、遂に此年ナントの勅令を發布して新教徒に信仰の自由及び諸官職に就くことを許し、多年の争止むに至った。

▲ ナントの令で 楽に寝られる エグノたち……1598

王の下した ナントの令で 楽に寝られる エグノたち……1598

1600年 英人、東印度会社を建つ

▲ 東印度に 笑って坐る ブレテン兒……1600

(注意) 東洋史其項参照

1602年 蘭人、東印度会社を建つ

▲ 東印度に 若いオランダ 会社建て……1602

(注意) 東洋史全項を見よ

(年記)

1603 英女王エリザベス死す(今エウドル王朝絶妙)

1604 佛人東印度会社を建つ

1609 西・葡両国十二年間の休戦条約成る

(附記) ヘンリイIVとブルボン王朝

1. ヘンリイ王は又内政に意を用い賢相シュリイ(Sully)を用い財政を整え、北米カナダ地方に移民し国力の増進を図ったが1610年殺された。

此王の崩れたブルボン王朝はフランス革命迄約二百年間続いた。

1610年 ガリレオ望遠鏡を發明す

▲ 太眼鏡 伊人ガリレイの 技に成り……1610

天を聞かん 太遠眼鏡 伊人ガリレイの 技に成る……1610

1613 ロシヤのロマノフ王朝起る

1614 佛国々会最後の召集

1616年 詩人シェクスピア死す(1564生)

▲ 蒼ある 命を刻む 墓一つ……1616

詩の聖の 蒼と残る 命刻んだ 墓一つ……1616

1618年 三十年戦役起る(1648)

(第一期 ボヘミヤ役1623)

独逸の宗教問題は1555年のアウグスブルグ宗教会議によって表面解決した如く見えて実は新旧両教徒各同盟して互に相争って居た。

皇帝ルドルフ及びマチヤス共に旧教徒を保護したが、此年マチヤス帝は、耶蘇会の教育を受けた従弟フェルジナンドをボヘミヤ王とらし、此地の新教徒を圧迫したから新教徒大に怒り王を国外に放逐し反旗を翻したのでこゝに三十年戦争(Thirty years war)が起るに至った。

▲ 腹立て、新しいのが 弓をひき……1618

新しいのが 腹をば立てりや 意地にボヘミヤ 弓が鳴る……1618

(附記)

三十年役の全通

(1) 第一期 (ボヘミア役)

ボヘミア人は ファルツ伯フレデリックを王として戦ったが、外援なく遂に敗れた。(1623)

(2) 第二期 (丁林役)

1625年丁林王クリスチヤンIV、蘭英兩國と結び独逸に侵入新教徒を助け、皇帝軍と戦ったが、帝軍の将クリイ及びワレンスタインに破られ、將來ドイツの内事に干渉せぬ事を約して退いた(1629)

(3) 第三期

瑞典王グスタフ=アドルフは1630年新教徒を助け、ドイツに侵入して大勝し、1632年帝軍の名將ワレンスタインとリッヂェンに戦い勝ったがグスタフ王は戦死し、ワレンスタインは殺された。(1635)

(4) 第四期

フランスは前からドイツのハプスブルグ家を抑えようとして瑞典に軍資を送って居たが1635年遂に出兵新教徒を援けた(1648)

(5) 1648年のウエストハルヤ条約で戦役終る(其条を見よ)

1619年 和蘭人、バタビヤに總督を置く

▲ 府をバタに 和蘭人が 利権張る……1619

(注意) 東洋史全項を見よ

(年記)

1620 ⑩ 白山の戦 (独帝は教同盟軍を率いてボヘミア王を破る)

1624年 リシュリュウ佛国宰相とある

佛蘭西王ヘンリイ 暗殺せられ、子ルイ十三世幼にして位に即き、太后マリヤ=デ=メヂケ摂政とあつたが長じて此年、大僧正リシュリュウ(Richelieu)を宰相とし、これに太政を委ねた。

リシュリュウ執政二十年、其間内に諸侯伯を抑えて王権を張り、エグノの特権を奪ひ、外はドイツのハプスブルグ家の勢をそぐ為めドイツ内の新教徒を助けて三十年戦役に干渉した。

▲ フランスを <sup>カ</sup>擔がてリシュリュウ 立ち上り……1624

えらいリシュリュウ フランス擔が 国<sup>ト</sup>カを 外<sup>ト</sup>つ国に……1624

(年記)

1626 英国の哲学者ベーコン死す

1629 ⑨ リュベックの和約(独、丁蘭)

1630 ドイツ天文学者ケプレル死す(1571生)

1631 ⑧ ライプツヒの戦

1632年 リッヂェンの戦

(グスタフ=アドルフ戦死)

グスタフ=アドルフは、瑞典王チャールス九世の子で1611年王位に即き、國政を改革し、軍備を整え、北歐の覇権を握らんとしてデンマーク、ロシア軍を破り、又ポーランドの紛擾に乘じ、地を割かじめた。

尚三十年戦役にあたっては1630年ドイツに侵入し、新教徒を援けて連りにドイツ皇帝の軍を破り、遂に此年十一月その將ワレンスタインの軍とリッヂェンに戦い勝ったが、傷を負うて陣中に死した。

▲ 骨寒く 死のグスタフに 風泣けり……1632



荒れた野原に 吹く寒風は さびしグスタフ 君を泣く……1632

(附記)

リッヂェン は北ドイツの都市で、此時の戦の外 1813年五月、ナポレオン一世が ロシヤ・プロシヤの 聯合軍を破った事として名高い。

(年記)

- 1634 ④ ワレンスタイン 殺さる
- 1635 三十年役第四期 (-1648) ⑤ プラガの和約 (独帝サクソニア侯)
- 1638 ハーバート大学創立
- 1639 英人マドラスを取る
- 1640 ホルトガル西班牙から独立
- 1642 英国王党 議会党争の リシュリュウ死す

### 1643年 ルイ十四世立ち、マザレン宰相となる

前の年フランスでは、リシュリュウ死に此年又ルイ十三世が歿したので、子ルイ十四世幼くして立ちマザレンを輔けて宰相とあつた。彼はよくリシュリュウの政策をつぎ、三十年戦争に關係して、ウエストハリヤ条約により、ライン河左岸に領土を拡張し又イスパニヤと戦ひピレネー条約によりその領ネーデルラント(今の白耳義)の數市を得、内は中央集権を完成して遂にフランスを歐洲第一の強国たらしめた。

かく佛國に功績のあつたマザレンは同國人ではあつたが、イタリア人であつたが、法王の爲にフランスに使してリシュリュウに知られ、その推挙により代つて同國の宰相となつたものである。

▲ フランスの 土にふる気で 沙汰を受け……1643

伊人マザレン フランス國の 土にふる気で 沙汰を受け……1643

(年記)

- 1645 ⑥ クロムウェル 英王を破る(ネースビーの戦)
- 1646 ⑦ 英王スコットランド人に頼る
- 1647 ⑧ 英王、英國議會に囚 監さる

### 1648年 ウェストファリヤの和約 (三十年戦役終る)

三十年戦役はその後めまぐるしく展開して行つたが、從來フランスは独逸のハプスブルグ家を抑える爲に新教徒を助けたものでリッヂェン歿後ワレンスタイン殺され独逸軍の衰えたのに乘じ、佛相リシュリュウは遂に公然瑞典と結んで独逸を侵略し、それに反して丁抹は瑞典の勢の張るを恐れて独逸に味方し、宗教戦が政治上の争に變つた。

やがて西班牙徹兵し、独逸國內の新教諸侯も切に平和を望み、その王フェルジナンド三世亦早く戦を止めるを利としたので、佛相マザレンは此様に乘じ、両者の間に斡旋し此年ドイツのウエストファリヤに和を結び三十年戦役全く終を告げた。

▲ フェルジナンドが 体よく止める 約束し……1648  
ウエストハリヤに フランス・ドイツ 戦止めよと 約束す……1648

(附記)

1. 講和条約により

- (ア) フランスはエルサスの大部分、メッツ・ツール・ベルダン等の地を得た。
- (イ) 瑞典はポメラニア西部地方、エリベ河口の地を得、ドイツ議会に参列する権利を得た。
- (ウ) オランダ、スイスの二国は独立を承認された。
- (エ) 旧教・ルーテル・カルビン三教徒は共に同等の権利を得た。

2. 戦後の影響

此戦により列国の宗教的紛争は収り、瑞典とフランスは盛んになったに及し、独逸は甚しく禍を受け、田園荒れ、人口減少し、都市衰え、道徳乱れ、文化廢れ、ハンザ同盟破れ、皇帝は名のみで、列侯殆ど独立し、大なる衰微を來した。

1649年 英王チャールス一世の死刑  
( Cromwellの共和政府成る )

チユウドル朝のエリザベス女王は民権を重んじなかったが、その政治宜しきを得たので国勢張り、国民信頼して反抗しなかった。

然るに1603年スチュアート朝の祖ジェームス一世が蘇蘭王兼英蘭王となるや彼は王權神授説 (Divine Right of King) を唱えて議会と衝突した。

その子チャールス一世亦父と同政策をとり1629年議会将解散してから十一年間それを召集せず専政を行ひ新税を課し国民の信を失った。

偶々1640年スコットランド出征費を得るため議会将召集した時、議員は国王の失政を攻撃し、昂じて遂に内乱と

なり、勤王党(騎士党)と議会党(円盾党)に分れて争うこと八年、議会軍の名将、オリバー・クロムウエル (Oliver Cromwell) は屢々勤王軍を破り1645年ネースビーに勝つて王を擒にした。

其後議会は、立憲王政を主張するプレスビテリヤン党 (Presbyterians) と共和主義のインデペンデント党 (Independents) とに分れて争ったが、後者の首領クロムウエルは武力を以てプレスビテリヤン党を倒し、遂に此年一月チャールス一世を暴君・反逆者・国賊との罪名の下に死刑に処し、共和政の令を布いた。

▲ ふんだくる チャールスの座を 理が非でも...1649  
インデペンデント党の 腹クロムウエル 立つて共和の 令を布く...1649

(年記)

- 1651 英国航海条例発布
- 1652 英国、オランダと戦う(-1654)
- 1653 クロムウエル、プロテクトルとなり全權を握る
- 1658 ④クロムウエル死す

1660年 英国の王政復旧(共和政倒る)

暴風の如き政変は、内外に感動を興え、内には勤王軍起り外に和蘭の反対があった。それ等の渦中に立って、クロムウエルは武断政治を履行し、奢侈を嚴禁し、風紀を振肅し又航海条例 (Navigation Act) を発布して和蘭の空

貿易に一大打撃を與え、更に兵を以てその海上権を奪つた。又、イスパニヤと戦つてジャマイカを取り大に國威をあげたが、その政治峻烈の爲國民之を怨み却つて王政の復旧を念つた。

クロムウエル 快々として樂しまず、1658年病歿し其子職をついだが凡庸で民心を得ず、間もなく辭職し、共和政治は成立後十二年にして遂に1659年に倒れた。

ついで前三の子チャールズ二世が迎えられて此年王位に即き王政復旧した。

▲ 不自然な ひどい政治は 僅の間……1660

王政復旧 光はかえる ひどい政治は 僅の間……1660

(附記)

1. チャールズ二世の其後

(ア) 外交

チャールズ二世は外はオランダと戦つて北米の殖民地 ニュウアムステルダム (今のニューヨーク) を得、後佛王の 助を受け、それと同盟してオランダと戦つたが、国会は佛国との同盟を好まざり民心離れた。

(イ) 審査律と人身保護律

王は素行修まらず又屢々民権を抑え、旧教を復しようとしたので、1673年3月 議会は 審査律 (Test Act) を定め布き、官吏及議員とあるには、必ず 国教徒たることとして旧教徒を抑え、又1679年 人身保護律 (Habeas Corpus Act) を発布して、王が稍もすれば人民を囚え幽し、専制せんとするを防いだ。

(ウ) 保守党と自由党の起り

此頃議會にはトーライ党 (Tory) ウィッグ党 (Whig) が対立して居り、前者は王權を主張して後の保守党となり 後者は民權を重んじて

後の自由党とあつた。

{年記}

1661 マザレン死し、ユルバール佛首相とある (ルイ XIV の親政 始まる)

1664 英人 ニュウアムステルダムを領、ニュウヨークと名く

1667 ルイ XIV ネーデルランド 侵入

1672 ⑤ 英仏軍、オランダを攻む (→1678)

1673年 英国の審査律発布 (3月)

▲ 人々に 道を教える 審査律……1673

英国議회가 布令して人に 道を教える 審査律……1673

全年 文豪モリエール死す (1622生)

1674 ミルトン死す (1608<sub>生</sub>)

1675 保險会社創設

1679年 英国人身保護律の通過

▲ 保護律で 民権しっかり 埒をあけ……1679

英の議회가 保護律出して 民権しっかり 埒あける……1679

1682年 ペトロ大帝立つ

十七世紀の西欧に、俄に頭を<sup>モ</sup>上げて来たのは瑞典とロシアである。

ロシアは、862年ノルマンの酋長ルーリックが國を建て、から後、十三世紀中頃迄は蒙古、欽察汗國の支配を受けて居たが、ルーリックの遠孫、イワン三世 (Ivan III) が、モスコウ大公と稱して次第に勢力を得、東ローマ帝國の滅亡に當り同皇帝の姪を娶り、1472年自らその繼承

者とホリ、遂に欽察汗国を滅してロシア統一の基をおした。その孫イワン四世は領地をカスピ海まで<sup>ツァール</sup>拡張(ツァール)の称号を用い、シベリヤを侵し初めた。

イワン四世の歿後幾も亦く三統絶え内争が起つたが、ミカエル=ロマノフ立ち1613年内乱を鎮めて帝位に登りロマノフ王朝を開いた。

遂に此年即ち1682年その子ペトロー一世(大帝)位に即き、この後ロシア発展の大抱負を実現するに至った。

▲火のペトロー世に出ロシアの国強し……1682

<sup>命</sup>高鳴り 光をあげて 世にもペトローの国が張る……1682

(附記)

ペトロー大帝の治績

其後大帝は外遊して、蘭・独・英・佛・奥等も巡歴し制度文物を視察し、オランダのザーンダムでは職工とあつて造船術を究め、帰国してからロシアの制度風俗を改め、造船事業を盛にし、教育を起し、従来近衛兵を廢して常備軍を編み、海軍を創め設け、鉱山を採掘し、商工業を奨めロシア国内の諸事全く面目を一新した。

又外には南下政策をとり、トルコを伐つてアゾフ海附近を占め、東亞を侵略してネルテンスク条約に利を得、カムチャツカを占領し、北方戦役に瑞典に勝つて遂に北歐の覇權を握った。

(年記)

1685 ⑩ナントの勅令を廢す(新教徒虐待)

1689 カルカッタ市の建設

1687年 ニュートン重力の原則を公にす

▲引く力 よくもニュートン 見つけたリ……1687

大 落ちたリンゴも 人故光る 由なしニュートン 身のほまれ……1687

1688年 英国の名譽革命起る(第二革命とも云ふ)

英王チャールズ二世歿し、王弟ジェームズ二世が立つたが、王は旧教を保護して審査権を廢し、王權神授説を固持して憲法を無視し佛王ルイ十四世の後援を情んで専制政治を行つたので国民反抗し、此年十二月ウィッグ党は断然その廢立を図り、翌年王女メリーの夫ある和蘭の統領ウイリヤム三世を迎えて英蘭王とし、議会の議決した権利の宣言(Declaration of Right)を守るべきを誓わしめた。之を名譽革命(Glorious Revolution)と云ふ。

之から英蘭の憲法政治益々固くあり国運弥々栄えた。

▲<sup>ホラ</sup>譽とも 呼んで世の人 申かしがり……1688

イングランドじゃ 譽と呼んで 申かしがったよ 世直しを……1688

(附記)

登極令

1701年議会は登極令(Act of Settlement)を定めて英蘭王位相続者を新教徒に限ることとした。

(年記)

1689 英国の権利宣言發布 ○ネルテンスク条約(東洋史を見よ)

1696 ペトロー大帝第一回外遊に出る(←1698)

1700年 北方戦役起る

此頃、瑞典はバルト海岸の大部分を領し年少氣鋭、北歐の流石王<sup>スウェーデン</sup>と称せられて居たチャールズ十二世王を載き

に勢盛であった。

時にロシアのペトロ大帝は頻りに西方の門戸を得んとし、先ず丁抹王フレデリック四世及び波蘭王兼サクソニヤ公オーガスト二世と結び、ひそかに瑞典分割の企をなした。

チャールス十二世之を知り、此年自ら大軍を率いて丁抹に進み撃つたので、こゝに北方戦役が起ることゝなつた。

▲ 先ずチャールスが 渡るバルトの 和田の原……1700

おのれロシアと 先ずチャールスが 渡るバルトの 和田の原……1700

(附記)

北方戦役の全通と終局

1. 戦況

此年チャールスは丁抹を攻め、都コペンハーゲンを陥れて和を請めしめ、轉じてロシアに侵入し、十一月大帝の軍を大にナルバに石皮り、それから長驅ポーランドを侵し、更にサクソニヤを降し、再びロシアに向つた。

此間にペトロ大帝は兵力を回復し、バルト海岸の地をとつて1703年ネバ河口に首府ペテルブルグ(St. Petersburg)を建てた。

チャールス再びロシアに入り、誘われて深く敵地に進み、1709年南ロシアのポルタバ(Poltava)でペトロの軍と決戦し、足に重傷を負い、大に破れてトルコに逃げ、その援により大帝に当らんとして成らず、遂に國に帰り、1718年ノルウェーとの交戦中陣中に歿した。

2. 終局 (1721年のニスタット条約)

瑞典はチャールス12世歿後勢衰え、国人戦に倦み前年列國と和し、此年遂にロシアとニスタットに和し戦を終つた。

ロシアはこれからインゲルマンランド・エストランド・リボニヤの全部、カレリヤの一部を領してバルト海に雄飛し、瑞典はこの後振わず、スウェーデンはロシアの勢力範囲に入った。

(年記)

1700 西班牙王チャールス五世歿し、ハプスブルグ王統絶ゆ

1701年 イスパニヤ王位継業役起る

西班牙王チャールス二世には子がなかつたので、親戚ふる佛王ルイ十四世は、孫ふるアンジユ公フィリップ<sup>5</sup>をその相続者としようとし、独逸皇帝レオポルト一世は次子チャールスを立てようとした。

然るにイスパニヤ王は、佛王ルイの孫フィリップ<sup>5</sup>を相続者と定めて、此の前年歿した。

依てルイ大に喜び、「最早ピレニースの山をこえてこゝ来てアンジユ公をフィリップ<sup>5</sup>と稱し、西班牙王位に即かしめ佛西兩國の合一を企てた。

そこで、英蘭・和蘭・独逸の諸國は、國力の平均を失うを恐れ、此年独逸皇帝レオポルトの次子チャールスを推して西班牙の王に立てんと同盟して之に當り、遂に十三年間の大乱をひき起すに至つた。

▲ 面倒な 試合にある イスパニヤ……1701

王のせつきで <sup>も</sup>揉め起す 試合にあつたか イスパニヤ……1701

(附記)

1. 戦況

此役英國のマルボロ侯とフランスの、独逸の將軍サボイ公の、ユージン同盟等、佛西聯合軍を破り、殊にブレンハイム戦に、

ルイ大に敗れ苦んだ。又別に英軍はジブラルタルを攻落した。  
偶々英国では1710年マールボーロ内閣倒れて平和党  
之に代り、又翌年ドイツ皇帝歿し次男チャールズ即位して同盟  
崩れ、局面一変して講和となった。

## 2. 終局

### (ア) ユトレヒト条約成る (1713年)

- (1) 佛國は西班牙と合同し古い事を条件としてフィリップ5世の  
西班牙王たることを承認された。
- (2) 英國は西領ジブラルタル・ミルカ島・佛領ニューファウン  
ドランド島・アカジヤ地方ハドソン湾地方を得た。
- (3) サボイ公國は王国となり、シシリア島を領し(後シシリア島を  
サルジニヤ島と交換、サルジニヤ王国と称す)
- (4) ブランデンブルグ選帝侯はプロシヤの王号及少しの地を得た。
- (5) オランダは境上ニ三の城を得た。

### (イ) ラスタット条約 (1714年)

ドイツはフランスと別々に講和し、西班牙領ネーデルランド・  
ミラノ・ナポリ・サルジニヤを得た。

### (年記)

- 1701 プロシヤ、王国となる(フレデリック1世の即位)
- 1703 露國ペテルブルグ市の建設
- 1707 ⑤イギリス及蘇蘭の合同(大ブリテン王国成る)
- 1709 ⑦ホルタバの戦 ⑧マルプラケの戦
- 1710 英國ウイグ内閣トートリー内閣代る

### 1713年 ユトレヒト条約成る(四月)

(西班牙王位継承終る)

▲ 西倒る イスパニヤ役 それで済み……1713

47月や芽も出る 芽はユトレヒト イスパニヤ役 それで済む……1713

### 1714年 ③ラスタット及バーデンの和約(全土)

## 1714年 イギリス王 ジョージ一世の即位

(ハノーバー王朝の祖)

英國では ジェームス一世以来、イングランド・スコットランド  
兩王国は、共同の王を載いて居ても議会は別々に開いて  
まだ一國を成さなかったが、1707年 アン女王の時之を  
合併して大ブリテン王国(イギリス王国又は英國と称し英蘭  
と區別す)と称した。

此年アン女王歿し、登極令に従い、ジェームス一世の  
外曾孫ある独逸のハノーバー公を迎えて之をジョージ一世  
(George I)と云った。今の王朝ハノーバー家の祖である。

▲ 見出され イギリス王位に 即くジョージ……1714

海のあふたに 迎えを受けて イギリス王位に 即くジョージ……1714

### (附記)

#### 1. 責任内閣制度

ジョージ一世は英語に通じなかったので、國政を大臣の手に委  
ね、ワルポール(Walpole)が、ウイッグ党を率いて國政を  
執ったので、責任内閣の制度定り議會政治を確立した。

2. 世界大戦に當ってイギリス皇室では、ハノーバー家の稱を  
きらい、1717年 離宮の名によってウインザル宮と改めた。

### (年記)

1715 ルイ十四世死す

1718 ②セーデルス十二世歿死す

### 1721年 ニスタット和約(④露、瑞典間) (北方戦役終る)

▲ 物云えは 唇寒し 秋の風(古句)……1721

王は戦死し 又人倦んで 此の戦が 終る時……1721

- 1725 ペトロ大帝死す
- 1727 ニュートン死す(1642生)
- 1728 ベーリング海峡の発見(蘭人ベリンゲン)
- 1733 波蘭王位継承の乱起る(—1735)
- 1734 佛人レオミュール人造絹糸の考案を始む

### 1740年 プロシヤの勃興(フレデリック大王即位) (十月オーストリア王位継承役起る)

プロシヤ(*Prussia*)の地は、もとスラブ民族の一部ふるプロシヤ民族が北ドイツに居住し、十三世紀に独逸武士團に征服され後にポーランド王國に属した。十七世紀の初、ブランデンブルグ選帝侯之を併せてその子フレデリック・ウイリヤムに傳えた。侯は更にウエストハリア条約によってその領土を広めプロシヤに対する波蘭の宗主権を棄てさせ、佛國を逐われた新教徒を移住せしめて、工業を興し治績大にあがった。その子フレデリック三世は、1701年、都を柏林に築め、イスパニヤ王位継承役にドイツ皇帝を助けた功により王号を許され、プロシヤ王フレデリック一世と称した。

この後、1713年子フレデリック・ウイリヤム一世立ち、常備軍を増し、勤儉尚武、教育・実業を奨め、国力大に張った。その子フレデリック二世(大王)が遂に此軍(1740)位に

即いた。

王は文武の才を兼ね、父の余財ある財力兵力を用いて偉功を立て、他日プロシヤがドイツ全領に覇たる基を作った。

さて其頃ドイツでは墺太利公チヤールス六世が君臨して居たが、男子なく、ドイツの慣例は女子の相続権を認めなかったので帝は1713年女子相続を認める家憲を作り列國の承認を得た。

此年帝歿し長女マリヤ・テレサ(*Maria Theresa*)がその全領を相続したが、ババリア公チヤールス・アルパートは、フランスの援を得て継承権を主張し、サクソニヤ選帝侯オーガスト三世、西班牙王フィリップ五世等各々継承権を主張し、又プロシヤのフレデリック大王は争に乗じてシレシヤの地を奪わんとし遂に墺太利王位継承役が起る事と成った。

1. マリヤ・テレサよ ちと出すぎるぞと 嘆き立て……1740

墺太利をば マリヤが継げば 遂にババリア 嘆き立つ……1740

(附記)

#### 1. 戦況

1. 第一回シレシヤ戦争(普墺間—1740—1742)

プロシヤのフレデリック大王は、此年急に墺國シレシヤを侵略した。マリヤ・テレサ大に憤ったが、折から聯合軍と開戦中なので、遂に1742年七月シレシヤのブレスロウで譲知し同地をコレ

デリックに供えた。

(イ) 第二回シレシヤ戦争 (埃対聯合軍 1744-1745)

マリヤ軍は、ホンガリヤ人の援を得て、西・サクソニヤ聯合軍を破った。フレデリック大王 彼のシレシヤを奪い返されるを危み、1744年再び兵を出してマリヤ軍を破った。翌年十二月 ドレスデンに講和し依然シレシヤを占領した。

2. 結局 (アーヘン講和=1748年10月)

埃国は列国とアーヘンに講和し

- (ア) プロシヤのシレシヤ領有を認める
- (イ) 互にその侵地を還す
- (ウ) 埃太利の女子相続権を認める

3. 結果

プロシヤは此役により肥沃のシレシヤを得、人口増し国勢張り大に利を得た。

(年記)

1740 第一回シレシヤ戦争 (普埃間-1742)

1742 ㊶ プレスロウの講和

1744 第二回シレシヤ戦争 (埃対聯合軍)-1745

1745 ㊷ ドレスデン講和

1748年 アーヘン和約成る (㊸ 埃対列国)

(オーストリア王位継承役終る)

▲ マリヤテレサと 敵アーヘンに 約を成し……1748

アーヘン和約に マリヤと敵が 立つて其後の 世をかため……1748

1750年 フランクリンの電気に関する発見

▲ 培パンに 何がエレキか わけきき……1750

エレキエレキと 見に来た人が 何のタコかい ベンジヤミン……1750

全年 仏国のアルヌウ 金属ペン創製

1755年 英佛の直民戦争 (-1768)

▲ 身びいきの せみ英佛 おぐり合ひ……1755

ウ 植える人の地 身にひき合つて のちは英仏 おぐり合ひ……1755

全年 モンテスキエウ死す

1756年 七年戦役起る (第三回シレシヤ戦争)

埃太利王位継承役以後、マリヤ=テレサは大にフレデリック大王の暴状を愚み報復を圖り、シレシヤを取返さんとして頻りに軍備を整え、財政を整理し、産業を奨め、外交を革新し、ロシア・サクソニヤ・瑞典と同盟してプロシヤに当り、尚英國が佛国と殖民地戦争を起し、プロシヤに結んで居るのを見て、二百年來の敵国たるフランスと同盟し四方からプロシヤを侵そうとした。

然るに機敏なるフレデリック大王は之を知り、機先を制して此年急に兵をサクソニヤに進め、首府ドレスデンを占領した。之に対しマリヤ=テレサは同盟諸国と共に兵を出し、こゝに七年戦役が起るに至った。

▲ マリヤテレサが 憎い普王に 歯を向ける……1756

怨みわびして マリヤテレサが 憎い普王に 歯を向ける……1756

(附記)

1. 戦況

此役大王はイギリスから軍資を得、翌年佛埃軍をロスバハに、埃軍をロイテンに破り、更に翌々年露軍をツォルンドルフに破ったが、度々大戦に兵か尽しくあり、遂に1759年クネルズドルフに敗れてからその勢大に挫け、埃軍はドレスデンを陥れ、口軍と共に伯林を占領し、イギリスは宰相ピットが職を退いてから、軍資を断ったので、大王大に苦み 救度自殺しようとした。

2. 結局 (フベルッスブルグ和約)



偶々ロシア女帝エリザベス没してペートル三世即位するや、  
対普同盟を脱し去ってプロシヤを援け又英仏讒和し、その条  
約により佛軍がドイツから撤退し又瑞典が同盟を脱してプロシヤ  
と讒和したので、奥太利全く孤立し到底戦を続けられず、遂に17  
63年フベルスブルグ条約を結んで戦を終った。

和約

(ア) 各国境界は旧によること

(イ) プロシヤのシレジア領有を奪ねて認む

(ウ) プロシヤは マリアテレサの子 ジョゼフをドイツ皇帝に選ぶこと。

### 3. 結果

此の戦役を為、プロシヤは一時衰えたが、大王熱心に戦後々全堂を  
ふし、産業興り、軍備張り、學術興り、制度改り、歐洲の最強國  
に伍し、ドイツ帝國の基を築いた。

(年記)

1757年 プラッシーの戦 (6月)

(印度に於る英仏の争)

▲ もう我慢 ならぬとクライブ 眼には剣……1757

(注意) 東洋史全項を見よ ㊦ ロスバハの戦 ㊧ ロイテンの戦

1759 ㊨ クネルズドルフの戦 (普王敗る) ケベック落城

1762 露カザリンII即位、プロシヤと攻守同盟を結ぶ

## 1763年 英佛殖民地戦争終る (1755-)

(パリイの讒和)

スペイン・ポルトガルは十六世紀に東西両洋に跨って大  
大殖民地を有したが、その政策は土地の侵略を目的とし  
たので失敗し、十七世紀に入つてオランダが之に代り  
立ったが唯商利を目的とし武力の背景を持たなかつたの  
で衰え、十八世紀には英佛両國が勃興し、衝突し長い間  
各殖民地に争い英國は遂に佛國を圧し北米及印度兩地方

で最後の勝利を占めた。

そもそも印度では、英國は1600年東印度会社を立て其  
後マドラス・ボンベイ・カルカッタ等を領有し、佛國は16  
04年東印度会社を設け其後シャンデルナゴル・ボンジジュリ  
等を領し英國に対抗した。

アメリカでは英國はエリザベス女王時代バージニアを占領その  
後ニューイングランド・ニューアムステルダム(ニューヨーク)を占領し東  
海岸に十三州の殖民地を開いた。

佛國はカナダの東部ミシシッピー河流域即ちルイジアナ地方  
を占領した。

西班牙継承役の際英國はハドソン湾地方、ニューファウン  
ランド・アカジヤを佛國から奪った。

奥太利継承役の際佛國はデュプレックスの機略により印度  
に於て英國の勢力を圧した。

1756年七年戦役起り延いて殖民地七年戦役となり、  
アメリカに於て英軍頻りに勝ち、英將ウルフ奮戦してクベ  
ック・モンリオールを陥れ遂にカナダを取った。

又印度では英のクライブはフランスに結べるベンガル  
王の大軍をプラッシーに破り、ついで佛領シャンデルナゴル  
・ボンジジュリを占領した。後ヘースティングスがベンガル

の總督とかり思疎う手段を弄し英國印度領の基を固めた。

斯く英國が東西に大勝を占めたので佛國遂に屈して  
巴里の和約が成立した。

▲身びいきの 佛英戦も 済む和約……1763

植える人の地 身にひき合った 果はパリの その講和……1763

(附記)

巴里の和約 (英仏間)

- (1) 英國は仏國からカナダ・ケープ・ブレント島・ミシシッピー河泉の佛領及  
アフリカのセネガル河地方を得。
- (2) 英はスペインからフロリダを得 (代りとしてミシシッピー川の西の仏領を  
やる。)
- (3) 英國はポンジエリイ・シアンデルナゴルを仏國に キュウバ島をス  
ペインにかえす
- (4) 仏國は対プロシヤ同盟を脱し當時出兵中のドイツから撤兵す

(年訓)

全年 ⑤ フベルッスブルグ和約 (七年戦役終る)

1765年 英國の印紙条例發布 (翌年撤回)

▲身勝手な 布令だと政府 にくがらぬ……1765

印紙条例 無茶だとばかり 布令た政府が にくまれる……1765

1766 ウィリアム・ピット英首相とある (-1768)

1767 英國、アメリカに茶、紙、石炭等の税を課す

1768 露土南戦 (-1774)

1768年 クックの太平洋探検 (-1771)

▲身を挺し 果なき海を 行くクック……1768

命あげ出し 身を投げ出して 果なき大海 行くクック……1768

1769 ⑧ ナポレオン・ボナパルト生る (-1821)

1771 ロシヤがクリミアを占領す

### 1772年 ポーランド第一回分割

ポーランドは十世紀末にスラブ民族が建てた國で、十  
四世紀末、リトワニヤ公國と合し、ヤゲロ朝を開き國勢張  
り、一時ボヘミヤ・プロシヤ等をも従えた北欧の大国であ  
る。それが衰えたのは(1)十六世紀の末にヤゲロ朝絶え、  
選挙王制とふり貴族専権、党派争い、外国の干渉を招いた  
事、(2)国防上山河の形勝なく(3)健全な中等社会なく、貴  
族は農民を圧し(4)議会は自由否認権を行使し政務滞り國  
力の伸びなくふった事などに因る。

時にロシヤの女帝カザリン二世大志あり、トルコ・波  
蘭等の侵略を企て、1763年その嬖人スタニスラ・ポニヤトウ  
スキーを波蘭王位に即け自ら統治の実権を握ったので、  
波蘭人はトルコと同盟して兵を起したが、やがてカザリ  
ン之を鎮圧し次で海陸からトルコに進軍し、黒海沿岸の  
地を得オデッサ港を開いた。

プロシヤのフレデリック六王は之を見て安からず思  
此年オーストリアと謀り、ロシヤを引入れ各々その境上の地  
を奪った。これ第一回波蘭分割である。

▲皆寄って 先ずポーランド 掠め取り……1772

王の死後のもめ尻、ロシヤが 先ずポーランドを 掠め取る……1772

(附記)

1. 1793年 第二次分割

ポーランドの志士コシウシコ(Kosciusko)は大に怒り、新憲法を定め、紛争の原因たる選挙王制を改めて世襲とし、国会を設け、国勢の回復を図ったが、カザリン二世はその保守派の貴族を味方して乱を起させ志士を圧倒した。

プロシヤも亦安んぜず、露国と共に1793年第二次の分割を行った。

2. 1795年 第三次分割 (ポーランド滅亡)

第二次分割を見てコシウシコ憤慨止まず1794年亦義兵をあげたが、露、普、奥三国の聯合軍に攻められて敗れ、此年遂に三国に分割せられ、ポーランド全く滅亡した。

分割で得た地、露は約18万方哩、プロシヤは約5万方哩、オーストリアは約4万5千方哩であった。

3. ポーランド共和国

ポーランドは其後度々回復を企て、常に失敗に終ったが、世界大戦の結果、再び故地にポーランド共和国を見るに至った。

(年記)

1772 クックの第二次航海 (-1775)

1773 ボストン港内茶船の狼藉

1774 イースティングス 印度總督となる ロル十六世即位

④ ヒラデルヒヤの第一次大陸会議

1775年 アメリカ独立戦争起る (レキシントン及バンカーヒルの戦)

▲ 無茶苦茶な 税の雨に 浪が立ち……1775

おれはおれだけ 身は身で通る 無茶をすればと にじり寄る……1775

1776年 アメリカ合衆国の独立宣言

(1) 遠因 = 北米の英人はもと信仰の自由を得んが為

に住したものが多いため、独立自主の精神に富み、困苦

して開拓に従い繁栄に赴いたが、英国は本国の商工業を保

護する為、他国との直接貿易を禁じ、殖民地の発達を妨げたので、殖民人は不平であった。

(2) 近因 = 然るに本国政府は、七年戦役以来財政に苦み、

1765年 印紙条例 (Stamp Act) を出して課税を迫ったので、

殖民地の人民は本国の議会に代議士を出さぬ故、納税の

義務おしと之を拒んだ。

翌年政府は印紙条例を廃し、茶・酒・油・ガラス等に

課税したので、殖民人益々憤り、1773年茶を積んでボス

トン港内に碇泊中の英船に侵入し、その積荷を悉く海中

に投じた。

そこで英軍はボストン港を封鎖し、殖民地を威嚇した

ので両者益々反目した。

(3) 至過 = 1774年殖民地十三州の委員は、フィラデルヒヤに

集り、陳情委員を英国に遣したが本国省みおかつたので、

人民怒り、愈々本国と戦う事に決し、ジョージ=ワシントン

(George Washington) を元帥とし、又フランクリン (Franklin)

を佛国に遣りその應援を求めた。

翌年独立戦争の火蓋は、ボストン市外バンカーヒル

(Bunker Hill) で切られたが、英軍の勢強く、米軍屢々破

られて屈せず、遂に此年7月4日、独立宣言書 (Declaration

of Independence) を発表し、フィラデルフィアの空には、自由の鐘が鳴り渡った。

▲ 皆人の 胸に自由の 火は燃えて……1776

あれ金鐘が鳴る 皆よく聞きしれ 胸の自由に 響く鐘……1776

(附記)

### 戦況

1775年バンカーヒルの戦いによって独立戦争は始められたが、独立軍には訓練なく且つ軍需が乏しかったので勢弱わずニューヨーク、フィラデルフィア陥った。併し民軍奮起せず後サラトガで大勝した。

又佛国に使用したフランクリンの外交成功し、佛西両国は同盟して応援し、露国のカザリン二世は英海軍の横暴を悪んで武装中立を唱えその他諸国の同情独立軍に集り、14のラハイエット、波蘭のニシウシコ等の名士の来援もあり追々英軍を破り殊に1781年ワシントンがヨークタウンの英軍根拠地を陥れて英将コーンウォリス以下七千人を捕えるに及んで大勢こぼれ定つた。

(年記)

1776 クックの第三次航海(1779)

1777 ⑩ サラトガの戦い ⑪ 十三州合衆国と称す

1778 ① 14国の米國独立承認。ハバリア王位継承役(-1779)

老ピット・ホルテール・ルソー 死す

1780 マリヤ-テレサ死す ⑫ 英蘭開戦

1781 ⑬ ヨークタウンの陥落。文豪レッシング死す

1783年 アメリカ独立戦役終る(-月)

(ベルサイユの講和成る)

ヨークタウンの戦いに敗れて英国逆に屈し、此後フランス・

丁抹・瑞典・プロシヤ・墺太利等が合衆国の独立を認めた

ので、此年九月英米の間にベルサイユの和約が成立した。

(1) イギリスは、アメリカ合衆国の独立を認め、ミシシッピ河以東の地をアメリカに割く

(2) 西印度のトバゴ島(Tobago)とアフリカのセネガルとをフランスに割く

(3) フロリダ半島及ミノルカをイスパニヤに還す

▲ 叢雲も やっと晴れたか 星の雨……1783

雨もあがって 叢々雲の やっと晴れたる 州十三……1783

(附記)

### 1. アメリカ合衆国の憲法制定(1787)

合衆国は独立後、各州分離の化員があつたが志士の尽力で之を防ぎ、此年憲法を定め、政体は聯邦組織の共和政体で各州自治とし、中央政府が聯邦を總括して行政、立法、司法の三権を分ち

行政は大統領(任期四年)が總括し、立法は元老院(各州二人、任期六年) 代議院(三万人に一人を出す任期二年)を以て国会をなし、司法には高等法院あり、院長は終身官で大統領が任命する。

### 2. ワシントン第一回大統領とふる

1789年ワシントンを第一回大統領に選み、後二年してワシントン府を國都と定め建國の大業を完成し以後國運隆々。

(年記)

1783 少ピット英首相とふる

1784 ホイット=イ 綿繰機械發明

1786 フレデリック大王死、ウィリアムII即位(-1797)

1787 露・土開戦(-1792) ⑭ 北米合衆国憲法制定

1789年 ワシントン米大統領とふる(4月30日)

▲ 身のほまれ 役はジョウジに 例があき……1789

僮人ジョウジの 身に影をえて やがて光が ロッキーに……1789

全年 ⑮ 14国々民議會開く

## 近古の文明

学藝復興以後歐洲文明は次第に進み十八世紀に入って長足の進歩をした。併し貴族、僧侶横暴で庶民沈滞し

- (1) 旧慣打破の革新主義起る
- (2) 殖民地開拓から産業発展
- (3) 科学の進歩 等が著しかった。

啓蒙文学 = ホルテール (政治革新)  
ルソー …… } 等の佛文藝一影響 (14革命)  
モンテスキュー } (自由平等説)

哲学 (英国の全賢派大陸の権理派)  
- ベーコン、デカルト・スピノザ・カント (批判、論議、近世哲学の基)

経済学 = アダム・スミス (国富論著)

史学 = キッポーン

文学 { 英 - シュークスピア・ミルトン  
仏 - コルネイユ・モリエール・ラシーヌ  
独 - レッシング・ゲーテ・シッレル

藝術 { 絵画 = リューベンス・ファン・ダイク・レンブラント  
音楽 = モーツァルト・ベートベン

科学 { コペルニクス (地動説)  
ガリレオ (望遠鏡)  
ケプレル (諸星運行法則)  
ニュートン (引力法則)  
フランクリン (避雷針発明)

産業革命 { ワット (蒸気機関発明)  
アークライト (紡績機発明)  
カートライト (改良織機発明)

## 第四史期

### 1789年 フランス大革命起る

フランス大革命は歐洲の世態を一変せしめた大乱であるがその遠因は

(1) ルイ十四世以来専制政治とあり、民権を認めず妄りに課税、禁錮したこと。

(2) 貴族・僧侶は全国土の三分の二を所有し、税を免れ種々の特権を持ち奢を極め、平民は国費を莫い誅求に泣いた。

(3) 革新文学起り、ホルテール・モンテスキュー・ルソウ等の自由平等、革新思潮に感化されたこと。

(4) 北米合衆国の独立が佛人を刺戟したこと。

以上のやうな情勢の下に、フランスは来らんとする嵐を前に歩いて居たので、ルイ十五世、臨終に大息して「朕の後には洪水来らん」と曰ったが果してその通りであった。

1774年ルイ十六世立って王位に即いたが、十四世以来の奢侈・外征に財政齟、負債山の如くであったので、王は先ず財政整理を企て、テニルゴラ・ネッケル・カロヌ等その任に當つて努めたが、貴族・僧侶等の反抗に会い失敗した。

依て王は、ネッケルの説に従い国民と共に此事を四らんとてそれまで中絶して居た三部会を1789年5月ベルサイユに召集した。

然るにネッケルは豫め三部合同で決議すべき事を議定しおかつた為、議論分れ意見衝突し、平民は遂に分離して国民議會を組織し、新憲法を制定する迄は解散せずと誓った。

王は貴族等の意見に動かされてネッケルを斥け、武力を以て議會を圧迫せんとしたので、暴動忽ちパリに起り、此年七月十四日、先ずバス・キュ(Eastille)の牢獄を破壊した。これ實に大乱の発端で、再々暴民所々に起り、殺人・放火・掠奪等を恣にした。

▲ 面倒が、世の中じやふど” ルイが云い……1789

怨積もつて 先ず暴民が 破るバス・キュの 牢の壁……1789

(附記)

(1) ルイ十六世の幽囚

巴里の暴動は国王の怒り、ラファイエットの率いる護国軍の兵力により一時鎮められたが、王が兵力により議會を解散せんとするに及んで同年十月暴徒、ベルサイユ王宮に乱入し、国王を擁してパリに帰り、ヴェルサイユ王宮に幽閉した。

(2) 新憲法制定

(ア) 此年各地の暴動により、貴族は禍の其身に及ぶ事を恐れて、議會で特権をすてる事を宣言し、議會はラファイエットの発議により、人権の宣言を發表し

王之を裁可した。

(イ) 1790年ミラボウ伯等の尽力で、立憲王政主義の憲法を定めた。

(3) 過激派隆盛

(ア) 憲法制定後、温和派のミラボウ及びラファイエット等が盡して程々改革し小康を得たが1791年ミラボウ歿し過激派勢を得たので王憂い、皇后マリー=アントワネットと共に密に英國に遁れようとしたが途に捕えられ宮中に幽せられ同年九月制定完了した憲法に誓約をなさせられた。

(イ) 1791年国民議會解散し十月新憲法による立法議會が開かれたが、立憲王政党は勢ふく、共和主義のジロンド党及びジャコベン党の勢が甚盛にあつた。

(年記)

1790 フランクリン死す

1790年 アダム=スミス死す

▲ 身は死すも 理財のミス 忘れず……1790

アダムスミスの 身は死を行けど 理財論こそ 忘れぬ……1790

1791 ①佛王走り、途に捕わる ②国民議會解散 ③立法議會開会

1792 ④1、奥に宣戦 ⑤佛国民集會開会

1792年 佛国、共和政布告(9月21日)

(対仏大同盟戦争……1797)

▲ 廻る世の 例にもされる 共和制……1792

今はフランス 物皆変り 例が開けた 共和政……1792

1793年 ルイ十六世の死刑

フランス立法議會が開かれて共和主義のジロンド党、ジャコベン党等の勢強く、中でもロベスパール・ダントン・マラー等の率いたジャコベン党尤過激で、巴里の暴

民と内外相応じ、手段を採ばず悉く旧慣を打破し、新に中央集権の共和政体を立てようと図った。

1792年普・墺両国は、革命の影響を恐れ、同盟してルイ十六世を救めんとし佛国内に侵入したが、それが其後廿三年間歐洲大戦の発端を為すものである。やがて南佛マルセイユの義勇兵約五千人がマルセイユの歌を高唱して進み普墺軍を撃退した。

そして外国の干渉あるは、国王がその国々に内通した為だと邪推して王宮を攻めた。

王は逃れて立法議会に頼ったが、議会は却って王を捕えて獄中に幽閉し、革命軍は進んでライン地方及び墺領ネーデルラントを侵略した。

かくて1792年9月立法議회를解散して国民公会を開き、共和政治の成立を宣言し翌1793年1月21日遂に国王ルイ十六世を国民の公敵として断頭台上に刑した。

▲道連れは ルイも連れ得ぬ 死出の旅……1793

落ちて行く身は 三瀬の水も ルイに寒かる 死出の旅……1793

1793年 恐怖政治始まる (1794……終る)

ルイ十六世死刑の報傳つて国内の勤王党乱をおし、外には英祖ピットの首相で此年英・普・墺・葡・西の諸国が

第一回列国同盟を作つて佛国に侵入した。

当時フランスでは、ジャコベン・ジロンド両党が相争つて居たがジャコベン党は暴力を以て六月ジロンド党を排して国民公会の全権を握り、革命裁判所、公安委員等を設け、ダントン・マラー・ロベスパールがその委員とあつた。此間、制度を変更して強制徴兵令により新軍隊を編み、共和暦(一週十ヨ、一ヶ月廿日 最終月廿五日)を布き、キリスト教を廢して道理崇拜を為しおどした。

偶々マラーは、シヤロット=ユルデーと云う一婦人に刺殺されたので、ジャコベン党員益々狂暴を逞くし前王妃マリー=アントアネット以下、貴族・僧侶・政敵其他多数の人々を殺し凄惨を極め、翌年七月まで所謂恐怖時代を為した。間もなくジャコベン党分裂し、温和派を生じたので、ロベスパールはその首領ダントンを殺して独り暴威を逞くし人皆戦慄したが、国民公会員は遂に1794年7月ロベスパール及其余党を捕えて之を殺し革命裁判所及公安委員を廢し、恐怖政治は一年余にして終つた。

▲盲滅法 乱暴始める 凄仲間……1793

ロベスパールが 排されて済み……1794

おそれ時代の 無茶やけ糞に 乱暴始める 凄仲間……1793

(附記)

自由か罪か

フランス革命の時、暴政の犠牲にあって仆れたローラン夫人  
死に当り、自由の神像を望み叫んで曰く  
「あゝ自由よ汝の名によって行ゆる、罪悪何ぞぞれ多きや」と。

(年記)

1793 ③ 恐怖政治 ④ マラー、婦人コルターに殺さる ⑤ ジロンド党  
死刑、⑥ 激進派二回分割

1794 コシウジコ等ポランド回復を図る

1794年 ロベスぺール殺さる (7月)  
(恐怖政治終る)

▲ めちやくちやに ロベスぺールを とちめる……1794

恐ろしがられた マラーは刺され ロベスぺールは 土に入る……1794

1795 佛の独裁政府始まる

1795年 ポランド派三回分割 (全国滅亡)一月

▲ 滅法ランド 露埃普兵に 根を断たれ……1795

運も悲しい 滅亡ランド 露埃普兵に 根を断たれ……1795

1796 ナポレオン伊太利征途に上る

1796年 ゼンナー種痘の効を証す

▲ 先ず君が 冥手に弱る 痘痘神……1796

おのれ小癩と 眼と眼でにらむ 冥手ゼンナと 痘痘神……1796

1797年 カンポ・フォルミオの和約  
(ナポレオンの興起)

フランスではロベスぺール仆れて恐怖政治終り、革命  
の威炎稍衰え、国民公会その権を復して 1795年新に憲  
法を定め、五名の總裁に行政権を、兩院制(元老議會及五  
百人会)の議會に立法権を興える事として自ら解散しこゝ

に總裁政治が興った。

此時巴里に又暴動が起ったが、青年士官ナポレオン・  
ボナパルト (Napoleon Bonaparte) が忽ち之を鎮めた。

是よりさき佛軍猶聯合軍と戦を続け、和蘭を取ってバ  
タビヤ共和国を建て、プロシヤ及イスパニヤと 1795年  
パーゼル (Basel) に和し、ライン左岸の地を得たので、  
歐洲でフランスの敵はたゞ埃太利とイギリスのみとあつた。

よって總裁政府はカルノー (Carnot) の議を用い、三軍  
を以て埃太利を攻めさせたが、第一軍と第二軍とは共に  
敗れ、独りナポレオンの第三軍のみは、北伊太利に入っ  
て速りに埃太利軍を破り長驅してウイーンに迫つたので、  
埃太利遂に屈し、此年カンポ・フォルミオ (Campo Formio) に  
講和し、埃國領ネーデルランド及ライン左岸の地を佛國に  
割き、且北部伊太利にナポレオンの創設した二共和国を  
承認した。

ために第一回歐洲大同盟こゝに崩れてフランスの敵は  
英國のみとあり、ナポレオンの威名は内外に高くあつた。

▲ 眼をみはり リッツルがあと 街で云い……1797

腕の凄さに 皆眼を見はる 凍りし奈翁が 身のほまれ……1797

(附記)

1. 埃及遠征 (1798-99)



ナポレオンはイギリスが、印度の交通を妨害する為之を憚らざんと  
兵を率い地中海を渡って埃及に入りピラミット下で戦った。  
其時士卒を厲かまして曰く「見よ四千年の年月が汝等を見下し  
て居るぞ」と。

かくて埃及を定めたが八月アブキール湾で英将ネルソンと  
戦い敗れ佛海軍全滅した。彼屈せず再び埃及に退いて機を  
待った。

## 2. ネニ四列国同盟 (1799-1800)

英首相ピットの首唱で、埃、露、葡、土等とネニ四列国  
同盟を組織し、其軍が佛国々境に迫った。

ナポレオン急に帰国し、總裁政府を以て新憲法を制定し  
執政官三名を置き、自らその第一執政官とあり武断政治  
を行った。

## 3. ネニ四 埃太利遠征

ナポレオンは英埃二国の敵意を怒り、先ず埃国を征せんと、  
1800年自ら軍を率い、アルプスの峻を超えて北伊太利に入り、  
マレンゴで大に埃軍を破り、別将モロウは南ドイツのホウヘン  
リンデンで埃軍を破った。

のち兩軍合しウイーンに迫ったので埃国恐ルリウネビルに和  
し佛はライン左岸の地を得た。

## 4. アミアン和約 (1802年英仏講和)

英国は連年の戦に財政困難、国民平和を希い、宰相ピ  
ット辞職したので此年アミアンに和し、南米トリニダード、印度の  
セイロン両島のみ保留して仏国革命以来の侵地を旧領主に  
還すことを誓い、佛国外交成功し歐洲の戦雲一時収った。

### (年記)

1798 ローマ共和国設立

1798 年、ナポレオン埃及征途に上る(6月)

(アブキール湾の戦い8月)

▲ 見よや人 凜乎と立てる 四千年……1798

勇め人々 見よ砂原に 凜乎立って居る 四千年……1798

1799 ネニ四対佛大同盟戦争(-1804) ①仏總裁政府廢止、執  
政官政府成る。ワシントン死す

1800 ナポレオンの埃太利遠征(5月)

(④ マレンゴの戦い ⑤ ホウヘンリンデンの戦い)

▲ 山とどろ わけ行くアルプ 湧くカ……1800

月夜の奈翁が 勇気を鼓して わけ行くアルプス 湧くカ……1800

1801 ① 英国アイルランド合併のリュネビル和約

1802 ② 英仏のアミアン和約 ③ ナ翁終身執政官とある

1804 ③ ナポレオン法典の発表 ④ ピット再英首相とある

1804 年 哲人カント死す(1724生)

▲ 世を辞して 我が大カント 土に入る……1804

大きい波紋を 世に投げたりと 湧くはカントに 土の歌……1804

## 1804年 ナポレオン帝位に即く

ナポレオン、ボナパルトは、カロロ=ボナパルトの子として1749  
年コルシカ島に生れた。長じてパリの陸軍兵学校に入り、ツ  
ーロン攻撃の時に砲兵大尉として戦功をたて、ついで伊太利  
に入り連戦連勝名聲一時に高まった。埃及征服の後帰国  
して政府を以し、自ら第一執政官となつた。

既にして再び伊太利に入り、埃太利軍を破り、リュネビル  
和約を結ばしめて大に國威をあげた。

1802年推されて終身執政官とあり、意を内治に用い財  
政を整え、交通を開き、教育・実業を奨励し、ローマ旧教  
を再興し、超えて1804年三月有名かナポレオン法典を  
発布し治績大にあがり民望一身に集つた。

遂に此年五月国民大多数の投票で皇帝とあり、十二月

ニ日 戴冠式を行い、ナポレオン一世と称し翌年更に伊太利王を兼ねた。

▲ 世の栄え 若き奈翁が 即く帝位……1804

威望背負うて 世に立つ栄 若い奈翁が 即く帝位……1804

(附記)

1. 第三回対佛大同盟……1804年

アミアン条約後一年を至てイギリス又フランスに宣戦し1804年主戦論者のピットが再び首相となり遂に此年、英・露・墺・瑞典等が第三回列国大同盟を作りフランスに當った。

2. トラファルガルの海戦……1805年

ナポレオン大に英国を惡み、その大陸諸国との交通を断つて苦しめんとし遂に北佛フロンに大兵を集め、一挙ロンドンを衝こうと思ひ、先ず佛西聯合艦隊をして英艦隊を牽制させ蘆に集じて、イギリス海峡を渡ろうとしたが、ネルソン之を曉り仏艦隊を追うてイスパニヤの軍港カジスに封鎖した。

やがてナポレオンの命令でカジス港を出たビルヌーブの率いる仏西聯合艦隊三十三隻は、トラファルガル岬附近でネルソンの率いる英艦隊27隻と戦ひ、英軍大勝を得、仏西聯合艦隊は殆ど全滅し、ナポレオンの企水泡に帰して海上権全く英国に帰した。

時に1805年10月21日で、日本海大海戦前百年である。

3. ネルソンの死(1805年10月)

トラファルガルの海戦で、英将ネルソンは名譽の戦死を遂げたがその死に臨みし上帝に謝す、余は余の任務を終了しと云ひ從容瞑目した。時に年四十七。一方佛将ビルヌーブは英軍に捕えられた。

4. アウステルリッツの三帝会戦(1805年)(第三回墺太利征伐)

ナポレオンが英国侵入を企てし居る時、墺露の聯合軍は、仏國々境に迫ろうとしたのでナポレオンは英國侵入の計画を中止して南獨に殺到し、墺軍をウルムに破り直布ウイーンを占領し1805年12月、墺・露軍の来るのを待つてアウステルリッツで会戦し、大に之を破り同月プレスブルクの和約により仏國は墺領ベニスを割取した。世に之を三帝会戦と云う。

5. ピットの死(1806. 1)

アウステルリッツで佛軍大勝の報英國に達した時、偶々英将ピット病床にあり、憂え憤つて侍臣を顧みし壁上の地圖を取去り、それは今後十年間用をおさすのであらうと云ひ病筆リ1806年1月遂に世を去つた。

(年記)

1805年 トラファルガルの海戦(10月)

▲ 優劣の 分れぬネルソン ナポレオン……1805

海の戦に 優劣定めよと 渡るネルソン ナポレオン……1805

1805 ⑩ ネルソンの死

1805年 アウステルリッツの三帝会戦(12月)

(第三回墺太利征伐)

▲ 苦き日ぞと わつと斬込む ナポレオン……1805

アウステルリッツに 世をかけた弓の わつと斬込む ナポレオン……1805

1806 ①ピットの死 ②ライン同盟成る ③神聖ローマ帝國とあ

1806年 大陸封鎖令を下す

ナポレオンはトラファルガルの海戦に敗れて、英國侵入の望全く絶え、其後各地に轉戦して歐羅巴諸国は概ね彼に服した時、独り英國のみ對抗して海上に雄飛して居たので彼は之を全済上かう苦しめようと思ひ、此年十一月、柏林滞在中に、大陸封鎖令(Continental Barrier)を發布して、歐洲大陸諸国が英國と通商することを禁じた。

▲ ヨーロッパを 輪でしめつける 布令を出し……1806

イギリス倒そうと ヨーロッパをば 輪でメつけたる 布令を出す……1806

(附記)

1. 大陸封鎖令は又大陸制度 (Continental System) とし、伯林条約 (Berlin Decree) とも云う。

2. 兄ジョセフ

その後ポルトガルは茶箱の命を奉じおかつたので、ナポレオンは将を遣して之を討たせ、以てイスパニヤ国王父子を南佛に幽閉して、兄ジョセフ (Joseph) をイスパニヤ王とした。然るに西国人は英国の援を得てジョセフを逐うたのでナポレオンは1808年親征してマドリードを占領し兄の位を復した。

3. ナポレオンのプロシヤ征服... 1807 (ケルジット和約)

プロシヤはチー回列国同盟後戦局の外に立って学藝大に進み名家輩出した。

然るにナポレオンはその向背を疑い之を辱めたので1806年9月、国王フレデリック=ウイリヤム三世は大に怒り、ロシアと同盟して仏国に宣戦した。

ナポレオン直に進み、プロシヤ軍を破つて伯林を占領し、此年1月、露普兩國聯合軍を、プロシヤのフリードランドに破つたので、兩國遂に屈し、プロシヤのケルジットで和議を結んだ。

此後プロシヤはその版図の大半を失ひ、屈辱地においた。

4. ケルジットの和約条件

(ア) プロシヤはライン、エルベ両河間の地をフランスに割く。

(イ) ナポレオンはエルベ河以西の地にウエストハリヤ王国を建て、弟ジュロームを王とすること。

(ウ) プロシヤは、チーポーランド分割によって得た地を割きワルツァ公国を築き、サクソニヤ王オーガストをして兼領させること。

(エ) プロシヤの常備軍を四万二千人以下とし、償金一億フランを支拂ふこと。

5. 1809年、第四回オーストリア征伐 (ワグラム戦、ウイーン会議)

オーストリアは前年ナポレオンのイスパニヤ出征を機として再び兵をあげたので、ナポレオンは急に轉じて之を討ちウイーンに進み、更にその主力軍を此年七月ワグラムに破り、遂に十月ウイーン和約を締りしめ、イストリヤ・タウレマチヤ等を割き、大陸封鎖令を守らしめた。

6. ナポレオン極盛時代

此時から、1812年ロシア征伐に至る間は、ナポレオンの極盛時代で、その領地北はバルト海から南は地中海に達し全歐中

只英・土のみ帝に従わぬだけであつた。

尚ナポレオンは翌1810年4月、オーストリア帝女 マリヤ=ルイザと結婚し、家門を高めた。

(年記)

1807年 ナポレオンのプロシヤ征服 (ケルジット和約)

▲ 弱る露普 和睦持こむ ナポレオン... 1807

いじめられては 弱った露普が 和睦持こむ ナポレオン... 1807

1807年 米人フルトン汽船を実用に供す (10月) (発明は1803年)

▲ 行く船に 笑うフルトン 身を祝ぎて... 1807

浮ぶ汽船に 喜び見せて 笑うフルトン 身のほまれ... 1807

1807 ⑦ケルジット和約成る (14. 10. 普蘭)

1809. 第四回オーストリア征伐 (4月 - ⑧ワグラム戦 ⑨ウイーン会議)

▲ 八当り ワグラムで又 利を得たり... 1809

オーストリアと 行き代つ茶箱 ワグラムで又 利を得たり... 1809

1809 ナポレオン法王領を併せ法王を幽す、ナポレオン皇后ジョセフィンと離婚す

1809年 電信機の発明

▲ 世の心 渡す千里の 利器が成る... 1809

エレキ仕掛で 世の人心 渡す十里の 利機が成る... 1809

1810 ⑩ナポレオン 奥帝女 マリヤ=ルイザと婚す ⑪オランダ14国に合併 ○ベルリン大学ひらく

1812年 ナポレオンのロシア征伐

ロシアはケルジットの和約以来、フランスに従って居

たが、大陸封鎖が自国に不利ありを見て、英国と通商し

たので、ナポレオン怒り、此年五月、諸国の兵五十万を

率いて遠征し、途中幾多の困難を凌ぎ進み、九月ボロジノの激戦に勝ち長駆して九月モスクウに入った。

時に佛軍は飢と寒さに苦み大掠奪をおし、その松火から五昼夜の大火を起して全市焦土となり、宿舎亦く食糧亦く、滞在三十五日の後遂に窮して退却を始めたが、帰路コサック兵の追撃に遭い、ネイ將軍等の奮戦も飢寒に妨がられて思うまゝならず佛軍大に敗れ死傷算亦く、ナポレオンは僅に身を以て十二月巴里にのがれ帰った。

此役佛軍失う所多く生還者僅に二万人であつたと云う。

▲ 弱る佛軍 飢と寒さの 苦しさに……1812

伏ったロシアに 弱った奈翁、飢と寒さの 苦しさに……1812

(附記)

歐洲獨立戰役 (亦四回列國同盟)

(ナポレオン、ライプチヒに敗る)

ナポレオンがロシア遠征に失敗したのを見て、諸國軍蜂起し、所謂歐洲獨立戰役が起つた。

これより前プロシヤは スタイン・ハイデルベルヒ等が相次で首相となり、銳意弊政を改め、軍備を整え民間にも遠征会亦く起り、佛國に対する報復の期を待つて居た。

偶々ナポレオンの敗報を得たプロシヤは此年先ず起つて露・英・埃・瑞典亦く、同盟し十月ナポレオンの軍を大にサクソニヤのライプチヒに破つた。

之を 諸國民の戰 (Battle of the nations) と云い、此戰に敗れてからナポレオンの威名は地に落ちた。

(年記)

1812年 英人スチブンソンの汽車發明 (一説1814年)

▲ 行来にも 今は便利の 汽車ができ……1812

今は便利に 行き来ができる 丘の蒸汽の かけくら……1812

1813年 歐洲獨立戰役 (亦四回列國同盟)

▲ 世に敗けて 威光落した サクソニヤ……1813

月宛の奈翁も 世に敗けて、威光落した サクソニヤ……1813

全年 ライン同盟及ウエストハリヤ王國が解散

1814 ③ 巴里陷る ④ 第一回巴里和約

1814年 ナポレオン、エルバ島に流さる

ナポレオンがライプチヒに敗れて巴里に帰ると、英將ウエリントン公はイスパニヤを征して北上し、同盟軍之と相応じてフランスに侵入し、此年三月巴里を陥れた。

そこでナポレオンは帝位を辞し、ついでエルバ島に流され、ルイ十六世の弟ルイ十八世が迎えられてフランス王位に即いた。

王は先ず同盟諸國と巴里和約を結び、その侵地を還して1792年の境界に復し、更に歐洲の土地処分を議定する為ウイーン列國會議を開く事と約した。

▲ 世に負けて エルバの島の 月を見る……1814

今は奈翁も 世の秋閑いて エルバ小島の 月を見る……1814

(年記)

1814 ウイーン列國會議を開く (-1815) ロフイヒテ死す

1815 ③ ナポレオン復位 ④ ビスマルク生る

1815年 ナポレオンの没落

(ウォーターローの戦—セントヘレナに流さる)

ウォーターローの戦 = ナポレオンはエルバ島に居てルイ十八

世の不人望と、ウイーン会議で列国の利害衝突して形勢の不穏を知り、此年三月密に島を逃れフランスのカンヌに上陸し、国民の歓迎を受けて巴里に入った。

依てルイ十八世出家し、ナポレオン再び帝位に即いた。列国はナポレオンの再起を聞いて大に驚き、直に同盟軍を起し、イギリスのウェリントン公・プロシヤのブルッヘル等が征討に向い、此年六月十八日西軍ベルギーのウォーターロに戦ったが、ナポレオン大敗して巴里に逃れ帰り、同盟軍進んで巴里を陥れ、ルイ十八世再び帝位に即いた。

▲ よい角カ ウェリントンと ナポレオン……1815

ウォーターロに 世を賭け弓の ウェリントン氏と ナポレオン……1815

セント=ヘレナに流さる。

ナポレオンは再び帝位を去った後、アメリカに逃れようとして果さが遂に英艦に降ったが、列国議して之を大西洋中の一孤島、セント=ヘレナに流した。

島に在ってナポレオンは英将ハドソン=ロウの冷酷なる監視の下に悶々として日を送り遂に1821年5月5日五十三才で病歿した。

▲ 夢かりき 栄華はこいに 廿年……1815

今は流るゝ 夢かりき 栄華極めたも 廿年……1815

## 1815年 ウイーン列国会議終る

1814年九月から歐洲諸国(トルコを除く)の君主又は委員、英のウェリントン、佛のタレラン、奥のメッテルニヒ、普のハルデルベルヒ、フンボルト、露のネッセルローツ等、ウイーンに集つて大戦乱の善後策を議じ、奥太利のメッテルニヒを議長として会議を開いたが、プロシヤ公国及びサクソニヤ処分問題で紛議を起し冬国大に争った。

偶々ナポレオンの再挙をき、互に譲歩して此年六月その成立を見た。

▲ 寄合った ウイーン会議で 値がきまり……1815

歐洲戦乱、漸く終り ウイーン会議で 値がきまる……1815

(附記)

### 1. ウイーン会議の経過

此の会議に於て、露国はポーランド、普国はサクソニヤに対し野心あり之に対し英仏及対し、中にも仏大使タレランは正統主義、復旧主義を唱え列国使臣を翻弄した。

### 2. 決議の大意

#### (ア) 復旧主義成功

佛、西、ナポリのミブルボン家、サルジニヤ、法王領等の旧君主復旧。

#### (イ) 英國

マルタ、セイロン、ケープ植民地等占領、イオニヤ諸島の保護権を得た。

#### (ウ) 露國

ワルソウ公国の大部を得、波蘭立憲王国を興し露帝其王を兼ね、

(エ) 普魯

ネーデルラントの領土をすて代りにロンバルディア及ベニスを得て  
伊太利に勢を張った。

(オ) 和蘭

旧オーストリア領ネーデルラントと合し、ネーデルラント王国となる。

(カ) 瑞典

丁林からノルウェーを得た。

(キ) 瑞西

聯邦の数を増し永久局外中立国となる

(ク) プロシヤ

サクソニアの北半、ワルソウ公國の一部、ライン河中流西岸の地を得

3. ドイツ聯邦成る

ドイツに於ては、普魯以下三十五の君主国及び四自由市合し  
てドイツ聯邦 (German Confederacy) を組織し、聯邦會議を  
フランクフルトに置いた。

1815年 神聖同盟の成立

ウイーン會議の後ロシア皇帝アレキサンドル一世は普魯  
及び普王等と共に此年9月26日、神聖同盟 (Holy Alliance)  
を結び、基督教の主旨により、各国互に相愛し、相親し  
み、永く平和を維持しようと誓え、英國・トルコの外は  
歐洲諸国の君主之に加盟した。しかし後には保守主義勵  
行の機關の如くはなつた。

▲ 世は情と 皇帝が説いた 仲間等に……1815

愛で立とうよ 世は情だと アレキサンダーが 仲間説く……1815

(附記)

メッテルニヒの同盟利用

当時はフランス革命の反響として、各国政府復古主義を執つた

か、民間には自由の思想強く国民思想又興つたので、神聖同盟  
は之等を抑圧する機關となつた。

中にも幾多の異民族から成る伊太利では特に之の必要が  
あつたので、同國宰相メッテルニヒは巧に之を利用して自由主  
義を圧え、專制政治を布いて一時全歐の國事を左右したから、  
之に反抗する者所々に起つた。

(ア) ドイツの自由主義鎮圧

当時ドイツでは、大学生等が種々の團體を作り、盛に自由  
統一の運動を試みなが、メッテルニヒ之に干渉し、1819年  
聯邦會議をカールスバートに開き、言論を圧し、その運動を抑つた。

(イ) イズパニヤの革命鎮圧

同國では國王の專制に対し1820年暴動起り、自由主義  
憲法を出でしめた。メッテルニヒ之に干渉し、佛軍を遣し王  
を援けて革命運動を鎮めた。

(ウ) 伊太利の革命鎮圧

当時伊太利は分裂不統一であつたのをカルボナリ党(炭焼  
党)が統一運動を起したのでメッテルニヒは境軍派遣鎮定。

(エ) アメリカ諸國

この地の國々にも独自の拳兵があつたので、メッテルニヒは神聖  
同盟を利用し干渉せんとして英・米の反抗の爲失敗した。

(年記)

- 1815 西シシイ王國創設
- 1817 ジェームズ・モンロウ合衆國大統領となる
- 1818 ナリ、イズパニヤから独立
- 1819 ドイツ關稅同盟成立
- 1820 ポルトガルの革命及内乱(1834)の炭焼党ナポリに起る。

1821年希臘の獨立戦争起る。(1829.終る)

希臘は數百年間、人種宗教を異にするトルコ領として  
その抑圧に苦んだが、國民は光輝ある往時を追想して不  
満に堪えず、且自由主義の激進民衆じ、遂に此年、イブ  
三三五

シランチ、衆に推されて独立を企てた。

△弓引いて 国のギリシヤは 腕が鳴る…1821

争められては 行く所の希臘 こだ思て 腕が鳴る…1821

やがて英詩人バイロン其他各国の志士が来援したが、  
埃及太守メヘメット・アリ、トルコ等の請に應じ、養子イブ  
ラヒムをして攻めしめたので独立軍大敗した。

然るに英国のカニングは露帝ニコラス一世及佛国を誘  
い、共に希臘を援け1827年ナバリノ湾にトルコ艦隊を  
滅し、ロシヤは別に陸からトルコに侵入し、コンスタンタ  
ノーブルに迫ったのでトルコ屈し、

1829年、アドリアノーブルに講和し、トルコは希臘の独立  
を認め、露国はダニエウフ河口の地を得た。

△やっこさ 国の希臘の 埒があき…1829

アドリアノーブルに 約束かため 国のギリシヤの 埒があく…1829

(附記) ギリシヤ独立完成

1832年希臘はババリアの王子オトウ(Otto)を迎えて王政  
を立て、その独立を完成した。

(年記)

1821 ② 希臘シヤ、メキシコ独立 ③ ナポレオン死す

1822 ④ ブラジル、ポルトガルから独立

## 1823年 モンロウ主義の宣言

(アメリカ諸国の独立)

イスパニヤ・ポルトガルの植民政策は、殖民地の富を  
本国に得ることのみ考えてその地の発達を思わずアメリ  
カに於る両国の植民地は深く之を恨んだ。

偶々ナポレオンの時代、本国の干渉及ばず、事実上一  
時独立の姿とふつたが、平和後又本国の干渉が加わつた  
ので植民地は之に反抗して戦つた。

その中イスパニヤの植民地は、1811年以來ウルガイ・  
アルゼンチン・コロンビヤ・智利・ペルウ・ボリビヤ・  
メキシコ・中部アメリカ合衆国等相ついで独立し、又18  
22年ポルトガルの植民地ブラジルも独立して帝国を建  
てた。

よつてメッテルニヒは神聖同盟を率いて是等の新独立  
国に武力の干渉を加えようとしたがイギリスの外務大臣  
カニング(Canning)は、自国の利害から之に反対しそれ  
等の独立を公認し、且つブラジルの独立を援けた。

又アメリカ合衆国は此頃勢漸く揚り、これ等の独立運動に  
同情し支援し、時の大統領ジェームス・モンロウ(J. Monroe)  
は、此年12月2日遂に教書を発表し、此後アメリカ諸国に

対し、歐洲列国の干渉を許さぬと宣言した。

これ所謂モンロー主義 (Monroe Doctrine) で、さすがに  
固執メッテルニヒも漸にその素志を變じ、やむなくその国  
々の独立を認め、神聖同盟の力衰えた。

▲ 避けるよと かくモンロー 沙汰をする……1823

内に口出しや やめるとばかり 固くモンロー 沙汰をする……1823

(年記)

1823 メキシコ 共和国となる

1824 詩人バイロン死す (1788生) の 英國 シンガポールを買収

1825 オルトガル、ブラジルの独立を認め

最初の鉄道成る (英のストックトン、ダリントン間)

1826 トルコ軍、ギリシヤを破る。ロンドン大学創設

1827 ① ロンドン条約。カニンガム死す

1827年 楽人ベートベン死す

▲ 世に名ある 君ベートベン 皆惜み……1827

音に聞えて 世に名も高い 君がらべを 皆惜む……1827

1828 ④ 露土開戦 (-1829) のウエルガイ独立

1829年 キリシヤの独立成る (8月、アドリアノーブレ講和)

(注意) 1821年、ギリシヤの独立戦争起るの項を見よ

全年 英國の回教徒解放法通過

1830 ベルギー独立起る。ホーランド反乱 (-1831)

## 1830年 七月革命

フランス王ルイ十八世は初は温和主義をとったが、後  
専制に傾き、メッテルニヒと協力して自由主義を抑えた  
ので大に民望を失った。

やがてチャールス十世立ち、貴族・僧侶を優遇し・専  
制を行い益々人心を失ったが、宰相ポリニヤックを重用し  
てから更に頑迷に陥り、遂に議會を解散して總選挙を行  
った。その結果自由党の議員が多数を占めたので、此年  
七月緊急勅令を以て未だ召集しないう議會を解散し且つ選  
挙法を改め、出版の自由を束縛した。

依てチェール等之に反対し、ついで巴里に暴動起り王宮  
を囲んだ。為に王は英國に奔りその支族ルイー・フィリップ  
(Louis philip) が推されて王位に即き、佛蘭西国民の王  
(King of the French people) だと宣言し列国の承認を得た。  
之を七月革命と云う。

此の革命は、ウイーン會議で定められた正朝を仆す例を  
開いたもので、その影響頗る大きかった。

▲ 弓ひいて 七月の日に 喚き立て……1830

王宮囲んで 弓ひく巴里 七月の日に 喚く人……1830

(注意) 七月は必ず シネガツ と唱えねばならぬ。

(附言)

### 七月革命の影響

- (1) ベルギーがオランダから分離独立
- (2) ホーランド叛乱、露軍之を鎮む
- (3) 伊太利分裂 (自由統一運動失敗)
- (4) 北独諸国立憲政治成立 (自由主義運動成功)
- (5) 瑞西の改革一憲法を布く
- (6) 英國の選挙区改正



## 1831年 ベルギーの独立成る

ベルギーはウィーン会議の決議により和蘭と合併して、ネーデルラント王国を成し、オランダ国王ウィリアム3世を治めたが、その民族・言語・宗教及び経済事情等を異にし国王から冷遇せられたので常に不満であったが七月革命の報をき、遂に反旗をブリュッセルに翻しオランダ軍を撃退して独立を宣言した。

その翌年即ち此年一月列国は会議をロンドンに開いてその独立を認めコーブルグ家のレオポルドを迎えて国王とし且つ永世局外中立国たることを定めた。

▲ 余程癩 袖にいられた オランダ国……1831

抑えつけられ 弓ひくベルギー 袖にされたは オランダ国……1831

(年記)

1831 ① ロンドン会議=ベルギー独立承認 ○ヘーゲル死す

## 1831年 トルコ・埃及戦争起る (-1840) (東方問題)

トルコは第十六世紀の全盛時代を過ぎて追々勢力を失ったが十九世紀の初までバルカン半島の大部を領し歐洲唯一の回教国であった。時にロシアは南下の野心があり又英佛両国は地中海方面に勢を争って露に対抗し、諸種

の事情が相交錯して東方問題を惹き起すに至った。

埃及の太守メヘメット=アリは希臘独立戦争に出兵して功を立てトルコからキプロス・クリット両島を奪えられたが更にシリヤを要求してトルコに拒まれ、アリ怒って遂に此年兵をあげ大にトルコ軍を破った。

露帝ニコラス一世は此様に乗じ野心を遂げようと思ひトルコ救援を名として出兵、英佛之に干渉しトルコをしてシリヤ及アダナを埃及に割いて講和した。

▲ 弓とりて シリヤに向ふ アリの軍……1831

アリが怒って 行き伐つトルコ それに加わる 英佛露……1831

(附記)

### 1. ウンキヤル=スケレッシ密約 (1833年)

此の講和と喜ばふは土帝に対し、露国はダーダネルス海峡を唯ロシア軍艦にのみ通過を許し外国軍艦には鎖す密約を結んだので、英・佛共同して反抗したが要領を得なかった。

### 2. 英佛両国の東方政策衝突 (土埃再戦)

佛首相チェールは埃及を援けトルコを抑えた。之に対し英外相パーマーストンは埃及を抑えトルコを保ち、露の南下を防ぐを意とし、当時埃及が外国商品に課税を課し為に英国の貿易打撃を受けたから、埃及の勢を抑え東洋交通の安全を図る為アラビヤの南端アデンをも領しトルコに援かめて再び開戦せしめた。

### 3. 土埃再戦及終末

トルコ大敗し国危くおつたので、露、英、埃、普の四国之に同情し、1440年ロンドン会議を開き、トルコを援けエジプトに進った。埃及では佛首相チェールの助けにより四強国と戦う決心をしたが、国王ルイ=フィリップ 平和説をとりチェール辞職したので、埃及軍奮戦大敗、アリ屈服して埃及の世襲権のみを得、シリヤを棄て近東問題一段落を告げた。

## 1832年 英国の選挙区改正案通る

英国は政党政治の淵源尤も遠く、さきにチャールズ二世の時、トーリー党及びホイッグ党対立し、此両党中輿望を買い議會に大多數を占めるもの交々立って責任内閣を組織し憲法の運用宜しきを得たが、時代の変化と共に弊害起り革新の必要あるに至った。その理由は

十八世紀の後半にワットが蒸気機関を發明し、又アー  
クライト・カートライト等は紡績機を發明し大工業興り、加  
うるにナポレオン戦役の爲、英国は世界の市場を独占し  
て貿易發展し、十九世紀に入って商工業の都市栄え農村  
衰えた。

又大都市発達の結果人口の配布一変したが、選挙区は  
旧の儘で新都市は代議士を出さず、荒廢の村所謂腐敗選  
挙区 (Rotten Borough) から議員を出す有様だったので市  
民は大に不平であった。

会々七月革命に刺戟されて英市民は1830年選挙区改  
正案を立て政府に迫った。やがてウエリントン公のトウリ  
内閣之に反対して仆れ、グレイ伯のホイッグ内閣起り、  
此年六月遂に改正案が議會を通った。依て廿七の都市は  
新に選挙権を得、六十八の腐敗選挙区は廢せられ、商工

業者の権利大に伸びた。

▲ 世直しに 選挙区グレイが 片づける… 1832

イギリス背負うて 世に立つグレイ 選挙区のこと 片づける… 1832

(附記)

### 其他の改革

#### 1. 旧教徒放釈

愛蘭は初め独立の議會があつたが1801年英国に合併せ  
られ大ブリテン及愛蘭聯合王国 と成り英国議會に議員を  
出す事と成つた。然るにアイルランドの大部分は旧教徒で、  
議員、官吏にあり得ず不平であつたがオコンネルの尽力で  
ウエリントン内閣の時1829年旧教徒放釈法案を通過し、  
新教徒と同一の権利を得た。

#### 2. 奴隷廢止

ウイルバークフォース・バクストン等多年の尽力奏功して1833年グ  
レイ内閣の時、奴隷廢止法案が議會を通過し、国内の奴隷は  
すべて自由民と成つた。

(年記)

1832 ホーランド自治権を失う

1832年 詩人ゲーテ死す(1749生)

▲ 世に名ある 詩聖のゲーテ 雲と去り… 1832

命死ぬとも 世の名は朽ちず 詩聖ゲーテは 雲に去る… 1832

1833 ① ウンキヤル・スケレンシ条約(日、土間)の英国の奴隷廢止  
独人ガウス及ウーベルの電信發明(1837年米くモルス完成)

1837 英国、ビクトリア女王即位

1838年 写真術の發明完成(佛人タダール)

▲ 漸くに 写真の術が 世に知られ… 1838

うとし絵完成 世に役立て、その名その技 世に傳ふ… 1838

全年 汽船始て大西洋渡航

1840 ① 東方問題に關する列國のロンドン条約成る  
○阿、戦争起る(一842)… 東洋史を見よ

1842 英国香港をとる

1844年 パリに万国博覧会を開く

▲ 世の縮図 立つたパリの 展覧場……1844

うんと並べて 世の中見せる 立つたパリの 展覧場……1844

## 1846年 英国の穀物条例廃止

英国の穀物条例 (Corn law) は 1815年大地主等が、外国から輸入する穀物類に重税を課して国内穀物の下落を防ぎ、利益を独占しようとして定めたものである。併し此為に貧民苦み、選挙区改正と共に当時の大問題であった。

ビクトリヤ女王の時、コブデン・ブライト等熱心に之が廃止を唱え、遂に此年、ピール内閣は穀物条例廃止案を通過し、輸入税を全廃して、国民の困窮を救った。

▲ 慾張りを叩きコブデン 踏みつける……1846

英の地主の 慾ばり共を 叩きコブデン 踏みつける……1846

## 1848年 二月革命

フランス王ルイ=フィリップは初め政治に勵んだが、後私利を営み、官吏・議員腐敗し、内政振わず外交亦東方向題等に失敗し民心を失ったので、共和党・社会党之を覆そうと図り政府は勉めて圧迫を加えた。

偶々チエール等選挙法改正を唱えて改正宴会 (Reform-Banquet) を巴里に開こうとした処、政府が之を禁止した

ので、官民の大衝突となり、全市は三日に亘り大に乱れ、王その鎮まり難いのも見て遂に一族と共に英国に遁れた。

依て共和党は假政府を作り、此年二月共和政を宣言した之を二月革命と云う。

ついで新憲法を定め、十二月ナポレオン一世の姪ルイナポレオンを任期四年の大統領に送った。

▲ やっつけろと チエールの仲間が 弓をひき……1848

怒り狂うて 弓ひく二月 チエールの仲間が 世直しに……1848

(附記)

### 二月革命の影響

- (1) オーストリア亂る
- (2) プロシヤの革命運動
- (3) 伊太利統一運動

(年記)

1848 米、墨 講和。フランクフルト国会、ルイナポレオン大統領とある

1849 サルジニヤ王 ビクトル=エマヌエル II 亦ち カブルを崩す  
リビングストン、ヌガミ 油見

1850 英佛間 海底電線布設

1851 ⑩ ルイナポレオン 非常処分を行う

## 1852年 ナポレオン三世の即位

(フランスの第三帝政)

フランス大統領ルイ=ナポレオンは国民が大ナポレオンを崇拜するを見、伯父に倣って皇帝とあるの野心を持ち人心を救むるに力めた。

彼は1851年12月、議会の不評ぶりに兼じクーデター (coup d'état)

d'etat) を断行して議會を解散し、翌年即此年新憲法を布いて大統領の任期を十年とし、更に国民の投票によって十二月二日帝位に登りナポレオン三世と称した。之をフランスの第二帝政と云う。

この後ナポレオンは、専制政治を行い、教育実業を奨め、巴里の都を飾り、世界博覧会を開き、伯父に倣って外戦を行い、国威を發揚せんとした。

▲ 野心家の ナポ<sup>レ</sup>三世が 位を得……1852

伯父の真似して 野心をもった 奈翁三世が 位を得……1852

(年記)

1852 ウェリントン死す(明治大帝お生れ=日本史を見よ)

1853 ⑥ 米使ヘリイ日本に来る

## 1854年 クリミア戦役起る (⑦-1856)

ローマ旧教徒と希臘正教徒とは久しくパレスチナの聖蹟管理権について争ったが、ナポレオン三世は民心を収める一策として、トルコに迫って聖蹟管理権を佛國(旧教徒)の手に収めた。そこで、それまで久しく南下の機を狙い、トルコは瀕死の病人せつと云って、その分割までも提議した事のある、露帝ニコラス一世は大に怒り、トルコに抗議し、それが容れられぬので1853年遂に戦を宣し陸海軍を以て南進せしめ、こゝに露土の南戦を見、次で

進む此年3月、英・佛同盟して露に宣戦し、こゝにクリミア戦争が起るに至った。

▲ 野心家がニコラス帝とつかみ合い……1854

英佛トルコの約束成つてニコラス露帝とつかみ合う……1854

(附記)

### 1. クリミア戦況

ロシア軍、ドナウ河畔に進み、又その海軍はトルコ艦隊をシノペに撃破りトルコの危くあつたのを見て、ナポレオン三世は急に英國と同盟してトルコを援け、その三国の聯合軍はクリミア半島に上陸し、海軍と應じて此年九月要塞セバストポールを包圍した。

こゝに露西軍のゴルチヤコフ・メンシコフ・トートレーベン等死すし、聯合軍は寒さと疫病の為に頗る苦戦したが、サルジニヤ兵の来援により力を得、包圍一年1855年9月城を陥れた。

### 2. 赤十字社の起原

此役、聯合軍中にコレラ流行し、その惨状目もあてられぬ程だったので、イギリスのフロレンス・ナイチンゲール嬢は他の看護婦数人と共に遠く戦地に來て親しく病傷者を看護した。これ後の赤十字社の起原である。

(年記)

1854 ⑦ 英佛聯合軍セバストポール包圍

1855 ⑧ サルジニヤ英仏聯合軍に参加す ⑨ セバストポール陥る

## 1856年 パリ条約成る (3月30日クリミア戦役終る)

1855年3月露帝ニコラス一世歿し、其子アレキサンドル二世立ったが、セバストポール陥落後、奧太利の斡旋を容れ、關係諸國と、此年三月巴里に會合して講和条約を結んだ。

A 野心家に 泣く泣く露帝 踏まれて居……1856

運をクリミア 破れてパリに 泣いて露帝が 踏まれ損……1856

(附記)

1. クリミア戦講和要項

- (ア) 黒海を中立とすること
- (イ) 露・土両国はその沿岸に造兵廠を設けおこと。
- (ウ) 露国はドナウ河口の地をトルコに還し、自由航行を許すこと。
- (エ) 露国はトルコ内のギリシヤ教徒保護権をすてること。
- (オ) トルコは、ローマ・ギリシヤ両教徒に同等の権利を與えること。

2. ナポレオンⅢの威望が此役後大に昂り、彼は英国と親み、巴里を公府、実業を厲かまし・教育を興し等した。

(年記)

1857年 哲人コント死す

▲ 逆くコント 人間学を 先ず述べし……1857

あの世調べに 行くかやコント 人間の果 見極めに……1857

1858 英国政府 印度を直轄す。露国 黒龍江北を占る

1859 ④ サルジニヤ・オーストリアと戦う。伊太利独立 役起る。メッテルニヒ死す。ダーウイン種の 起原を著す

1860 ⑤ カリフォルニア、シシイ上陸 ⑥ リンカーン米大統領とある

1861 ③ 伊太利王国の建設 (ビクトル=エマヌエルⅡ即位)

1861年 アメリカ南北戦争起る

合衆国の発展 北米合衆国は、独立以来 国運大に進み、

初めは、東海岸十三州であつたのが、1783年ベルサイユ条約で、独立が承認された時、ミシシッピ一以東の英領を併せ、1803年フランスから ルイジアナ を買収し、1819年

イスパニヤからフロリダを買ひ、1843年 テキサス州を併せ、之に抗議したメキシコと戦つて 1848年 ニュウメキシコ及びカリフォルニア、テキサスを奪ひ、斯て十九世紀の中頃には、その領地遂に太平洋岸に達した。

戦の遠因 = 然るにアメリカ合衆国の北部と南部とは全くその事情を異にした。今両者を比べ見るに

	(北部)	(南部)
(1) 州数	18	15
(2) 産業	商工業	農業
(3) 奴隷	禁止	使用
(4) 貿易	保護貿易	自由貿易
(5) 政党	共和党	民主党
(6) 政策	中央集権	各州分権
(7) 人口	約2400万	約1200万
(8) 文化	進む	遅ます

即ち北部は文化進み、人道上奴隷使役に反対する者が多かつたに反し、南部は気候温暖で棉を多く作り奴隷を必要としたので 1819年 ミズリイ協約により北緯36°30'を以て、奴隷存廢の境としたが、其後拓殖地の発展によりこの問題再燃し、之に商税問題と、民主・共和両党の争とが加わり遂に戦火を見るに至つた。

戦の近因 = 1860年、共和党の熱心な奴隷廢止論者、アブラハム=リンカーンが大統領に当選したので、南部十一州は引續いて分離を宣言し、全年別にアメリカ聯邦を組

成し、ジェファーソン=デビスを大統領としてリッチモンドに都  
し、翌1861年遂に戦を開き、南部の人民がチャールストン  
港の要塞を陥れるに及んで、米国内部の大戦争と成った。

▲ 世は正義 人は力ぞ アブラハム……1861

雨の南北 弓ひき合った 人はデビスに アブラハム……1861

(年記)

1861. カブール死す。皇帝兼奴解放を命ず

1862年 フォン=ビスマルク、プロシヤ首相と成る

▲ 世の明け 光リプロシヤの 國つかさ……1862

明けにかいた 世をビスマルク 光リプロシヤの 國を見る……1862

1863 ① リンカーン奴隷解放令を布く

1864年 万国赤十字社起る(8月)

▲ 世をこめて 旗の十字に 手をつぶさ……1864

赤い十字に 世を染ぬいた 旗に万国 手をつぶさ……1864

全年 メキシコ帝国と成る

1865年 リンカーン殺さる(4月)

▲ 世の憂さの 晴れてリンカーン ぬらわれる……1865

いとリンカーン 世の瓦うけく 光りおとした 野辺の露……1865

1865年 南北戦争終る(5月10日)

アメリカ南北戦争に於て初めは南軍の勢優つたが、のち  
北軍が強力と成つた。その理由は

(1). 北軍の總督グラントの指揮宜しきを得たこと。

(2) 北軍艦隊は、南部の要港をとじて農産物の輸出を

防ぎ軍資を得る途を断つた。

(3) リンカーンの奴隷解放宣言により南部の奴隷のがれて  
北軍に投じた。

以上の如き事情で形勢一変し、此年四月グラントは南軍  
の將リイを降し、その都リッチモンドを陥れたので、南部  
諸州遂に屈し、アメリカ聯邦を解いて再び合衆國に復歸  
し、こゝに南北戦争終を告げた。

此役死傷多く国債二十七億に及んだが、戦後至當宜し  
く奴隷を解放し、保護貿易主義を採つて商工業發展し、  
遂に南北全く融和して國運愈々榮えた。

▲ 世はもとの ひとつ編笠 伸直り……1865

雨が降つたで 世が固まって 晴れて南北 伸直り……1865

(附記)

メキシコの乱(1861-67)

メキシコでは財政窮乏の結果大統領アレスが外債利子支  
拂中止を宣言したので、債権國たる英・佛・西の三国はその  
無法を憤つて兵を送りメキシコ屈した。

然るに佛帝ナポレオン三世は南北戦に乗じメキシコを  
保護國とする積りで、1864年 埃帝の弟 マクシミリアン公を  
メキシコ皇帝に擁立した。

南北戦が終ると合衆國はモンロウ主義をとつて撤兵を迫  
つたので仏國屈し マクシミリアンは殺され、ナポレオンの声望衰  
えた。

1866年 プロシヤ、オーストリア戦争起る

ウィーン會議の後、埃太利はドイツ聯邦の盟主であつ

たが、1834年プロシヤその手を離れて北ドイツ諸国と共に関税同盟 (Customs Union) を作り、この後南ドイツ諸国も加わり大に全済上の便益を増した。

尚二月革命の後フランクフルトにドイツ国民議會を開き、プロシヤ王フレデリック=ウイリヤム四世に皇帝たる事を求めたが王之を辞した。

ついで1861年、英邁あるウイリヤム一世立ち、墺太利を排してドイツ統一の業を成さんとし先ず人材を登用し、翌年ビスマルクを首相に、モルトケを参謀總長に擢用し、衆議を排して軍備を張り、密にその機を窺つて居た。

#### (註) ビスマルクの鉄血演説

1862年プロシヤの軍備拡張につき、議会在が反対した時ビスマルク慷慨叫んで曰く

「刻下の大問題は多数決又は空論によって決すべきものに非ず唯それ鉄と血あるのみ」と。  
此後彼は鉄血宰相と呼ばれた。

丁抹戦争 = 時にドイツ聯邦中のシレスウイヒ、ホルスタイン西公国は丁抹王の兼領であつたが1663年丁抹がシレスウイヒを合併しようとしたので西國人喜ばずドイツ聯邦に援を求めた。よつてプロシヤ・オーストリア協力して丁抹を攻め、西公国及びラウエンブルグを普・墺两国で管理する事にあつた。

然るに此の処分につき両国争ひ、遂にプロシヤは兵を出してホルスタインを占領し、こゝに普・墺の戦を見るに至つた。

▲ やつつけろと 齒に齒を向ける 普・墺軍---1866

威張る相々に 横槍入れて 齒と齒向きあう 普・墺軍---1866

(附記)

#### 1. 普墺戦況

ビスマルクはナポレオン三世と約して之を中立せしめ、伊太利と同盟した。しかしドイツ聯邦は多くプロシヤを惡み、墺國に味方した。

依てプロシヤ軍はハノーバー・サクソニア等とつて墺國に侵入しその主力を七月ケーニヒグレーツの近くに破リ、フラーグを陥れウイーンに迫つた。

伊太利方面では墺軍カ儀リ、クストツツアの陸戦、リツサの海戦に勝ちを得たが、本國が危いので八月フラーグに和を結んだ。

#### 2. フラーグ条約 (1866八月 普墺戦争終る)

(ア) 墺太利はドイツ聯邦から離れること

(イ) 墺太利はプロシヤに、シレスウイヒ・ホルスタインの二公国を譲り、又償金二千万クローレル (約3000万円) を拂う。

(ウ) 墺太利は伊太利にベニスを割讓すること。

#### 3. 結果 (北ドイツ聯邦と、墺匈連合國)

プロシヤは戦い初めてから休戦まで僅か七週間で大効果を得、猶ハノーバー以下の小邦を併せて翌年北ドイツ聯邦を作りその盟主となり、南独諸國と同盟した。

墺太利はホンガリヤ王國の建設を許し、墺太利、ホンガリヤ連合國を作り同じ皇帝を戴した。

(年記)

1866 ② フラーグの講和 (普墺戦争終る)

1867 米國アラスカを露國より買ふ ○ノベルのダイナマイト發明

1868 ④ イスパニヤの革命 (女王イサベラ出奔) ⑤ グラッドストン英首相となる

1869 グランビル米大統領となる ○米國太平洋鉄道開通

## 1869年スエズ<sup>ス</sup>運河の開通(アフリカの事情)

アフリカの内地は久しく暗黒に鎖されて居たが、十九世紀の中頃から、リビンググストン・スタンリイ等の探検があり、追々事情が明かになつたので各国之に注目し中にも英・独・佛の三国は尤も經營に力めた。

埃及はメヘメット-アリの孫イスマイルの時独立の姿となり、佛人レセップス(Leseppe)と共同して、スエズ運河会社を起し1859年に起工して此年開通した。

此の運河はスエズ地峽を横断して、地中海と紅海とをつなぐ大運河で、設計はレセップスの手に成り、十年の歳月と約二億円の費用を以て竣工し、運河の長さ八十七哩、北端にポートセツト港、南端にスエズ港がある。

この開通によってヨーロッパと東洋との航路大に短まり、世界の交通に偉大なる貢献をなした。

▲ 往來する 船に楽しむ レセップス……1869

運河スエズに 行く船見ては ひとり楽しむ レセップス……1869

(附記)

### 英国のアフリカ全管

英国は大にアフリカ全管につとめたが、スエズ運河を通る貨物の大部分は、英国のものであったから、英人は常に運河に利権の多いのを憾みとして居た。

(1) 英国のエジプト全管

時に埃及は運河の開鑿で莫大なる借債を生じ、又トルコに南金<sup>金</sup>の奉納<sup>奉納</sup>があつて、財政困難に陥り1875年遂にスエズ運河の株券十七万株をイギリスに売却した。

それからイギリスはフランスと共にエジプトの財政を管理し内政に干渉するようになった。

エジプトの志士アラビ<sup>アラビ</sup>はハシヤ大に怒り、1882年国民党を起し兵をあげたから、イギリスは独力之を鎮め、財政管理権を独占し、軍隊を駐め置いたのでエジプトの名義はトルコの属国でも実は英国の保護領となつた。

(1914年世界大戦起り全く保護国としたが1920年埃及の希望により独立国の名を與えた。

(2) 1814年イギリスはオランダから南アフリカのケープ<sup>ケープ</sup>植民地を得た。

(3) 1899年南阿戦後ケープ<sup>ケープ</sup>植民地全管(全年項を見よ)

(4) アフリカ縦貫鉄道の全管

## 1870年ドイツ、フランス戦役起る

ナポレオン三世はプロシヤの興隆を喜ばず、且つ外交意の如くあらざるを、外戦に勝つて民望をつまぎヌライン左岸の地を併せようとの野心を抱いた。

ドイツに於てもその統一を完成するには、フランスと一戦するの必要を見、ビスマルクは陰に陽に佛國民を刺戟し戦に導こうとした。

偶々1868年(明治元年)イスパニヤに内乱起り、国人はイサベラ女王を廢し、プロシヤ王ウー族レオポルド親王を迎えようとしたがナポレオン三世の抗議により親王之を辭した。



然るにナポレオンはそれに満足せず、プロシヤ王の一族は、今後イスパニヤ王とあらずと誓う事を要求したので、プロシヤは断然之を拒んだ。

ナポレオン三世これを機として此年七月プロシヤに宣戦し、独佛戦役が両かれること、かつた。

▲ 野心家の 身から出る 錆 笑われる……1870

戦いかけた 野心を人に 身から錆だと 笑われる……1870

(附記)

1. 普・佛戦況

プロシヤはウイリヤム一世元帥とあり、モルトケを参謀総長として南独諸国の軍を併せ、総軍八十五万分つて三軍とし急行ライン河を渡り、巴里を衝こうとした。

フランスは墺伊と同盟し、南独諸国を併せプロシヤに攻入ろうとしたが計画失敗し墺伊中正し、南独はプロシヤに降した。

かくて佛軍メッツ、ストラスブルグ等に敗れ、ついでナポレオン三世は元帥マクマオンと共にセダンに囲まれ大敗し、遂に十万の兵と共に九月一日ドイツ軍に降伏した。

(1) ガンベッタの巴里救援軍 (巴里陥る)

セダンの敗報をき、巴里の驚一方でなく、直に帝政を廢して共和政とし防ぎ戦い、ドイツ軍は巴里に進み之を囲んだので、ガンベッタは軽気球に乗って出、巴里救援軍を募り戦い又敗れ、巴里の籠城四ヶ月、翌1871年食尽きて開城した。

2. ベルサイユの講和 (1871年2月)

佛のシェールは、ビスマルクと此地に会見して假条約を結ぶ、

(ア) フランスはドイツにエルザス・ロートリンゲンを譲る

(イ) 償金五十億フラン (約20億円) を支拂う

次で五月フランクフルトの本条約で之を定めた。

3. 結果

普佛戦役の結果としては、ドイツ及びイタリアの統一完成し、ロシアは黒海の中立に関する巴黎条約を以て又々南下政策をとつた。

(年記)

1870 ① セダンの陥落、佛国共和政成る、巴里包圍  
② 北ドイツ聯邦議會、ドイツ帝國再興令

1871年 ドイツの統一完成

イタリアの統一完成 (一説前年)

ドイツ帝國 = 普・佛戦役の間に、ドイツ帝國統一の機全く

熟し巴里陥落に先ち、此年1月18日全ドイツの君主、包圍軍の本営ベルサイユ宮殿に集つて聯邦帝國を組織し、プロシヤ王ウイリヤム一世が帝位に即いた。

次で三月、ベルリンに聯邦會議を開き、独逸憲法を定めプロシヤ王ドイツ帝位を世襲し、その下に各聯邦を代表する聯邦會議と、國民を代表する帝國議會とを置き、立法権を分ち掌らせ、茲に全くドイツ統一の事業を完成した。

イタリア王國 = 伊太利は、中古以来小邦分立して統一する所なく、ウィーン會議の結果、墺太利は北伊太利を領し各小邦に号令した。併し伊太利の志士は、夙に自由統一の運動に怠らず、中にもマツチニの青年伊太利党は殊に盛に活動した。二月革命後サルジニヤ王の統一の企

は破れたが、その後ビクトル・エマヌエル二世、父の志をつぎ統一の業を為さんとシカブールを用いて内治外交に力を尽し、クリミア戦に加わって国位を高め、次でナポレオン三世と密約し1859年埃太利を激さしめて戦を開かせフランス軍の来援によりサルジニヤ軍は埃軍を、マジェンタ・ソルフェリノに破リロンバルジヤ其他を従えた。

この後ナポレオン三世の遺約によりサルジニヤは侵地を埃国に返しロンバルジヤのみを得たので国民彼を怨んだ。

その後小邦のサルジニヤに併合を乞う者多く、又志士ガリバルジ義勇兵を率いてシシリイ及びナポリを征服して之をサルジニヤ王に献じたので、王はベニス及び法王領以外の伊太利全土を統一シトリノに合議を開き1861年エマヌエル二世立って伊太利王となり、のち都を「統一国家」の著者ダンテの故郷フロレンスに奠めた。

プロシヤ・ホーストリア戦役に当り伊太利はプロシヤを助け1866年ベニスを奪又独佛戦役に佛国の守備兵がローマから退いたのに乘じてローマを取り、此年都をこゝに移し伊太利統一を完成した。

▲ 世の中が 先ずおさまつた 伊や独の……1871

命祝のん 世の統一の 見ゆるドイツと 伊太利を……1871

(年記)

1871 ①ドイツ帝国の建設、パリイ陥る ②ベルサイエ假条約  
③フランクフルト本条約(独仏戦争終る) ○チェール仏大統領とある。

1873 イスパニヤ共和国とある ④ナポレオン三世殺す

1874年 万国郵便同盟成る(10月)

▲ 郵便で 亦万国が 手をつなぎ……1874

・エッサエッサと 郵便もって めぐる万国 手をつなぎ……1874

1874 グラッドストン辞職、ジスレリイ代る。史家ギゾウ死す

1875年 グラハム・ベルの電話發明

▲ 呼ばうベル 物云う唇 成れりとして……1875

言つた言葉が 世に馳せけ出して もうしもうしが 野を渡る……1875

## 第五史期

### 1877年 ロシヤ、トルコ戦役起る

ロシヤ皇帝アレキサンドル二世は即位以来政治に勵み自由改進黨をとり、農奴を開放したがポーランド反乱の後態度を一変し、ゴルヂヤコフを用いて保守專制主義、侵略主義をとった。

即ち先ず独佛戦役に當つて黒海の中立を解き、汎スラヴ主義を以てトルコを侵した。

時にトルコではアブッル=アミイド帝、政を乱り財力乏しく、マホメット教に執着してキリスト教徒を迫害したから1875年ボスニヤ・ヘルツェゴビナ・セルビヤ・モンテネグロ等反乱し、翌年ブルガリヤも亦叛いたので、トルコは直に之を討ち、キリスト教徒約三万人を虐殺した。

やがて露・英・独・奥の諸国提携してトルコに内政改革を迫った。

しかしその効がおいのて遂に此年露國はキリスト教國民の保護を名としてトルコに宣戦し、こゝに露土戦争が起った。

▲ やっつけろと 眼に角立て、見はる露土……1877

▲ 腕が又鳴り 世は騒がしい 眼角立て立て 見張る露土……1877

## (附記)

### 1. ロシヤ、トルコ戦況

ロシヤの本軍はドナウ河を渡つて南下し、トルコの勇將、オスマン=パシヤの堅守するフレブナの壘を、攻囲五ヶ月後に陥れ、ついでアドリヤノーフォルを占領し更に首都に迫った。ロの利軍は又黒海東南から南下して連勝したのでトルコ恐れ英國に援を求めた。

依てロシヤも不利を思ひ1878年3月トルコを威圧し、サン=ステハノに講和した。

### 2. サン=ステハノ条約(ロ土戦争終る)

(ア) トルコはモンテネグロ・セルビヤ・ルーマニヤの独立を許すこと。

(イ) ブルガリヤの領土を広め、キリスト教の君公を幸ずる半獨立國とすること。

(ウ) トルコはロシヤに地を割き、償金三億ルーブルを拂ふと。

## (年記)

1877年 ビクトリヤ、印度女帝と稱す  
(印度帝國の建設)

▲ 世の印度 見給う女王 身を祝がん……1877

(注意) 東洋史全項を見よ

1877 英兵トランスバール共和國を取る (1) フレブナ陥る

1877年 米人エジソンの蓄音機發明  
全 べル、電話を實用に供す

▲ やっ機械が 物を云うとは 珍らしい……1877

▲ 春ふれども よくまっこれが 物を云うとは 珍らしい……1877

1878 (3) サン=ステハノ条約(ロシヤ・トルコ戦争終る)

1878年 ベルリン列国会議(6月13日-7月13日)  
(ベルリン条約)

英・奥兩國は、サンステハノ条約に於る露國の要求を、

過大ありとして反対したので、ドイツのビスマルクは其中を斡旋し、此年六月伯林に列国会議を開き、英のジズレリイ、露のゴルヂヤコフ等大に折衝した末、サン・ステハノ条約をすて、七月新に伯林条約を結んだ。

▲ 慾と慾 また伯林に やり直し……1878

英・埃・露国が 寄り集つて まった伯林 やり直し……1878

(附記)

### 1. 伯林条約の要項

- (ア) トルコは、モンテネグロ・セルビア及ルーマニアの独立を認めること。
- (イ) サン・ステハノ条約で定められたブルガリアの領地を縮めて、これを半独立国(トルコへの朝貢国)とすること。
- (ウ) ロシヤは償金八億ルーブル及びカルス、バツーム(黒海東海岸)以下数地を得
- (エ) 英国はサイプロス島を得
- (オ) 埃国はボスニヤ、ヘルツェゴビナの行政権を得
- (カ) キリシヤはテッサリヤの一部を得
- (キ) トルコはその国民に信仰の自由を興えること。

### 2. 伯林条約の結果

- (ア) トルコの領地ちぢまる
- (イ) ロシヤは南下の志破れ、ゴルヂヤコフ為に憂鬱病とあつた。
- (ウ) 英国は外交成功して東方向題に優位を占めた
- (エ) ドイツはトルコに勢力を扶殖した。

(年記)

1879年 米人エジソンの電燈発明

▲ 闇の世を 真昼と照らす ランプ成り……1879

エレキランプに 世が照り榮えて 明華煌々 瑤璃光土……1879

1879 ドイツ・オーストリア密約成る

1880 ② ロシヤネ宮内の変 ④ トランスバールの放棄

1881 ③ アレキサンドル二世の暗殺 ⑤ 米大統領ガーフィールド暗殺  
○ 仏国のチュニス占領 ○ アラビパシヤ外人排斥 ○ 英国のエジプト保護 ○ ルーマニア王即位 ○ パナマ運河起工

1882 コンスタンチノーブルの会合(採及向題) ○ アラビパシヤ殺さる ○ ガリバルジ死す

1882年 ダーウィン死す

▲ 世の進化 世に説き君は 此世去り……1882

生きる為には 世は戦場と 呼びし君はも 此世去る……1882

## 1882年 独・埃・伊三国同盟成る

ドイツはフランスとの戦に勝つて後その復讐を恐れ、フランスを孤立させる為に1872年ドイツ帝ウイリヤム一世、埃帝フランシス=ジョゼフ、露帝アレキサンドル二世等の所謂三帝同盟が成立した。

然るにベルリン会議に於てロシヤはドイツが己を援けなかつた事や、バルカン半島での埃露の利害の衝突するのを見て、その国寧ろフランスに親しむ傾があつた為、ビスマルクは1879年独・埃同盟を結びロシヤに対抗した。

ついでビスマルクはチュニス併合、事からフランスを怨んで居る伊太利をも誘つて此年5月20日、独・埃・伊の所謂三国同盟を結んだ。

併し其後、埃伊兩國の利害相反する事が多く、三国同

盟に対する伊太利の態度は常に危ぶまれて居た。

▲ 世固めの 約束したり 国三つ……1882

奥伊誘うて 世を固めよと 約束ドイツの 苦肉策……1832

(注意) 三国同盟の年代を翌1833年と見る人もあり

(附記)

1. 三国同盟のその後

1887年三国同盟を更新して五年間有効とし  
1891年之を更に更新して十二年間の期限を定めた。

2. 各国の同盟、協商等

(ア) 露・佛同盟 (1891年)

三国が同盟して後、尚孤立して居た、フランスとロシアは遂に相寄り、1891年同盟を結んで それに対抗した。  
この二つの同盟はその後二十年間続き、歐洲列強間の権力の平均を保つ事ができた。

(イ) 佛・伊協商 (1900年)

(ウ) 日・英同盟 (1902年)

(エ) 英・仏協商 (1904年)

(オ) 三国協商 (1907年 = 英露向、日佛向、日露向)

(年記)

1884 ⑩ グリニツチ 子午線を万国基本子午線と定む

1885 ① ゴルドン 将軍戦死 ② グランド 将軍、文豪ユーゴウ死す  
③ コンゴ 自由国建設

1887年 国際語世に出る

(ザーメンホフの 에스ペラント発表)

文明の進歩により世界の交通開け、人類は互に接近し、密接な交渉をもつようになつた。

しかも此時、猶その道に横る障碍は言語の不通と云う

事である。斯して思想の交換は阻まれ、文化の普及は妨げられ、これが為、世衆の人々の蒙る不幸は真に大きなものがある。

此の不幸を打破して人類の便益を増し、その結合平和に役立てようとする希望に抱かれて生れたのは、此年、ポーランドの眼科医、ザーメンホフに依つて発表せられた (1859-1917) 国際語 에스ペラント である。

此語は、国際語として必要なる中立・平易・正確・温雅等の条件を十分に備え、文法の簡明・発音の流暢・表意自在などの特長は人々の賞讃を博し、今や世界各国に著しく普及されつゝある。

▲ よこたわる 闇路を照らせ みどり星……1887

愛の光で 世に横わる 闇路照らせ みどり星……1887

(註) 에스ペラントの徽章は、「五稜の緑星」である。五稜は五大洲を、緑は平和を、星は希望を表す。  
尚 에스ペラント (Esperanto) とは「希望者」の意で之を発表した時用いた 匿名が、此語の名となつたのである。

(附記)

1. 에스ペラント以前にも此種の試みはあり、殊に1880年 シュライヤー (J.M. Schleyer) によつて発表された ボラピエツク (Volapük) は一時盛に行われたが 에스ペラントが出ると共に影をひこめた。それはその語の成立の思想及び語に欠陥を有つて居た為である。

2. 에스ペラントは、各国語をあいわけ、此語で世界の言語を統一しようとするのであり、之はたゞ国際語として各人がその国語の外に知つて居て、一般的の事に使われれば「良いのである」各言語尊重の意味を少しも傷けるものでない。この事は 1905年

佛国のブーロンで開催された 第一回万国エスペラント大会で、  
ブーロン宣言として発表せられて居る。

3. 日本では 1906年(明治39) 始めて 日本エスペラント協会が創立され、  
新語の普及運動が起り、東京で 第一回日本エスペラント大会を開いた。  
尔後同志により 不断の発展を続けて居る。

(年記)

- 1808 独帝ウイリアム二世即位、ドイツのビスマルク諸島占領
- 1839 ブラジル共和国と成る
- 1891 三国同盟の再更新(12箇)。露佛同盟成る。モルトケ死す。  
シベリヤ鉄道起ス
- 1892 詩人テニソン死す
- 1893 ハワイ革命、共和国創立 ④南米革命
- 1894 露帝ニコラスII即位 ④日清戦役起る(1895)
- 1895 キール運河開通

1895年 レントゲンのX光線発明

▲ 世に出たり レントゲン氏の名によりて……1895  
エツキス光線 世にもたらして レントゲン氏の名もあがる……1895

1897 ④ギリシヤ=トルコ戦争

1897年 マルコニの無線電信発明

▲ 世の中を 利すマルコニの 無線話機……1897  
いとゞ利便を 世にもたらした 莫妙無線機 マルコニ……1897

1898年 米・西戦役 (4月-12月)

アメリカ合衆国は、亦がくモンロウ主義を執って居た  
が追々帝国主義をとるようになり盛んに国外に活躍し初  
めた。

此頃イスパニヤ領キューバ島及びフィリッピン群島は本  
国の苛政を憤って独立を企て米国之に同情した。

偶々キューバ島で、米艦爆沈の事があつたので、米大統  
領マツキンリは四月イスパニヤと戦を開き、マニラ湾及  
びサンタゴに大にイスパニヤの海軍を破った。

イスパニヤ遂に屈し、十二月巴里に和を講じ、キューバ  
の独立を認め、合衆国は西印度のホルトリコ島を得、フ  
イリッピン群島及びガム島を買った。

▲ ヤンキイが 利を得スペイン 弱るなり……1898

アメとイスとが 槍つき合す 乘でかいぞえ 世の中は……1898

(附記)

1. 米国のハワイ併合 (1898)

ハワイに住む米人は、先年本国の援を得て、島の女王 リリオ  
カラニを廃し、本国の保護の下に立つ事を乞うたが、大統  
領クリブランドが之を拒み、ハワイはサンドウイッチ共和国と  
成つた。此年大統領マツキンリは之を米国に併合した。

2. 太平洋方面に於ける列強の企圖

(ア) 列強支那に利を漁る (1898年頃 東洋史参照)

(イ) 太平洋分割

英国	{	ジェームス・クックの南洋探検 後之に拓殖し、
		聯邦自治とす
独逸	{	ニューギランド、フィジイ諸島等占領
		ビスマルクの植民政策により南洋に着目 ニューギニヤの一部、ビスマルク諸島占領

此外、佛・蘭・米等各領有

(ウ) 米国の活動

{	領土獲得=	アラスカ買収(ロシアから)
	{	ハワイ併合
{		米西戦争=

パナマ運河、ワシントン會議

(エ) 日本 = 台湾占領、朝鮮併合、世界戦後赤道以北のドイツ領  
統治

## 1899年 南阿戦争起る (-1902)

アフリカの北岸ナイル河畔は世界最古の文明を持って居たが、他の方面は気候炎熱、良港湾に乏しく十九世紀の前半まで暗黒大陸の名の下に顧る者も少かつた。

然るに十九世紀の後半から世界政策の気運起り、英・佛・独等皆この大陸に注目し開拓・殖民を始めるに至つた。

初めその探検に従つたのは英國の宣教師リビングストンで彼は 1849 年から約二十年間之を探り、その後継者、英人スタンリーも、ナイル河の水源地方、中央内地を跋涉してその真相を明にし後年アフリカ分割の緒を起さしめた。

依て英國は先ず埃及を全管し次で南阿に手を染めた。

それより前、アフリカ南部のケープ植民地には和蘭人の子孫であるブール人(農民の義)が住んで居たが、ウイーン會議の結果英領と成つたので人民喜ばず次第に北に移つて、トランスバール國(のち、アフリカ共和国と云ふ)と、オレンジ自由國を立てた。

その後、トランスバールに金、オレンジに金剛石が多く出たので、英人多数同國に移り、遂にその國の參政權を要

めて容れられず、ために英國は兩國に戦を宣し所謂南阿戦争と成つた。

▲ 四年後の料理で南阿 埒があき……1899

アフリカ南部に やり合う二國 乱は四年後 埒があく……1899

(附記)

### 1. 南アフリカのその後 (南阿戦争等)

#### (ア) 南阿戦争況及結果

トランスバールの大統領クリューゲルは民兵を率ひ各所に勝つたが、衆寡敵せず 悪戦四年の後英國に滅され、全国及オレンジの二國は共に 1902年英國の植民地と成つた。

次で英國は 1910年上記の二國及びナタル、ケープ植民地を合併し 南アフリカ聯邦と成し、總督を置いて治めさせた。

#### (イ) セシル・ローズとロデシヤ

これより前、英人セシル・ローズは金剛石の採掘に従つて巨富を得、トランスバールの北にロデシヤを拓き 1902年に死んだ。

### 2. アフリカの分割

(ア) 英國は埃及保護、南阿全管、大陸縦貫鉄道策等を成す

(イ) フランスは 1830年、アルゼリヤを取り、1881年チュニスを保護國とし、サハラ沙漠及其の南一帯の地をとり、1895年マダガスカルを保護國とした。

(ウ) ドイツは 1884年以後アフリカ全管に従ひ、西南アフリカ、トゴランド、東アフリカをとり又 1906年列國會議をアルゼシラスに開きモロッコ國がフランスの勢力内に入るを防ぎ所謂 モロッコ問題を起して佛領コンゴの一部を得た。

(エ) ベルギーは中央アフリカに拓殖し 1885年コンゴ自由國を建て、1908年之を本國に併せた。

(オ) その他 伊太利は紅海沿岸エトリア、東海岸のソマリランドを得、

ポルトガルはアンゴラ地方及東アフリカを得、イスパニヤは  
リオデオロ等を領する。

(年記)

1899年 ハーグの万国平和会議 (5月)

▲ 世のくらし 案にしよう 露帝云い……1899

オランダ、ハーグに 寄り集って 乱を忘りよと 露帝云う……1899

全年 北清事変起る (東洋史を見よ)

1900 ⑤ 英国、オレンジ自由国及びトランスバール共和国合併 ○ドイツ  
及び米國サモア群島分奪 ○北清事変終る (日本史を見よ)

1901年 シベリヤ鉄道浦塩に通ず

▲ 露の鉄路 輾<sup>ツグチ</sup>は延びぬ 浦塩へ……1901

ウラルとびこえ 露は鉄路の 輾<sup>マケネジ</sup>のぼした 浦塩へ……1901

1902 南阿戦争終り、オレンジ自由国、トランスバール滅さる

1902年 日英同盟成る (明治35年1月)

▲ 両国が 和平の為に 気を協せ……1902

(日本史全項を見よ)

1903 パナマ運河条約成る ○パナマ共和国成る

1904年 日露戦役起る (明治37年2月)

▲ 露の不義を 我は懲らさん 天に代り……1904

(日本史全項を見よ)

(年記)

1904 ④ 英仏協商

1905 ⑨ 日露講和 (日本史を見よ) ○日英攻守同盟成る

1906 ロシヤ憲法發布

1907年 三国協商成る (露英・日露・日佛)

▲ 露英、露和佛 和親協商 実を結ぶ……1907

意気を協せて 乱理に立と、和親三国 実を結ぶ……1907

1908 ② トルコの憲法發布 ⑩ 埃匈国、ボスニヤ及びヘルツェゴビナ  
二州合併 ○ベルギー、コンゴ自由国合併

1908年 米人ライト兄弟の飛行機発明

▲ ライト等が 技<sup>ツギ</sup>に飛行機 世に出たり……1908

兄と弟の ライトの技に 技に飛行機 世をかける……1908

1910 ⑩ ポルトガル革命 ○ロンドン、耶会 婦人議員選出

1910年 文豪トルストイ死す

▲ レオ殿の 愛の生命に 別る、世……1910

今はさらばと レオ・トルストイ 愛の世を去る 別れして……1910

1911年 イタリア、トルコ戦役起る

伊太利はさきに、チュニス占領に失敗してから、その  
東隣トリポリを得ることを望んで居た。偶々1909年、  
トルコに革命あり、青年トルコ党がマホメット五世を擁立  
し、内政改革を企てるを見、イタリア之を憂え、此年九  
月、正当の理由も亦く突然トリポリの割譲をトルコに要  
求して拒まれ、為に両国戦を開くに至った。

▲ 理が非でも 伊太利トルコに 云いがり……1911

エーゲトリポリ 理も非も亦しに 行って取ったり 伊太利が……1911



(附記)

伊土戦況及終局 (ローザンヌ条約)

此役トルコ軍振わず、イタリアの海陸軍はトリポリ及びエーゲ海上の数島を占領した。

バルカン諸国又之に乗じ、翌1912年トルコを攻めたので、トルコ遂に屈し全年ローザンヌ条約を結びトリポリ及びキレナイカ地方を伊太利に譲り事落着した。

(年記)

1911. ノルウェー人アムンドゼン南極発見

1912 ローザンヌ条約 (伊土戦役終る)

十九世紀の文明

- 物理学 {
  - マイエル、ヘルムホルツ (エネルギー保存説)
  - ファラデー、マクスウエル、ケルビン (電磁気論)
  - (独) レントゲン (X光線発見、電子説)
- 化学 {
  - ベルテロウ、ファントウホフ
  - リイビッヒ (農藝化学)
  - リンデ、ギューア (水素・酸素・空気液化)
  - (仏) キュウリ夫妻 (ラジウム発見)
- 生物学 {
  - ラマルク
  - ダーウイン (進化論大成、種の起原著)
- 植物学 {
  - フッカー
- 医学 {
  - パスツール (伝染病予防、接種法、狂犬病治療法発見)
  - コッホ (細菌学)
  - (独) ペテンコーヘル (衛生学)
  - (英) リスター (クロホルム麻酔療法発見)
  - ウイルヒョウ (病理学大成)
- 天文学 {
  - ルベレー (海王星発見) ニュウカム
- 数学 {
  - ガウス、ポアンカレ
- 社会学 {
  - (仏) コント (社会学創始)
- 史学 {
  - (独) ランケ (科学的研究法創始)
  - ジーバル、トライケ、モムゼン、グロート、フリーマン、(仏) キゾウ
- 経済学 {
  - (英) ミル、リカード、シモン、ワグネル

- 博物学者 {
  - フーベルト (南米及中亞探検)
  - (独) リヒトホーレン (支那地質調査)
  - (英) リビングストン、スタンリー (アフリカ内地探検)
  - スエーデン (五回アジア内地探検)
  - (独) アムンドゼン (1911年南極に達す)
  - ペアリイ (1909年北極に達す)

- 汽船発明 = (米) フルトン
- 汽車発明 = (英) スタブソン
- 電信発明 = (独) ガウス、ウーベル、モルス改善 (英明)
- 無線電信発明 = (伊) マルコニ
- 蓄音機 = (米) エジソン (発明)

- 兵器 {
  - 水雷 (魚形水雷) 綿火薬、遠射砲、後装填発銃
  - 甲鉄艇、潜水艇等発明

- 航空機 {
  - (独) リリエントール (米) ライト兄弟の飛行機
  - (独) ツェペリンの飛行船

- 哲学 {
  - ドイツ {
    - カント (近世哲学南祖)、フヒテ、ヘーゲル
    - ヘルバルト、ハルトマン、シヨペンハウエル、シェリング
  - 英国 = ミル、スペンサー
  - 仏国 = コント

- 文学 {
  - 詩文 {
    - 英国 = バイロン、デニソン、ウオヅウホース
    - 独乙 = ハイネ
    - 米国 = ロングフェロウ、エマソン
  - 歌劇 = ドイツのワグネル
  - 近代劇 = イブセン
  - 評論 = 英のラスキン、カーライル、マコウレイ
  - 小説 {
    - 英国 = スコット (歴史小説の祖) ゴッテンズ
    - 仏国 = シマートブリヤン、ゾラ、ユーゴウ
    - ロシア = トルストイ

- 美術 {
  - 絵画 {
    - 佛国 = ダビッド、マネー、ミレー、コロー
    - 独乙 = リッツェル、レンバハ
    - 英国 = ターナー、ロセック
  - 建築 {
    - 独乙 = シンケル
    - 仏国 = ガルニエ
  - 彫刻 {
    - 伊国 = カノバ
    - 仏国 = ロダン
    - 独乙 = シワンターレル、シヤード
    - 丁株 = トルワルドゼン

世界的事業

- 万国博覧会 (1851年始めてロンドンに開く)
- 赤十字社 = ナイテングール、ソルフェリノ、三浦西人ジエノウ等
- 万国郵便同盟、電信同盟
- 万国平和会議 = ロ帝ニコラス二世首唱
- 国際語運動

## 1912年 第一バルカン戦争起る

イタリア、トルコ戦争により、トルコの勢が弱ったのに  
乗じ、豫て野心を持って居たブルガリヤ、セルビヤ、モ  
ンテネグロ、ギリシヤの四国は聯盟して、此年トルコに  
宣戦した。依ってトルコは急に伊太利と和しバルカン諸  
国と戦ったがその軍敗北、一時休戦してロンドンに講和  
会議を開いた。

▲ 聯合で うどの大木 こきおろし……1912

伊土の戦で 利を失った うどの大木 こきおろす……1912

(附記)

### 1. 第二バルカン戦争 (1913年)……(ブカレスト講和)

バルカン諸国は、トルコから得た地の分割につき、ブルガ  
リヤの所望の過大亦処から争を起し、遂に第二バルカ  
ン戦役を見るに至った。

トルコは又之に乗じて兵を出して回復を図り、ブルガリヤ  
を破り、此年ルーマニヤのブカレストで講和した。

### 2. バルカン戦争の結果

(ア) トルコはそのヨーロッパ領の大半を失う。

(イ) 他のバルカン諸国勢昂る。

(ウ) アドリア海岸に 永世局外中立国アルバニヤ国を新設。

(年記)

1913 第二バルカン戦争 (⑧) ブカレスト講和

⑩ パナマ運河成る

1914 米国婦人参政案敗る (⑥) 奥国皇太子暗殺

## 1914年 パナマ運河開通(1903--)

米国の国力は益々伸張し、太平洋に領土を得たので、太西・太平洋をつなぐ運河の必要を感じ曾て佛人レセップスが着手して失敗したパナマ運河会社の権利を買収し、偶々コロンビヤが独立したパナマ共和国を兼認して運河地域を永久に租借し1903年独力開鑿工事を始め、遂に前年六月その功を竣え、かくて合衆国は大に海軍  
此年八月開通した。を拡張し太平洋上に雄飛の歩を進めた。

▲ 西洋を 運河パナマで つかきけり……1914

アメの国では 両大洋を 運河パナマで つかいだり……1914

## 1914年 世界大戦役起る

遠因 = ヨーロッパの国々は、条約・同盟其他の手段により辛じて争ふきを得て来たが、二十世紀の初頭前後からその均勢漸く危くふり、(1)バルカン半島に於る汎スラブ主義と汎ゲルマン主義との衝突があり、(2)独帝ウイリヤム二世が「ドイツの将来は海にあり」と叫んで海軍につとめてから、英独兩國利害の衝突があり、(3)1870年以来独佛兩國の国際的及目があり、形勢甚だ陰悪を極めて居

た。  
一七六

近因 = バルカン半島では此頃セルビヤの勢漸く盛とふり、遂に附近の同族を併せて大セルビヤ国を建てようとしたが、1908年ボスニヤ・ヘルツェゴビナは奥大利に併せられ、又ブカレスト条約によって中立国アルバニヤが成立し、その西進の出口が塞がれたので、こゝにセルビヤは全く積年の望を失い深く奥大利を怨んだ。

導火 = 偶々此年六月、奥国皇太子フランシス=フェルジナンド夫妻のボスニヤ巡遊を機としセルビヤの一青年が之を暗殺したので、七月廿八日奥大利と戦開け、これが導火とあつて多年列強間に蟠つて居た反感が一時に勃発し、豫てセルビヤを後援して居た露西亜が戦備を整えるを見て、奥大利の同盟国ドイツ之に宣戦し、次で全年フランス・ベルギイ・イギリス・モンテネグロ・日本等の諸国が露国と行動を共にし、こゝに世界未曾有の大戦乱が起るに至った。

▲ <sup>ワシ</sup>六合に <sup>ハ</sup>うずまき起る <sup>ハ</sup>関の声……1914

因果めぐつて 六合ゆらぎ <sup>ゴッ</sup>いのち渦巻く 土の業……1914

(附記)

### 1. 交戦諸国

聯合方 (括弧内の数字は参戦日附)

1914 = セルビヤ(7.28) モンテネグロ(7.28) ロシヤ(8.1)  
ベルギイ(8.1) フランス(8.3) イギリス(8.4) 日本(8.23) 一七

1915 = 伊太利 (5.23)

1916 = アルバニヤ (1.25) 葡萄牙 (3.9) ルーマニヤ (8.27)

1917 = アメリカ合衆国 (4.6) キューバ (4.7) パナマ (4.7) 希臘 (6.30)  
シヤム (7) リベリヤ (8) 支那 (8) ブラジル (10) ガテマラ (4)  
コスタリカ (4) ニカラガ (5) ハイチ (7) ホンジュラス (7)

### 同盟方

1914 = オーストリア・ハンガリ (7.28) ドイツ (8.1) トルコ (10.29)

1915 = ブルガリヤ (10.16)

## 2. 世界大戦況

### (ア) 西部

ドイツ軍ベルギーを侵し、佛国に突入、マルヌ河畔で佛将ジョツフルの爲に打退られ、其後烈しい塹壕戦に佛将ペタン死守ドイツ軍失敗、英、葡、米、ベルギー軍奮戦

### (イ) 東部

初めロシア軍東プロシヤに進出、勢あり、独将ヒンデンブルグ勇戦ロシア軍を逐い、波蘭に侵入、一方独将マッケンゼンはガリシヤ方面のロシア軍を破る。

### (ウ) バルカン方面

マッケンゼン將軍ガリシヤの露軍を破り南下、セルビヤモンテネグロ軍大敗して独埃軍之を占領  
○バルカン半島、島方面では、英佛軍サロニカ占領其他は聯合軍不利。

### (エ) 西アジア方面

ロシア軍、アルメニヤ方面からトルコに侵入、英軍エルサレム占領アラビヤの独立を援け、バグダード占領

### (オ) 東洋方面

日本軍はドイツ権内の膠州湾攻撃、青島占領 (1914.11)  
日本海軍南洋出動ドイツ植民地をとる。

### (カ) 海戦

英国海軍ドイツを封鎖、ドイツ海軍は軍港内に隠れ、唯潜航艇で大西洋、地中海方面を荒す、1914年12月太平洋のドイツ艦隊は南米フォークランド島沖で英艦隊に撃沈され、海上権とドイツ植民地は全部聯合方に占められた。日本海軍も亦地中海に出動した。

### (年記)

1915 ① 北海の英独海戦

1916 ② 独軍ベルデン大攻撃開始 (-6月) ③ パリの聯合國  
経済會議 ④ ホーランド独立宣言、埃帝ジョセフ死  
○ 英キッチナー元帥死

1917 ③ ロシヤ革命、新政府成る ④ ケレンスキイの政府倒れ  
レーニンの過激政府代る

1918 ① 米大統領ウイルソン十四条の平和意見発表 ② 露過激派  
政府モスコウに移る ③ 独帝退位 和蘭に遷る、世界休  
戦条約成る (11月) 独社会党假政府成る、独埃諸邦共和  
宣言

## 1919年 世界大戦役終る

(巴里ベルサイユの講和其他)

大戦勃発以来、聯合軍の結束は次第に固く優勢とあつた。そして其後各国の情勢は大いに變つた。

露西亞は1917年3月社会主義の革命党・労働者等の暴動起り帝政は廢せられ、やがて過激派政權を執り、翌年二月ドイツと單獨講和をして旧露は瓦解しロマノフ王朝は仆れた。

西部戦場では、佛将フオッシュ元帥、聯合軍總司令官とあり、1918年7月ドイツ軍を逆襲し所謂ヒンデンブル線を突破したので、独軍すべて退却した。

独・埃兩國は国鎖されて国内物資欠乏し暴動起り又同盟国あるブルガリヤ・トルコ相次で聯合軍に降り勢衰えた。偶々1918年11月、独のキール、伯林地方や、埃の

ウィーンで革命が起ったので、遂に独帝ウイリヤムニ世、  
奥帝キヤールス一世共に位を退き、独帝はオランダに、  
奥帝は瑞西に逃れ両帝室仆れた。

やがて共和政府成ったが戦禍により人民益々苦んだ。  
依て是等の新政府は1918年11月11日聯合軍に対して、  
無条件降伏の休戦条約に調印し四年半に亘った大戦が一  
先ず終った。此機に乗じ ブルガリヤ は全く奥太利から独  
立した。

ベルサイユの講和 = 独・奥兩國の講和提議により此年、  
(1919)  
英・佛・日・米・伊の五大国を始め大戦関係諸国は講和  
委員を巴里に出し、講和に關する討議を為すこと五ヶ月、  
六月廿八日、独逸先ず講和条約に調印しついで九月、奥  
太利・ブルガリヤ之に倣い、翌年八月トルコも亦調印し、  
世界大戦愈々終を告げた。

▲ 乱果て、新たに見ゆる 黎明の...-1919

今は世界の 乱離も止んで 新しい世の 雲が浮く...-1919

(附記)

### 世界大戦の和約及結果

#### 1. 対ドイツ条件 (1919年6月ベルサイユ和約)

(ア) アルサス・ロートリンゲンニ州と、ザール河域の炭坑をフ  
ランスに譲ること。

(イ) モレネ・オイペン・マールメティ三地方をベルギイに譲る。

ハ。

(ウ) 海外植民地の一切の権利をすてること。

(エ) ポーランド新興國に地を譲ること。

(オ) ダンチツヒを自由市とすること。

(カ) 陸軍及海軍の制限を定むること

(キ) 山東半島に於る一切の権利を日本に譲る。

(ク) 聯合國の命ずる借金を支拂う。

其他。

#### 2. 対奥太利条件 (1919年9月、サンゼルマン和約)

(ア) 奥國は、聯合國の定めたその新國境を認めること。

(イ) チェックスロバキヤ國及びユーゴスラビヤ王國の独立を  
認めること。

(ウ) 聯合國がトルコ及びブルガリヤと結ぶべき協定を認  
めること。

其他。

#### 3. 対トルコの件 (1920年8月、セービル和約)

この講和条約によりトルコのヨーロッパ領殆ど失われ、  
又アジア領内のシリアは佛國、パレスチナ及びメソ  
ポタミヤは英國の委任統治となる。

#### 4. 民族自決主義

講和會議に當って、米國大統領ウイルソンの提唱によ  
り、大國の勢カ下に屈服せられた小民族の獨立を援け  
たが大戦によりできた新興國は、

(ア) ポーランド

(イ) ユーゴスラビヤ

(ウ) チェックスロバキヤ (旧奥國領)

(エ) フィンランド、エストニヤ、ラトビヤ、リトワニヤ (旧露領)

#### 5. 國際聯盟の成立 (1920年1月)

講和會議に當り、米國大統領ウイルソンの首唱により  
國際聯盟が成立した。

之は大戦の慘禍にこり再び斯る不幸を来らしめざる  
ようどの列國の願により世界の恒久平和をもたらす  
べき機關として成立されたものである。

而して全年11月ゼネバで開かれた最初の聯盟會議には、海洋の自由、軍備制限、又日本の主唱に由る人種平等案等が論議されたが満足ある議決を見なかった。

6. ワシントン會議 (1921年11月)

大戦後、各国財政に窮し、国民の負担が重くなったので軍備縮少の輿論が盛に合った。依て米大統領ハーデンは日・英・米・佛・伊の五大国と支那、ベルギー、和蘭、ポルトガルの委員をワシントンに招き、軍備制限、太平洋及極東問題を議した。

- (ア) 四国協約 (日・英・米・佛)  
太平洋に於る各国の領土・利権尊重、日英同盟廢棄
- (イ) 九国協約  
支那の領土及自主権尊重
- (ウ) 海軍主力艦制限比率  
英・米各5、日3、佛・伊各1.75
- (エ) 日本の膠州湾・英国の威海衛・佛の廣州湾を支那に還すと声明

(年記)

1919 ① ルーズベルト死 (1858生) ② エーバルト 独逸大統領当選  
③ ベルサイユ和約 ④ サンゼルマン和約 ⑤ ワシントンに國際労働會議 開会 ⑥ 聯合國 フルガリヤ 商講和 (パリにて)

1920年 國際聯盟の成立 (1月)

▲ 類呼んで 國の聯盟 湧き立つ日 --- 1920  
抱き合ふと 類よび交し 國が聯盟 湧き立つ日 --- 1920

1920 ⑦ 対トルコ和約 (ゼービルにて) ⑧ 國際聯盟第一總會ゼネバに開会 ⑨ 國際聯盟會議、日本の委任統治法

1921年 ワシントン會議起る (11月)

▲ 類をもて 國が集る アメの國 --- 1921  
あとの為にと 類呼び交し 會議開いた アメの國 --- 1921

【附録】

救字式国音図表

1 と、ひ	ア	イ	ウ	エ	オ	拗音			
	a	i	u	e	o	ā	ī	ē	ō
2-	カ	キ	ク	ケ	コ	キヤ	キユ	キエ	キョ
(2w)	クヤ	クイ		クエ	クオ				
3-	サ	シ	ス	セ	ソ	シヤ	シユ	シエ	シヨ
4-	タ	チ	ツ	テ	ト	チヤ	チユ	チエ	チヨ
(4w)	ツヤ	ツイ		ツエ	ツオ				
5-	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ	ニユ	ニエ	ニョ
6-	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ	ヒユ	ヒエ	ヒョ
(6w)	フヤ	フイ		フエ	フオ				
7-	マ	ミ	ム	メ	モ	ミヤ	ミユ	ミエ	ミョ
8-	ヤ		ユ		ヨ				
9-	ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ	リユ	リエ	リョ
W-	ワ								
G-	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギヤ	ギユ	ギエ	ギョ
(Gw)	グヤ	グイ		グエ	グオ				
Z-	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジヤ	ジユ	ジエ	ジョ
D-	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ヂヤ	ヂユ	ヂエ	ヂョ
B-	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ	ビユ	ビエ	ビョ
(Bw)	ブヤ	ブイ		ブエ	ブオ				
P-	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピヤ	ピユ	ピエ	ピョ

教字式国字綴方一般

- 鼻音ン……………ル ……:xに来る子音字を重ぬる。(例) 勝手は 2o44e 又は
- 促音記号…………… 韻字の上に ヽ印をのせる。(例) 勝手は 2ǎ4e.
- 長音…………… 韻字を重ぬるか又は 韻字に一印をのせる。  
(例) 法律は 6ooqi4u 又は 6ōqi4u
- 拗長音…………… 同じく 韻字を加えるか又は 韻字に ㄟ印をのせる。  
(例) 京都は 2ōo4o 又は 2ǎ4o
- 教字として用いたアラビヤ教字が紛れる憂のある時は下線とす。

△ 本書のまえがきに出した234の教字句  
打ちぬ名を 出師の表に とめて遊き<sup>レ</sup>を教字式国字で書くと、

2u4i4u5a.o 3ui3i.5o6a5i 4o7e4e8u2i  
とある。之を各句節の頭の外は 日本式ローマ字綴に使用すると

2utinu na.o 3uisino fuyoni 4omete yuki とある。

(案者より—此の式でタイプライターを造るとまことに)  
キイの数が少なくてすみます。

昭和三年二月十日印刷納本 (非賣品)  
昭和三年三月六日発行

著作・発行兼印刷人 山崎弘幾  
(版權所有) 東京府・千駄ヶ谷町998

発行所 **ヨコモジ社**  
東京府・千駄ヶ谷町九九八  
振替東京・69193番

316  
365

終